
平成22年度～平成24年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

大学を模擬社会空間とした 自立支援のための 持続的対人援助モデルの構築

A Comprehensive and Proactive Simulation of an Inclusive Community: Creating a Sustainable Model of Collaborative Services Using the University as a Core Resource.

研究成果報告書

Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University

平成25年3月

学校法人名：学校法人 立命館

大学名：立命館大学

研究組織名：人間科学研究所

研究代表者：土田宣明（立命館大学文学部教授）

「大学を模擬社会空間とした自立支援のための 持続的対人援助モデルの構築」

最終報告にあたって

本報告書は、平成 22 年度から平成 24 年度までの 3 年間、表記タイトルで行われてきた私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の総括にあたるものである。

立命館大学は、70 年近くに渡り市民に公開した土曜講座を実施してきたように、地域に開かれた大学としてその特色を培ってきた。また近年では、「対人援助」(Human Services)に注目し、学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザイン」(平成 12 年～平成 16 年)、オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学プロジェクト」(平成 17 年～平成 21 年)などの事業を通じ、高齢者、障害者(児)、(男性)介護者、外国人、といった人たちのウェルビーイングを向上させるための基礎的・実践的研究を行ってきた。

本プロジェクトの目的は、立命館大学においてこれまで蓄積してきた研究のいっそうの高度化をはかることにあった。具体的には、様々な人々が相互に出会い社会的役割を担うことのできる地域を創造するためには、どのような物理的・社会的・情動的支援が最も有効かを、組織的・系統的に検討することに目的があった。

以上のような背景や目的のもと、対人援助のための社会的資源(当事者団体や家族会、サポートグループ、NPO など)との協働により、様々なケアを具体化する際の根拠地としての大学の在り方を模索してきた。さらに「日本対人援助学会」という実践現場と研究活動を結ぶ学術団体との連携により、大学という「場」が、地域構成員との連携によって、まさに社会貢献と学術創造を共に達成するひとつの拠点となることを目指して研究を推進し、研究成果を発信してきた。

3 年間にわたる研究成果は、論文 190 編、著作 97 編という膨大なものとなった。成果報告としては、さらに「共同対人モデル研究(Research for Collaboration Model of Human Services)」として、今年度(2013 年 3 月現在)までに、10 巻を刊行できた。なお、これらの刊行物は、本プロジェクトおよびチーム活動の紹介とともに Web 上で遅延なく公開されてきた。

以上のように、本プロジェクトは、対人援助の構築のために、大学という地域資源をどのように活用していくか、その先駆けとなるモデルを残すことができたのではないかと考えている。

研究代表者：土 田 宣 明

目 次

最終報告にあたって

研究成果の概要..... 1

3 年間の活動報告

高齢者支援チーム.....土田 宣明.....69

就労支援チーム.....望月 昭.....72

心理バリアチーム.....東山 篤規.....77

発達支援チーム.....竹内 謙彰.....81

ケア・コミュニティチーム.....秋葉 武.....85

アーカイビングチーム.....佐藤 達哉.....89

研究業績のウェブリンク先.....93

プロジェクト番号

S1002008

**平成22年度～平成24年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 立命館 2 大学名 立命館大学

3 研究組織名 人間科学研究所

4 プロジェクト所在地 京都市北区等持院北町56-1

5 研究プロジェクト名 大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築

6 研究観点 大学の特色を活かした研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
土田 宣明	文学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数 39名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
土田 宣明	文学部・教授	高齢者の認知機能の維持	研究代表者 高齢者支援に関する研究
望月 昭	文学部・教授	障害学生への教育バリアー支援と障害者の就労支援	障害者支援に関する研究
吉田 甫	文学部・教授	高齢者の認知機能の維持	高齢者支援に関する研究
服部 雅史	文学部・教授	推論に関する基礎研究	バリア知覚に関する研究
東山 篤規	文学部・教授	高齢者の身体の位置や方向の知覚	バリア知覚に関する研究
藤 健一	文学部・教授	健康維持過程における体重コントロールの行動分析に関する基礎的実験研究	バリア知覚に関する研究
尾田 政臣	文学部・教授	要因変動に対する感受性の差異に関する研究	バリア知覚に関する研究
北岡 明佳	文学部・教授	高齢者の錯視	バリア知覚に関する研究
星野 祐司	文学部・教授	援助活動に関する認知心理学的アプローチ:学習と記憶	バリア知覚に関する研究
春日井 敏之	文学部・教授	子育て支援、思春期・青年期の人格発達研究	障害者支援に関する研究
宇都宮 博	文学部・准教授	子どものいない若年夫婦の「親となること」をめぐる葛藤と社会支援に関する基礎的研究	障害者支援に関する研究
荒木 穂積	産業社会学部・教授	発達障害児治療教育プログラム開発	障害者支援に関する研究
櫻谷 真理子	産業社会学部・教授	子育て支援、思春期・青年期の人格発達研究	障害者支援に関する研究

プロジェクト番号

S1002008

小澤 亘	産業社会学部・教授	外国人・高齢者・障害者支援	障害者支援に関する研究
竹内 謙彰	産業社会学部・教授	発達障害児治療教育プログラム開発	障害者支援に関する研究
山本 耕平	産業社会学部・教授	子育て支援、思春期・青年期の人格発達研究	障害者支援に関する研究
廣井 亮一	文学部・教授	ジャスティスクライアント論(臨床と司法)	ニーズの多様性についての研究
中村 正	産業社会学部・教授	新しいニーズである加害者・逸脱者臨床モデルの構築	ニーズの多様性についての研究
松田 亮三	産業社会学部・教授	保健医療分野を対象にした地域における自己決定支援の研究	支援の広がりとかケアコミュニティの研究
津止 正敏	産業社会学部・教授	男性介護者支援の包括的研究	支援の広がりとかケアコミュニティの研究
峰島 厚	産業社会学部・教授	障害のある人の地域生活支援を援助する制度開発	支援の再構成の基礎的研究
崎山 治男	産業社会学部・教授	ケアする人のケアについての理論的研究	ニーズの多様性についての研究
斎藤 真緒	産業社会学部・准教授	男性介護者と家族・介護者支援に関する研究	支援の広がりとかケアコミュニティの研究
秋葉 武	産業社会学部・准教授	ヒューマン・サービスと非営利組織によるネットワークの研究	支援の再構成の基礎的研究
筒井 淳也	産業社会学部・准教授	ネットワークと社会資本についての研究	支援の広がりとかケアコミュニティの研究
佐藤 達哉	文学部・教授	情報金庫実現のための総合研究	情報金庫構築班
中川 吉晴	文学部・教授	京都の地域特性をいかした対人援助職のあり方	地域ニーズ掘り起こし班
林 信弘	文学部・教授	東洋思想(禅)を活かした対人援助	地域ニーズ掘り起こし班
八木 保樹	文学部・教授	対人援助の効果の実験的研究手法の開発	情報金庫構築班
岡本 直子	文学部・准教授	劇化手法をもちいた地域特性ニーズの喚起方法開発	地域ニーズ掘り起こし班
矢藤 優子	文学部・准教授	電子ペンを用いた記録蓄積の研究	情報金庫構築班
大谷 いづみ	産業社会学部・教授	生命倫理における当事者主催の研究	研究倫理・情報倫理班
立岩 真也	先端総合学術研究科・教授	障老病異の共生と分配に関する研究	研究倫理・情報倫理班
松原 洋子	先端総合学術研究科・教授	情報デバイスと倫理の接点の理論研究	研究倫理・情報倫理班
渡辺 公三	先端総合学術研究科・教授	文化人類学における研究倫理の研究	研究倫理・情報倫理班
天田 城介	先端総合学術研究科・准教授	障老病異当事者の聞き取りと倫理	研究倫理・情報倫理班
村本 邦子	応用人間科学研究科・教授	トラウマ解消と平和構築からみた対人援助	地域ニーズ掘り起こし班
滝野 功	応用人間科学研究科・教授	総合的心理学のありかたと地域ニーズ	地域ニーズ掘り起こし班
朝野 浩	教職教育推進機構・教授	当事者活動履歴としてのキャリアパスポート	情報金庫構築班
(共同研究機関等)			

プロジェクト番号

S1002008

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
京都の地域特性をいかした対人援助職のあり方	立命館大学文学部・教授	中川 吉晴	地域ニーズ掘り起こし班

(変更の時期:平成 24 年 4 月 1 日)



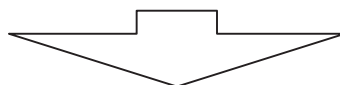
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
立命館大学文学部・教授	同志社大学社会学部・教授	中川 吉晴	地域ニーズ掘り起こし班

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
総合的心理学のありかたと地域ニーズ	立命館大学応用人間科学研究科・教授	滝野 功	地域ニーズ掘り起こし班

(変更の時期:平成 24 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
立命館大学応用人間科学研究科・教授	京都橘大学健康科学部・教授	滝野 功	地域ニーズ掘り起こし班

11 研究の概要

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

目的と意義

本プロジェクトの目的は、立命館大学の特色と研究実績を踏まえ、それを発展させるために、高齢者・障害者等の自立に向けた継続的(持続的)支援において、「大学」という人的・物理的・情報的研究資源をもつ有機的な場を、機能的な地域資源あるいは継続的シミュレーションの場として構造的に活用し、地域で相互に関係し合う人間生活のあり方について、実証的に検討することである。

立命館大学は歴史都市防災研究、京都学とデジタル人文学、京都文化等、地域に根ざした研究を推進するとともに、2011 年で 65 周年を迎えた土曜講座を実施してきたように、地域に開かれた大学としてその特色を培ってきた。また近年では、「対人援助」(Human Services)に注目し、学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザイン」(平成 12 年～平成 16 年)、オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学プロジェクト」(平成 17 年～平成 21 年)などの事業を通じ、高齢者、障害者(児)、(男性)介護者、外国人、といった人たちのウェルビーイングを向上させるための基礎的・実践的研究を行ってきた。

本プロジェクトでは、これまで蓄積してきた研究のいっそうの高度化をはかるとともに、様々な人々が相互に出会い社会的役割を担うことのできる地域を創造するためには、どのような物理的・社会的・情報的支援が最も有効かを、大学という場を「模擬社会空間」として活用することを通じて、組織的・系統的に検討することである。

このような本研究プロジェクトの意義は、高齢者・障害者の継続的な自立支援について、具体的な社会実装までを含めた実践的・実証的な展望を、さまざまな様態に応じて実証的に明らかにし、それを社会に向け提案することにある。

計画の概要

本研究プロジェクトは、以下の大きく 3 つのテーマについて、実証的あるいは理論的に研究を推進した。

(1) 高齢者・障害者への対人援助の実証的研究においてどのような設定や支援が最も有効かを組織的・系統的に検討する。

(2) ケアする人のケアのありかたをコミュニティベースで実践的に検討する。

(3) 継続的な支援に不可欠な情報移行や事例アーカイブの共有・蓄積の方法を検討する。

これらの内容について、対人援助のための社会的資源(当事者団体や家族会やサポートグループ、NPO など)との協働により、様々なケアを具体化する際の根拠地として、さらに「日本対人援助学会」という実践現場と研究活動を結ぶ学術団体との連携により、大学という「場」が、地域構成員との連携によって、まさに社会貢献と学術創造を共に達成するひとつの拠点となることを目指して研究を推進する計画とした。

計画上特記すべきなのは、個別の当事者が実際に活動する場面に必要な支援(人的・物理的・情報的な環境設定)の内容を実証的に検証するために、大学構内に、「社会臨床実習室」を新設し実証的研究を行うことであった。この施設は、障害のある成人、生徒、高齢者が、実際にそこで活動(主として就労関連)を行い、従来の地域事業所や学校などでは統制できない支援に関わる環境変数について分析的にその評価研究を行うことを可能とするものである。地域高齢者を対象としては、大学を認知リハビリテーション活動の場とすることで、高齢者の認知機能にどのような変化がみられるかを実証的に分析した。

このような諸活動を通して、そこで得られた個別個人のキャリア形成に必要と思われる経過に関する情報(ポートフォリオ)をどのように当事者を含めた関係者間で蓄積・共有・移行できるかというシステムについて、そのハード・ソフトの双方の運営方法を「キャリア支援アーカ

イブ室」というデータバンクの仮想運用を通じて検討を行った。

さらに、各研究ユニットから得られた研究成果は、国内外の学会やシンポジウムを通して広く公開した。

(2) 研究組織

組織概要

本プロジェクトは次の 3 つの研究テーマを用意しており、それぞれに研究テーマユニットを設定した。また、ユニットの下部には研究チームを設け、対人援助学の各論的研究を進める単位として組織化した。

3つの研究テーマと研究テーマユニットについては次の通りである。なお、研究チームについては、「各研究者の役割分担と責任体制」をご参照頂きたい。

<研究テーマユニット>

①「大学を(あるべき地域環境を先取りした)アクティブ・シミュレーションの場とした高齢者・障害者への対人援助の実証的研究」

●研究テーマユニット名:「高齢者・障害者の支援ユニット」

②「ニーズの多様化と支援の再構成—ケアする人のケアのためのコミュニティをととして」

●研究テーマユニット名:「ケアする人のケアユニット」

③「情報アーカイブとキャリアパスポートによる情報の蓄積と移行システムの構築」

●研究テーマユニット名:「情報蓄積と移行システムユニット」

なお、各研究参加者は、共通課題を遂行する研究組織の一員となった。また、対人援助関連の組織や専門職者との連携をはかるために情報アーカイブや個人情報(キャリアパスポート)の管理運用を考える情報サービス管理運営委員会を立ち上げており、科学と実践が交差するプロジェクトとなるように配慮した。

研究代表者

研究代表者は、プロジェクトの全体総括とともに、年度ごとに共通テーマとミッションの呈示と確認をした。またリーダーズ会議を中心メンバーとして企画し、一般向け出版物の企画と編集、プロジェクト刊行物である「共同対人援助モデル研究」、Web コンテンツの統括、対外的な広報(関連他学会との連絡・協議、専用ブログ『対人援助学のすすめ』)などを担当した。また、当プロジェクトの社会還元のひとつとしての「対人援助学会」(2011 年 11 月に第 3 回大会を開催)の準備委員会との連絡調整役としてその運営と企画の一端を担った。

各研究者の役割分担と責任体制

研究テーマユニットと研究チーム

前記した機能連携的な研究テーマユニットとその下部機関としての研究チーム編成は次のとおりであった。まず、各研究者は研究テーマユニットと研究チームに組織化された。対人援助モデルの基礎を構築するためのテーマユニットとともに、対人援助モデル各論を深めるための研究チームとして組織され、基礎から応用までの広範な領域での課題をもって研究をすすめた。研究チームにはそれぞれチームリーダーが置かれ、研究代表者統括の下、チーム運営を、責任を持って行うこととした。なお、研究チーム内部、もしくはチームをまたがって複数の作業チームを組織して研究をすすめたところもある。

チームリーダー、研究代表者、人間科学研究所所長、研究所事務局からなるリーダーズ会議を開催し、プロジェクト推進のための具体的方針の策定、チーム間の研究状況の交流等を行った。参加研究者の数が多く大規模プロジェクトであるので、こうした組織的体制をとり、「持続的対人援助モデルの構築」という目的を実現すべく研究をすすめてきた。なお、プロジェクトへは母体となる人間科学研究所が全所的に係り、参加した研究者は 46 名に上った。

☆ 高齢者・障害者の支援ユニット

本研究テーマ全体の研究は、先進性と持続性の両立の難しい対人援助の挑戦的実践について、物理的・人的資源の継続が一定に担保される大学の持つ特性を最大限に活かし、共生地域に不可欠な支援環境を当事者と共に分析的に同定し、その結果を社会に向けて提言する「対人援助学」(Science for Human Services)の研究分野である。高齢者、障害のある個人などが、健常者とともに、様々な問題を抱えながらも相互に関係し高め合うことのできる地域の物理的社会的環境を、大学という構造化されたシミュレーション場面の中で同定する方法は、心理学、社会学、社会福祉学、教育学など、既存学範のモザイク的な総合ではなく、直接的な臨床的支援から最適環境を辿っていくボトムアップ型の知識創造をめざす新しい分野である。

＜研究チーム＞

- ①高齢者支援チーム
- ②障害者支援チーム
- ③バリア知覚チーム

☆ ケアする人のケアユニット

男性介護者(介助者も含む。広い意味では家族介護(助)者)、逸脱行動への対応、家族援助ニーズに応える素人援助者(ボランティアやNPOによる)、当事者が要援助者を支援する自助活動等、ニーズの多様化とともに支援のあり方やその担い手そしてケアの提供の仕方も変容している。本チームは「ニーズの多様性と支援の再構成」という視点からこうした変化の体系的な研究を行う。プログラム開発、社会への実装と定着、非専門家を含んだケアコミュニティの組織化という模擬的な社会臨床実験を計画した。「生活者と当事者の視点」を尊重する援助者のあり方が模索され、生きる場(環境)としてのコミュニティによる統合力に注目した支援の視界と技法と価値を確定した。ポイントは、「ケアする人のケア」のためのコミュニティ形成である。

＜研究チーム＞

- ④支援基礎論チーム
- ⑤ニーズ多様性論チーム
- ⑥ケアコミュニティ論チーム

☆ 情報蓄積と移行システムユニット

組織としての大学の持続性を利用し、大学という場が情報をもつことの可能性について考えた。大学は地域に永続する拠点として、そこに集う個々人の情報アーカイブを作ることが可能である。しかし、一方でこのことは、情報管理や個人情報保護といった風潮と対立する可能性がある。研究テーマ3においては、様々なニーズを持った地域住民のキャリア情報の蓄積・保護・活用に関する方法論的検討を行う。どのような条件のもとで何を達成したのか、という個人の活動履歴を「キャリアパスポート」システムに蓄える事で、その個人が他の場に移行したときの継続支援が容易になる。ただし、こうした情報利用には倫理的検討が欠かせないため、倫理的検討も行う。さらに、京都という地域に根ざしたニーズをくみ取るための研究や方法論の開発もこの研究テーマ3において行い、創発性を確保した。

＜研究チーム＞

- ⑦地域ニーズチーム
- ⑧情報倫理チーム
- ⑨情報金庫チーム

大学院生・PD及びRAの人数・活用状況

専任教員だけにとどまらず、助手や大学院生などの若手研究者や学外の研究者(助手・助教・客員研究員等)も積極的にプロジェクトに参加した。大学院生と学外研究者の参加人数は、平成23年度には161名となった。PDは、当該事業による補助金だけでなく、学内の雇用制度も活用し、平成23年度時点においては5名が学内外からの公募によって選ばれ研究協力を行っている。また、RAについても計2名が参画している。

研究チーム間連携

各チーム間の連携については、プロジェクトリーダー(研究代表者)、各研究チームリーダーが対人援助関連の組織や専門職者との連携をはかるため情報アーカイブや個人情報(キャリアパスポート)の管理運用を考える「情報サービス管理運営委員会」の立ち上げを行った。

研究支援体制

研究支援体制については、本学研究部リサーチオフィス(衣笠)が事務局業務を担い、日々の研究活動支援だけでなく、このプロジェクトを母体とした学外資金獲得業務等、多岐に亘りプロジェクトの運営に寄与している。また学内の各関連研究科事務室と連携し、大学院と研究の密なる研究推進の一端を担っている。

共同研究機関等との連携状況

各チーム単位に学外共同研究機関と連携してきた。チームごとに共同研究をするのにとどまらず、社会的実装としての組織や制度づくりを行う。主な共同研究機関を以下に挙げる。
共同研究機関：東京海洋大学、大阪障害者センター、クラーク大学、サレント大学、オランダ・ナイメーヘン大学、長崎純心大学、成城大学、香川大学、武蔵野大学、筑紫女学園大学、忠北大学、東京大学、長岡緩和ケア研究所、京都市西総合支援学校、ファースト・ステップ・ジョブ・グループ、児童養護施設つばさ園、日本生活協同組合連合会医療部会、名古屋文理大学情報文化学部、京都大学人文科学研究所、湖南省教育委員会、Institut des Etudes Avancees, Paris, France、Centre International d'Etudes de la Philosophie Francaise Contemporaine, Ecole Normale Supérieure, Paris, France、韓国障害学研究会、韓国国際障害学学会、リーズ大学、湘南工科大学、立正大学、ベルガモ大学、京畿道支援技術研究支援センター、東洋大学、慶應義塾大学、静岡県立大学、パステルラボ、日本ALS協会、トヨタ財団、社会安全研究財団、ハノイ師範大学、ホーチミン師範大学、舞鶴市、ハノイ第一ホープセンター、ヤーディン障害児学校、蘇州大学、上海星雨児童康健院、蘇州児童相談センター、京都市ユースサービス協会、京都シネマ、大阪市こども相談センター、近大姫路獨協大学、大阪市立阿武山学園、日本家族再生センター、株式会社島津製作所、男性介護ネットワーク、滋賀県社会福祉協議会、(株)公文教育研究会

(3) 研究施設・設備等

基本的なプロジェクト活動には、学術フロンティア推進事業(平成12～16年度)遂行時に建造し、本事業にて設備増設、建物改修を行った創思館465㎡を、教員・研究員約100名、院生約60名の計約160名が継続して使用している。研究装置としては、傾斜環境制御装置は5時間/週、感覚・行動測定機器類一式については10時間/週の平均使用実績がある。また創思館内におけるトレーニングルーム(遠隔ビデオカメラを新たに設置した部屋を含む4部屋)については20時間/週の使用、2Fの社会臨床実習室並びに地域共同オペレーションルームでは、地域や学外の機関と連携のある研究チームが模擬店舗を開設し、障害を持つ学生が店舗運営を行うシミュレーション実験を行い、また地域社会への窓口的業務を含め終日利用している。3Fのキャリア支援アーカイブ室では実際の耐火金庫が備えられコンピュータ

一管理がなされている。その他、個別のプロジェクトルームは、同じくほぼ終日、教員ならびに院生が使用している。

(4)研究成果の概要

<成果概要>

今回のプロジェクトではこれまでの研究実績を踏まえ、「大学」という研究資源をもつ有機的な場を、機能的な地域資源あるいは継続的なシミュレーションの場として構造的に活用し、地域で様々な問題を抱えながらも相互に関係し合う人間生活のあり方について、実証的に検討することを目的とした。「11 研究の概要」にて触れた研究テーマ1～3を進める際に、対人援助のための社会的資源(当事者団体や家族会、サポートグループ、NPO など)との協働により様々なケアを具体化する際の根拠地として、さらに日本対人援助学会という実践現場と研究活動を結ぶ学術団体と連携を図った。

以下には、まず研究的側面からの具体的成果を挙げる。

●固有刊行物(「共同対人援助モデル研究」)

3 つのテーマに分かれた系の下で行われた個別成果は、13. の「研究発表の状況」で詳細に記述したが、論文 190 編、著作 97 編、学会発表 224 回という膨大なものとなった。このプロジェクトの、成果報告としては、「共同対人援助モデル研究(Research for Collaboration Model of Human Services)」として、今年度(2013 年 3 月現在)までに、10 巻を刊行した。列挙すると、

報告書 1 家族介護者支援を考える-日本と英・豪・米の比較研究(Research on Support for Family Cares :Comparative Study of Japan, England, Australia and America)2011 年 1 月/
報告書 2 厚生心理学と質的研究法 ―当事者(性)と向き合う心理学を目指して―
(Practices in Qualitative Psychology : Taking Account of the Realities of Local Contexts)
2011 年 9 月)/ 報告書 3 歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み 国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録(Generational Transmission of War Trauma and Approaches to Reconciliation and Restoration Report on “Remembering Nanjing 2011”) 2012 年 2 月/
報告書 4 家族介護者支援の論理―男性介護者の介護実態と支援の課題―(The Logic of the Family Carer Support: The Actual Conditions and Supports of the Male Carer and Its Issues)
2012 年 2 月/ 報告書 5 人間科学と平和教育 ～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から(Human science and Peace Education: from a viewpoint of developing a history / peace education program based on Experiential Psychology)2012 年 10 月/
報告 6 変容する語りを記述するための質的研究法―TEM and Narrative as Archives ―(Qualitative Research For Describing The Life-Transformation Process: TEM and Narrative as Archives) 2013 年 2 月/ 報告書 7 “ふつつ”への適応からユニークな参加の創造へ―韓日若者支援の現状と課題―(Liberation from being obsessed about “common sense” and creation of the unique social inclusion ;the current circumstances and agendas of support for Korean and Japanese youth.) 2013 年 3 月/ 報告書 8 「介護退職ゼロ作戦」という社会運動 (Social Movement against Care Resignation) 2013 年 3 月/ 報告書 9 東アジアにおける自閉症スペクトラムとその家族の現状 (The Current State of Children with Autism Spectrum Disorder and Their Families in East Asia) 2013 年 3 月/ 報告書 10 持続的対人援助に向けた地域資源としての大学 (Developing sustainable support systems: The university as a community resource) 2013 年 3 月。なお、これらの刊行物は、当プロジェクトおよびチーム活動の紹介とともに Web 上 <http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model.html> で遅延なく公開されてきた。

●研究テーマユニットの成果

「対人援助学」という新しい学範の下で、研究活動のみならず、大学が、地域資源のひとつとして対人援助の実証的研究のシミュレーションの場として機能しうること、そして院生・大学生への教育活動の中で、「学」としての対人援助学が利用され、大学と地域、研究と実践および教育が相互に連携しながらプロジェクトが進行しうることを示した点が当研究の特徴のひとつであるといえよう。

高齢者・障害者の支援ユニットでは、創思館 2F の社会臨床実習室やトレーニングルームを活用し、地域社会に求められる支援環境を「先取り」し、それを大学という地域資源を利用して多角的に分析する「アクティブ・シミュレーション」を実施した。テーマを、1) 高齢者の活動支援、2) 障害学生の教育バリアフリー支援、3) 障害者の就労支援の 3 点に置いた。

1) 高齢者支援では、参加者が相互に社会的評価が得られる「場」はどのような構造と機能を必要とするか、そして「今できる」役割の創造に向けた過不足のない支援のありかたについて店舗や企業を模した「社会臨床実験室」における系統的分析によって多角的に追跡した。具体的には大学周辺の地域高齢者を対象とした認知リハビリテーション活動を行い、この実践を通して、音読・計算を主たる媒介としたコミュニケーション活動の、認知機能への維持・改善への効果を検討し、複数の学会においてその成果を発表した。また、さらに京都市北区役所、京都市左京区地域介護予防推進センター等と共同してこの取り組みの地域への普及を試みた。2012 年 2 月 26 日には公開シンポジウムを行い研究成果を広く一般に公開した*1。

2) 障害学生の教育バリアフリー支援に関しても、「社会臨床実験室」と実際のキャンパスの双方を用い様々な障害学生に対する物理的・情動的なバリア排除に向けて、人的援助との関連を含めた分析的な基礎・応用研究を行った。なお、作業を進めるにあたっては 2 つのチームを設けている。1 つ目の発達障害児・家族プロジェクトチームは、関わりに難しさを抱える子どもならびに家族の抱える困難に関わって、その具体的なニーズと支援のあり方を発達支援の視点から捉えて実践的な研究を行うことを企図して発足したチームである。フィールドは、学校、家庭、地域、専門機関などに及び、また、中国やベトナムなど諸外国の研究グループとの交流も位置づけた。①関わりに困難のある子ども(幼児、児童、青年を含む)の療育活動の継続、②特別なニーズを抱える子どもとその家族に対するニーズ調査(これについては立命館産業社会論集に質問紙調査研究の成果を論文として掲載*2 したほか、アジア太平洋自閉症会議(APAC)*3 ならびに日本特殊教育学会大会*4 にて報告した)、③発達障害児・者の生涯発達を見越した支援に関する研究(これについては、第 24 回日本発達心理学会大会にて報告する)などに取り組んできた。

他方の思春期・家族プロジェクトチームでは、困難を有する子ども・若者の総合的支援について実践及び研究を行っている。家族の貧困をはじめとする諸問題が、困難を有する子ども・若者の発達上の課題となり結実していることがある為、養護施設入所児のさまざまな虐待や不適切な養育と発達の危機及びサインズ・セイフティ・アプローチに関する研究を進めてきた。その結果は「児童養護施設における生活指導・援助の課題」*5 として報告を行った。また、内閣府の困難を有する子ども・若者の支援者調査企画分析会議委員として、全国の困難を有する子ども・若者支援の支援者を対象とした調査を行った。この結果は、内閣府 HP で公表すると共に各自治体や支援機関、行政に報告書を配布する。また、ひきこもりの若者を対象としたインタビューを実施し報告書を作成した。*6 さらに、韓日若者支援に関するシンポジウム*7 ならびに青年の親世代の夫婦関係をテーマとするワークショップなどに取り組んだ。

3) 障害者の就労支援は、知的障害のある成人・生徒を対象とした支援と、長期の「ひきこもり」の状態にある成人への支援とに分かれる。

第一の知的障害のある個人への就労支援に関しては、単なる「就職」支援ではなく、当事

者一人ひとりの継続的キャリアアップの支援を念頭にその包括的支援の方法を、「社会臨床実験室」と地域企業・事業所の双方において「学生ジョブコーチ(RSJC)」という学生を主体とする組織によって実践・研究された。この「学生ジョブコーチ」のプロジェクトにおいては、障害のある成人の施設外の就労実習の支援と、特別支援学校高等部生徒の就労自習において一般のジョブコーチでは実践が難しい詳細なデータ採取をともなう実践的・理論的研究を行った。成人を対象にした施設外支援では、①障害のある利用者による作業チームの仲間どうしの相互協力の可能性とその支援方法の検討、②利用者の就労行動の改善に役立つ記述・分析方法の検討が行われた。特別支援学校の生徒に対しては、主として「社会臨床実験室」(CafeRits:喫茶仕様模擬店舗)において、構造化された作業実践を通じて、就労関連スキルの訓練にとどまらず、個別の生徒のキャリアアップの軌跡を表現し将来の継続的就労支援に向けた情報移行を可能にするような「できますシート」(「ポートフォリオ」)の表現書式や機能についての検討が特別支援学校との協働のもとで行われた。この「できますシート」は、上記の特別支援学校の全学の「情報共有システム」としても検証され一部は実装されている。

第二には、「ひきこもり」の支援について、「ファーストステップ・ジョブグループ」(FSJG)という「親」を主体としたグループによる、個別の「ひきこもり」のままでも成立するジョブ(仕事)の創出とその後の展開が、「NPO きょうと」等の社会資源との協働で行われ、そのプロセスについて実証的な分析が行われた。

なお、いずれの研究も、必要な支援設定を実際の地域支援組織あるいは企業へ提言(アクティブ・シミュレーションの特徴)することを作業工程に含んでおり、このため、研究テーマユニット 2「ケアする人のケアユニット」、研究テーマユニット 3「情報蓄積と移行システムユニット」との連携は不可欠であり、とりわけ、当研究テーマ 1 で得られた個別の当事者に必要な環境設定を含めた支援経過を、継続的なポートフォリオとして機能させるための情報移行システムの構築は共同連携的に進められた。

これらの研究成果は、地域資源としての大学のあり方を広く内外に公開できるものとの確信を得るに足るものであった。大学が、地域資源のひとつとして対人援助の実証的研究のシミュレーションの場として機能しうること、そして院生・大学生への教育活動の中で、「学」としての対人援助学の妥当性を試していけることが実証された。また、大学と地域、研究と実践および教育が相互に連携しながらプロジェクトが進行しうることとも証明された。これら成果は、地域高齢者を対象した大学内での取り組み回数(年間約 70 回)、学生ジョブコーチによる支援成立件数(成人 10 事例、生徒 4 事例)、ファーストステップジョブグループ(約 7 事例)という数値に表れている。なお、他の研究テーマユニット同様、現時点で近似する学範に属する内外の学会発表、雑誌発表を行った。さらに、当プロジェクトを主幹する立命館大学人間科学研究所紀要「立命館人間科学研究」*8 また、日本対人援助学会*9～*14などで順次発表を行い、当プロジェクトの持つ固有な印刷媒体および専用 Web 媒体によって遅滞なく、その時点での成果を社会還元した。

ケアする人のケアユニットでは、ケアとコミュニティをキーワードとして、それぞれのメンバーが実証的・理論的研究を進めた。具体的な研究課題は以下の3つに区分けしている。1) 支援の再構成の基礎的研究(ソーシャルデザイン論―峰島、秋葉、2) ニーズの多様性についての研究(新しい臨床論―廣井、中村、崎山、松島)、3) 支援の広がりとはケアコミュニティの研究(津止、松田、筒井、斎藤)、である。この狙いは、地域における持続的な自立支援の基礎的な研究をもとにして、ニーズの多様化に対応した支援の領域を拡大することであり、男性介護者を支援するニーズ、虐待・DV に対応するニーズ、発達障害と家族援助にかかわるニーズ等をもとにし

て、i) ケアコミュニティをつくること、ii) 支援のためのプログラムを開発すること、iii) 地域のケア資源を社会資本とすること、である。また、関連学会での発表はもちろんであるが、当事者研究と結びついたケアコミュニティ論として、ケアする人自身が共に情報発信できるスタイルの確立、上記の i から iii の達成目標との関わりでは、男性介護者、虐待・DV対応支援、家族支援に関してケアのコミュニティの組織化、支援のための非専門家研修プログラムの開発、そしてそれらの地域への実装についても併せて当ユニットにおいて実践された。

実証的研究成果は以下の通りである。

①子育て支援

「子どもと家族の法と臨床」をメインテーマとして研究に取り組んだ。具体的な研究活動のひとつとして、弁護士と臨床心理士による実質的な協働体制による、子どもと家族に対する支援の実際について調査した。姫路市内の保育所および姫路市子育て支援室を訪問し、姫路市内における就学前の外国につながるの児童と保護者の現状把握を行った。またかながわ国際交流財団を訪問し、外国につながるの児童生徒を対象とした教育相談や教育委員会の取組についての取材を行った。

②虐待・トラウマ

虐待や暴力被害が女性・子どもに与える影響と支援についての研究を行った。支援については大阪市こども相談センターと共同しプログラムを作成。同市センターのほか実際の虐待親更生プログラムとして社会実装された。また、戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復に関する研究、村上春樹の文学に見る戦争トラウマの痕跡に関する研究、法と心理の協働に関する研究を行い、研究発表を行った。

③医療政策

日本の医療政策の展開について、特に 2006 年医療改革法の影響と意味づけについて検討した。多くの諸課題に直面し、地方自治・社会保障をめぐる政治の中で、医療政策の財政と責任をめぐる政治が進展している様を分析した。

④男性介護者・家族介護者支援

ヨーロッパを中心とする家族介護者支援政策に関する研究を行い、日本での介護者支援の方向性について検討した。また、男性介護者の介護生活実態を把握すべく、介護者に対するアンケート調査を実施し介護負担や仕事との両立の困難について具体的に明らかにした。

また、方法論および分析枠組みにかかわる理論的な研究成果は以下の通りである。

⑤観想的アプローチ

対人援助職者への観想的アプローチの研究をおこない、坐禅実習の継続という形での実践的研究、および仏教をはじめ関連文献の研究をおこなった。英文図書への寄稿、海外の学会での発表も行われている。

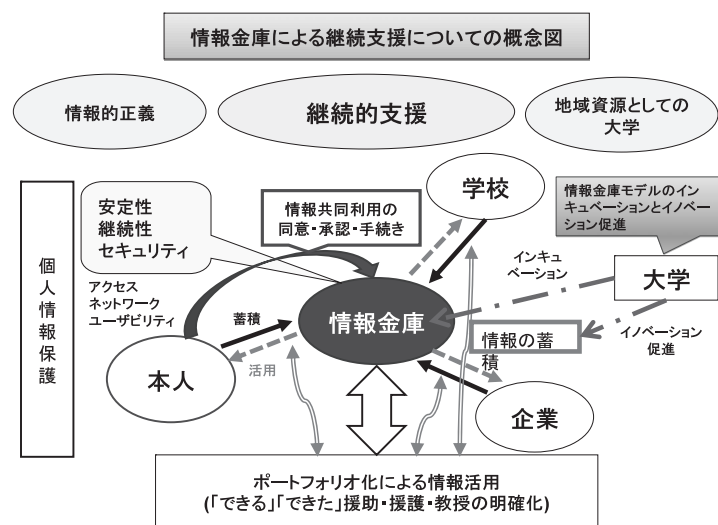
⑥投影ドラマ法

表現がもつ治療的意味について量的研究を行った。また、表現がもつ治療的意味として報告者が研究してきた「投影ドラマ法」の治療的可能性に関する論文を、本学応用人間科学研究科英語論文集に執筆した。加えて、新たな研究テーマとして、心理臨床学の立場からの子育て支援の可能性について探索すべく、文献を中心とした研究を行った。

⑦心理主義化

日本における心理主義化の動向について、主として雑誌記事を元にした分析を行った。その中で、自己責任原則と心理学的知との併走関係が強化されつつ支援の手法に取り込まれることを見いだした。

情報蓄積と移行システムユニットでは大きく3つのサブテーマについて研究を行った。第一に、情報金庫が構築され、今回のプロジェクトの参加者の情報蓄積、管理、移行方法の開発が試みられた。大学を社会資源として活用する様々な取り組みにおいて、参加者の参加履歴や成長を情報として蓄え個人カルテのようなものを作るにはどうすればよいかという点と、その情報をどのように保管すれば、リスクが少なく活用可能な形になるのかを京都市西総合支援学校などと連携し、検討・開発を進めた。なお、これら取り組みには、人間科学研究所情報サービス管理運営委員を立ち上げ、当研究ユニットのみならず、他2つの研究テーマユニット並びに本プロジェクト採択組織である人間科学研究所所長もメンバーとして加わり、プロジェクト全体の情報移行・倫理・正義について検討が加えられた。その結果、今回の研究においては、研究テーマユニット1 高齢者・障害者の支援ユニットにおいて、個人の履歴(カルテ)を「キャリアパスポート」という名称の仕組みとして制度化し、旅行のパスポートのように、本人にも他者にも学びの過程が可視化されやすい仕組み(フォーマット)を構築するに至った。また、新しい方法論として、行動観察、電子ペン記録システム、コンピュータシミュレーション、テキストマイニング、ナラティブ情報提示システムなども漸次理論化と開発が進められており、立命館大学におけるこれまでの10年間を超える取り組みによって開発されてきた考え方、そして技術を用いて対人援助における情報金庫の位置づけがなされた。なお、これらキャリアパスポートを活用しての情報蓄積、管理、移行方法に関する概念図は次の通りある。



第二に、上述したとおり研究倫理・情報倫理の検討を行った。応用倫理学の一部としての生命倫理学は、医学における人体に焦点があてられることが多く(結果として)生身の人間の具体的生活と研究の関係についての検討があまりなされてこなかった現状がある。生命倫理学の中で行われている医学・生理学研究を宛先とする議論を、人間とその生活を対象とする研究に適用するための理論的な検討を行った。

第三に、地域における大学のあり方について、地域住民からその潜在的ニーズを察知して参加機会を提供した。京都ならではの仏教と対人援助の関係(禅を含む)など従来の学問としては構成しにくい問題をくみあげることですらなる地域住民の参加を促した。また、立命館大学が永らくとりくんできた平和構築の問題を対人援助との関係で再構築し、新しい地域ニーズとの合致を目指し進めた。これらは研究テーマユニット2 ケアする人のケアユニットとの連携を軸に進められたものである。

以上の研究成果は、学会発表や論文として公表され、学会発表 224 回、論文 190 編、著作 97 編の出版が行われている。また、地域と大学の関係を模索する大学に対しての情報提供も行われた。

<優れた成果があがった点>

就労支援チームにおける障害者(障害生徒)の個別のキャリアアップ(どのような支援によって各人がベストパフォーマンスをとるか)の軌跡を蓄積する「キャリアパスポート」(「できますシート」)などのポートフォリオシステムについては、京都市全体でもその実装を提案する予定である。また、大学周辺の地域高齢者を対象として実施した認知リハビリテーション活動は、大学がある京都市北区だけでなく、右京区と左京区においても、サテライト的に実施され、広く京都市内に普及しつつある。

<問題点>

就労支援について、アーカイブチームの課題とも連動するが、個人情報や、当事者のハンドル権を担保した情報システムとして運用するまでにはまだ様々な課題が残る。

また、本プロジェクトで取り組めた研究は、大学を「模擬社会空間」として活用するという構想からすれば、ごく一部が取り組めたに過ぎない。障害のある人の就労支援だけでなく、認知症のある人々、学習場面における支援、精神障害のある人々へのライフ・スキル支援など、多方面への広がりをもった展開については今後の課題となる。

<評価体制>

自己評価体制についてはリーダーズ会議を中心に、月 1 回程度の運営会議の席上で各研究チームの長による研究進捗状況の報告会を行い、相互に進展度を確認し、かつ相互支援の場とした。外部評価については、外部の研究雑誌はもちろんのことであるが、本プロジェクトの研究所産の公表設定である学内誌においても、学外査読者を必ず設定するなど評価の客観性を担保するようにしている。

さらに研究チームごとに毎年、公開企画を実施することを義務付け、研究成果を遅滞なく社会へ還元するとともに客観的な評価を受け取る場ととらえ、研究や実践の改善を試みてきた。なお、2013 年 1 月にはプロジェクトの集大成ともいえるべき研究成果報告会を開催した。*15 研究チームごとの成果をポスター発表するとともに、他大学から「地域エコシステム」に係る専門家を招き、プロジェクト全体へのコメントを受けた。また、今後の研究所の地域でのあり方などについてもディスカッションを行った。この結果については共同対人援助モデル研究 10 や人間科学研究所 HP で公表している。

<研究期間終了後の展望>

障害者の就労支援については、京都市内の特別支援学校、就労移行支援施設との連携のもと、社会臨床実習室における就労トレーニングおよびキャリアパスポートのシステム構築について継続的に実践研究をすすめたい。また「脱ひきこもり支援」(ファーストステップ・ジョブグループ)の持続可能な組織管理および地域化・社会化の実現に向けての実践的研究も継続する。

<研究成果の副次的効果>

障害者の就労支援については、京都市内のみでなく、神戸市でも特別支援学校を中心とした地域連携組織(神戸市立特別支援学校就労支援プログラム研修会:平成 23 年~)においても、学生ジョブコーチで得られた支援方法、とりわけ「キャリアパスポート」といった情報共有・移行システムをもとに委員(アドバイザー)として情報を提供し、地域における実装をはかっている。

12 キーワード

- (1) 模擬社会空間 (2) 対人援助学 (3) シミュレーション
 (4) 社会臨床 (5) オルタナティブ (6) キャリアパスポート
 (7) 情報金庫・アーカイブ (8) ケア

13 研究発表の状況

＜雑誌論文＞

	著者名	論文名	雑誌名	巻数	発行年	査読有無	ページ数
テーマ1 大学をアクティブなシミュレーションの場とした高齢者・障害者への対人援助の実証的研究							
1	Hattori, M., Sloman, S. A., and Orita, R.	Effects of subliminal hints on insight problem solving	Psychonomic Bulletin & Review	Online First	2013	査読有	－
2	竹内謙彰	高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ —青年期後期～成人期の当事者に対するインタビューに基づく分析—	立命館産業社会論集	48(4)	2013	査読有	印刷中
3	竹内謙彰	高機能自閉症スペクトラム障害者における自己の諸側面—発達支援への示唆—	『〈仮題〉対人援助科学の到達点』(晃洋書房)所収	印刷中	2013	査読無	印刷中
4	宮田正子・ 大川一郎・ 土田宣明	孫の存在—祖父母と孫の心理的関係からの分析—3年間にわたる研究高齢者の記憶の変化:短期記憶と作業記憶を中心とした検討	高齢者のケアと行動科学	印刷中	2013	査読有	印刷中
5	孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	3年間にわたる研究高齢者の記憶の変化:短期記憶と作業記憶を中心とした検討	立命館大学人間科学研究	26	2013	査読有	1-8
6	春日井敏之	「いじめ問題」のいまを問う—子どもの世界と実践的課題	京都府少年補導協会編『補導だより』	303	2012	査読無	6-9
7	春日井敏之	「いじめ問題」から見える子どもの世界と実践的課題	日本生活教育連盟編『生活教育』	769	2012	査読無	44-52

プロジェクト番号

S1002008

8	春日井敏之	青年期の学びと生き方ー学びや体験を意味付ける	京都教育センター (編)『季刊ひろば』	169	2012	査読 無	22-27
9	春日井敏之	つまずいた子どもを支える先生ー困難からの回復力とつながりの実感	児童心理	944	2012	査読 無	97-102
10	孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	学習活動の遂行によって認知症高齢者の抑制機能を改善できるか	高齢者のケアと行動科学	17	2012	査読 有	2-13
11	荒木穂積	自閉症研究の最近の動向について	日本ベトナム障害児教育・福祉研究	10	2012	査読 無	3-10 33-38
12	竹内謙彰	高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズー青年期後期～成人期の子どもを持つ母親に対するインタビューに基づく分析ー	心理科学	33(2)	2012	査読 有	46-63
13	山本耕平	ひきこもり支援の哲学と方法をめぐってー若者問題をむぐる韓日比較調査から(第2報)Yooja Salonの実践を通してー	立命館産業社会論集	48(2)	2012	査読 有	1-20
14	都賀美有紀・ 星野祐司	順序記憶の短期的保持における語長効果:項目と順序の符号化におけるトレードオフ仮説に関する検討	基礎心理学研究	31	2012	査読 有	12-23
15	北岡明佳・ 蘆田宏	近年の錯視研究の展開ー巻頭言に代えてー	心理学評論	55	2012	査読 有	289-295
16	Hiroshi Ashida, Ichiro Kuriki, Ikuya Murakami, Rumi Hisakata, Akiyoshi Kitaoka	Direction-specific fMRI adaptation reveals the visual cortical network underlying the "Rotating Snakes" illusion.	NeuroImage	61	2012	査読 有	1143-1152

17	北岡明佳	顔の錯視のレビュー	BRAIN and NERVE 神経研究の進歩	64 (7)	2012	査読無	779-791
18	Stevanov, J., Marković, S., Akiyoshi Kitaoka	Aesthetic valence of visual illusions	i-Perception	3(2)	2012	査読有	112-140
19	Stevanov, J., Spehar, B., Ashida, H., and Kitaoka, A.	Anomalous motion illusion contributes to visual preference	Frontiers in Perception Science	3	2012	査読有	Article 528, 1-11
20	下野孝一・ <u>東山篤規</u>	Editorial: Three dimensional visual space: Phenomena, theories, and applications	Japanese Psychological Research	40	2012	査読無	805-821
21	<u>東山篤規</u> ・下野孝一	Apparent depth of pictures reflected by a mirror: The plastic effect	Attention, Perception, & Psychophysics	74	2012	査読有	1522-1532
22	林炫廷・中鹿直樹・ <u>望月昭</u>	<u>知的障害のある生徒に対する写真撮影を利用した報告言語行動の増大*8</u>	立命館人間科学研究	22	2011	査読有	87-96
23	<u>Atsuki Higashiyama</u> , Miyuki Toga	Brightness and image definition of pictures viewed from between the legs.	Attention, Perception, & Psychophysics	73	2011	査読有	144-159
24	湊美智子・ <u>服部雅史</u>	音楽による気分誘導法の批判的検討	認知心理学研究	8(2)	2011	査読有	89-98
25	西田豊・ <u>服部雅史</u>	基準率無視および自然頻度の幻想: 等確率性仮説に基づく実験的検討	認知科学	18	2011	査読有	173-189
26	山本耕平	ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって—若者問題に関する韓日間比較調査から— 第1報	産社論集	46(4)	2011	査読有	21-42
27	春日井敏之	「お互いにつながって生きる」ための支援ネットワーク	全国生活指導研究協議会(編)『生活指導』	693	2011	査読無	42-49

プロジェクト番号

S1002008

28	春日井敏之	学校行事と子どもが「つながって生きる権利」	日本生活教育連盟(編)『生活教育』	750	2011	査読無	50-57
29	春日井敏之	学校教育の現状と生活指導の課題	日本生活指導学会(編)『生活指導研究』	28	2011	査読有	8-26
30	竹内謙彰	幼児が航空写真を空間表現として理解するプロセスー幼児の語りの再分析ー	立命館産業社会論集	47(2)	2011	査読有	43-63
31	竹内謙彰・ 荒木穂積・ 荒木美知子・ 前田明日香・ 井上洋平・ 荒井庸子・ 黄辛隠・ 張鋭・ Nguyen Thi Hoang Yen	<u>自閉症スペクトラム 児とその家族のニー ズについての日本・ 中国・ベトナム3カ国 の比較調査研究*2</u>	立命館産業社会 論集	47(1)	2011	査読 有	213-236
32	Hiroshi Utsunomiya	The influence of parental marital commitment on the identity formation of Japanese university students	Social Behavior and Personality: An International Journal	39	2011	査読 有	1315 -1323
33	櫻谷真理子	<u>児童養護施設におけ る生活指導・援助の 課題*5</u>	生活指導研究	28	2011	査読 有	27-39
34	<u>山本耕平</u> ・ Lee Insoo・ 安藤佳珠子	ひきこもり支援の哲学 と方法をめぐってー若 者問題に関する韓日 間比較調査からー	立命館産業社会 論集	46(4)	2011	査読 有	21-42
35	<u>山本耕平</u> ・ 斎藤真緒・ 財団法人京都 市ユースサービ ス協会他	<u>ひきこもり事例効果 的アウトリーチ確立 に関する研究*6</u>	ひきこもり事例効 果的アウトリーチ 確立に関する研 究報告書	-	2011	査読 無	98
36	藤健一	ハトのオペラント行動 における種々の穀類 強化子の体重統制法 を用いた機能の分析	動物心理学研究	61(2)	2011	査読 無	206

37	藤健一	ハトの集団飼育場面における成員操作による各個体の体重および摂食行動の変容	立命館文学	620	2011	査読有	118-123
38	湊美智子・ 服部雅史	音楽による気分誘導法の批判的検討	認知心理学研究	8(2)	2011	査読有	89-98
39	西田豊・ 服部雅史	基準率無視および自然頻度の幻想:等確率性仮説に基づく実験的検討	認知科学	18(1)	2011	査読有	173-189
40	Koichi Shimono, <u>Atsuki Higashiyama</u>	Dual egocenter hypothesis on angular errors in visually directed pointing.	Perception	40	2011	査読有	805-821
41	<u>Atsuki Higashiyama</u> , Miyuki Toga	Brightness and image definition of pictures viewed from between the legs.	Attention, Perception, & Psychophysics	73	2011	査読有	144-159
42	Masaomi Oda	The Characteristics of the use of Twitter by Beginners -Study of the applicability to the e-healthcare-	IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics	-	2011	査読有	1268-1278
43	Ueda, S., <u>Kitaoka, A.</u> , & Suga, T.	Wobbling appearance of a face induced by doubled parts	Perception	40	2011	査読有	751-756
44	Yukyu Araragi, <u>Atsuki Higashiyama</u>	Increment of the extinction illusion by long stimulation.	Perception	40	2011	査読有	604-620
45	Noriaki, Tsuchida	Inhibitory function in Stimulus-Response compatibility Task and Aging	Creating New Science for Human Services	特別号	2011	査読無	187-196
46	田中真理・ <u>大川一郎</u>	日本人高齢者におけるサクセスフル・エイジングの構造-半構造化面接を用いて-	高齢者のケアと行動科学	15	2010	査読有	23-33
47	孫琴・ <u>吉田甫</u> ・ <u>土田宣明</u> ・ <u>大川一郎</u>	高齢者を対象としたSRC 課題における復帰抑制(2)-不適合条件を中心とした検討-	立命館人間科学研究	21	2010	査読有	1-8

プロジェクト番号

S1002008

48	村松明穂・ <u>藤健一</u>	デンショバトにおける 反応トポグラフィ・強 化子が異なる他個体 のオペラント行動の 弁別学習	動物心理学研究	60	2010	査読 無	222
49	藤健一	ハトの給餌・給水環 境の体重変動に及ぼ す効果	動物心理学研究	60	2010	査読 無	202
50	山崎校・ <u>東山篤規</u> ・ 對梨成一・ 村上嵩至	光点刺激の観察によ る釘打ち動作と道具 の知覚	心理学研究	81	2010	査読 有	453-461
51	Fermüller, C., Ji, H., <u>Akiyoshi</u> <u>Kitaoka</u>	Illusory motion due to causal time filtering	Vision Research	50	2010	査読 有	315-329
52	Akiyoshi Kitaoka	A brief classification of colour illusions	Colour: Design & Creativity	5(3)	2010	査読 有	1-9
53	Eiji Watanabe, Wataru Matsunaga, <u>Akiyoshi Kitaoka</u>	Motion signals deflect relative positions of moving objects.	Vision Research	50	2010	査読 有	2381 -2390
54	都賀美有紀・ 毛留幸代・ <u>星野祐司</u>	音韻情報の記憶が 高齢者における順序 の短期記憶に及ぼす 影響	立命館人間科学 研究	21	2010	査読 有	57-66
55	田村昌彦・ <u>服部雅史</u> ・ 三輪和久	仮説検証過程におけ る確信度更新と検証 系列: 情報獲得モデ ルによる検討	認知科学	17(1)	2010	査読 有	180-195
56	櫻谷真理子	児童養護施設での虐 待児へのケア	日本生活指導学 会編 生活指導事 典	-	2010	査読 無	242-243
57	櫻谷真理子	子ども虐待—介入と 援助について考える	人権と部落問題	807	2010	査読 無	6-15
58	春日井敏之	子どもの居場所と子 育て—子ども・親・指 導員のつながり方	全国学童保育連 絡協議会編『日本 の学童保育』	414	2010	査読 無	11-19
59	春日井敏之	教師の葛藤と自己形 成—やりがい、悩 み、つながり	京都教育センター 編 『季刊ひろば』	161	2010	査読 無	4-9

プロジェクト番号

S1002008

60	春日井敏之	先生から「どの子よりも好き」と思っほしい子どもたち 一子どもの気持ちを大切にしたい対応のために	児童心理 臨時増刊	912	2010	査読無	82-88
61	春日井敏之	不登校のいまを問う 一子どもの願いとネットワーク支援	教育科学研究会編『教育』	772	2010	査読無	13-20
テーマ2 ニーズの多様化と支援の再構成—ケアする人のケアのためのコミュニティをととして							
62	松島京、松浦崇	外国につながるのある子どもの教育と保育をめぐる課題	近大姫路大学教育学部紀要	4	2013	査読有	91-100
63	松田亮三	普遍主義的医療制度における公私混合供給の展開	海外社会保障研究	178(2)	2012	査読無	4-20
64	松田亮三	「終末期医療」の「配給」をめぐる議論に向けて—日英の対比から	生存学	5	2012	査読無	195-205
65	斎藤真緒	現代的課題としての家族介護者支援	共同対人援助モデル研究 家族介護者支援の論理—男性介護者の介護実態と支援の課題	4	2012	査読無	3-10
66	斎藤真緒	イギリスの介護者支援—仕事と介護との両立を中心に	ぽーれぽーれ	2012(2)	2012	査読無	15
67	廣井亮一・河野聡・河野聖子・坂野剛崇・指宿信	司法臨床の展開(第一報)—弁護士と臨床心理士の協働	法と心理	12(1)	2012	査読無	印刷中
68	Tuukka Toivonen, Junya Tsutsui, Haruka Shibata	New Risks, Old Welfare: Japanese University Students, Work-related Anxieties and Sources of Support	Kobe University RIEB Discussion Paper Series	17	2012	査読無	1-27
69	松田亮三	普遍主義的医療制度における公私混合供給の展開—スウェーデンにおける患者選択制の検討	海外社会保障研究	178	2012	査読無	4-20

プロジェクト番号

S1002008

70	松田亮三	「終末期医療」の「配給」をめぐる議論に向けて―日英の対比から	生存学	5	2012	査読無	195-205
71	山本耕平	障害児者福祉現場のメンタルヘルス調査	ノーマライゼーション障害者の福祉増刊リハビリテーション研究	153	2012	査読無	21-23
72	筒井淳也	公的セクター雇用における女性労働とワーク・ライフ・バランス	社会科学研究	64(1)	2012	査読無	155-173
73	筒井淳也	マルチレベル分析を有効活用するには	社会と調査	9	2012	査読無	102-106
74	村本邦子	人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の取り組みから	共同対人援助モデル研究	5	2012	査読無	8-13
75	村本邦子	国際シンポジウム・ワークショップ「人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から」を開催して～HWHのこれから	共同対人援助モデル研究	5	2012	査読無	157-166
76	村本邦子	いま、家族を問う～家族は変わったか？	女性ライフサイクル研究	22	2012	査読無	5-11
77	斎藤真緒	男性介護者から考えるジェンダーの今日的課題	月刊女性&運動	2011(2)	2011	査読無	25
78	斎藤真緒	イギリスの家族介護者支援の取り組み	共同対人援助モデル研究	1	2011	査読無	5-15
79	松田亮三	社会格差・健康格差と医療保険(論説)	埼玉の国保	241	2011	査読無	2-5
80	崎山治男	心を求める社会	社会学評論	61(4)	2011	査読有	440-454
81	津止正敏	男性介護者 100 万人の時代―ケア包摂型コミュニティを展望する―	介護新聞(連載 1～6)	594-599	2011	査読無	計 7

プロジェクト番号

S1002008

82	津止正敏	介護の社会化と介護者支援を考えるー介護保険 10 年目の検証ー	福祉社会研究	11	2011	査読無	3ー21
83	松田亮三	熟議的・反省的医療政策に向けて	NIRA 研究報告書	ー	2011	査読無	77ー92
84	松田亮三	公衆衛生政策における現在知の集積・総合・共有ー英国からの示唆.	海外社会保障研究	75(9)	2011	査読無	695ー699
85	廣井亮一	法化社会における家族臨床	家族療法研究	28(2)	2011	査読無	72ー77
86	廣井亮一	司法臨床の概念ーわが国の家庭裁判所を踏まえて	法と心理	11(1)	2011	査読有	1ー6
87	斎藤真緒	男性介護者の介護実態と支援の課題ー男性介護ネット第1回会員調査からー	立命館産業社会論集	47(3)	2011	査読有	111ー127
88	峰島厚	高齢期障害者の暮らしと発達	みんなのねがい	538	2011	査読有	33ー36
89	峰島厚	子ども・子育て新システムと障害者自立支援法	保育問題研究	250	2011	査読有	36ー51
90	峰島厚	障害者の貧困問題	人権と部落問題	63(3)	2011	査読有	28ー34
91	筒井淳也	親との関係良好性はどのように決まるか: NFRJ 個票データへのマルチレベル分析の適用	社会学評論	62(3)	2011	査読無	301ー318
92	筒井淳也	パネルデータの基礎的分析方法: NFRJ-08Panel の有効活用に向けて	家族社会学研究	23(1)	2011	査読無	96ー102
93	秋葉武	韓国における生協の生成	日本ボランティア学会 2010 年度学会誌	12	2011	査読有	90ー105
94	秋葉武	韓国の社会的企業——現状と言説の多様性——	協同の発見	222	2011	査読無	23ー31

プロジェクト番号

S1002008

95	中村正	親密な関係性における虐待・暴力と加害者臨床論ー虐待的パーソナリティ論の検討をととしてー	立命館産業社会論集	46(1)	2010	査読有	139-153
96	中村正	社会臨床の視界(1)歴史のなかの臨床課題	対人援助学マガジン(デジタル)	1	2010	査読無	1-3
97	中村正	加害者臨床のめざすことーDV・虐待に焦点を当てた脱暴力への支援をととして	季刊刑事弁護	64	2010	査読無	57-60
98	中村正	社会臨床の視界(2)「あいだ」への関心ー加害者臨床ー	対人援助学マガジン(デジタル)	2	2010	査読無	7-16
99	中村正	社会臨床の視界(3)社会臨床という思考のレッスンーメビウスの輪のようにねじれてつながる関係性を理解するー	対人援助学マガジン(デジタル)	3	2010	査読無	9-25
100	斎藤真緒	男性介護者調査研究から見えてきたことー家族介護支援とのかかわりを中心に	認知症ケア最前線	24	2010	査読無	36-41
101	斎藤真緒	介護者支援の論理とダイナミズムーケアとジェンダーの新たな射程	立命館産業社会論集	46(1)	2010	査読有	155-171
102	松田亮三	2006年医療改革における医療の責任と財源調達の変化	2006年医療改革における医療の責任と財源調達の变化	21(1)	2010	査読有	1-8
103	Ryozo Matsuda	Life-style choices and falls. Balwyn North, Trans Pacific Press.	Health Inequalities in Japan: An Empirical Study of Older People(Katsunori Kondo ed.)	-	2010	査読無	37-50
104	廣井亮一	問題を抱える家族へのアプローチ	更生保護	2010(7)	2010	査読無	10-15
105	廣井亮一	家族臨床における法的介入	家族心理学年報	28	2010	査読有	147-159

プロジェクト番号

S1002008

106	不破麻紀子・ 筒井淳也	家事分担に対する不 公平感の国際比較 分析	家族社会学研究	22(1)	2010	査読 有	52-63
107	秋葉武	韓国の社会的企業 ——現状と言説の多 様性——	協同の発見	222	2010	査読 無	23-31
108	秋葉武	地域づくりに参加す る韓国の生協—— 「ソンミサン・マウル」 における協同組合民 主主義の継承——	協同組合経営研 究誌にじ	632	2010	査読 無	68-80
109	秋葉武	韓国の介護保険制 度と市民社会(NPO・ NGO、労働組合)(下)	いのちとくらし研 究所 所報	32	2010	査読 無	31-34
110	秋葉武	韓国の介護保険制 度と市民社会(NPO・ NGO、労働組合)(上)	いのちとくらし研 究所 所報	31	2010	査読 無	15-19
111	津止正敏	男性介護者 100 万人 時代	部落解放	630	2010	査読 無	70-73
112	津止正敏	介護で孤立しないネ ットワークづくり	オトコの介護を生 きるあなたへ	-	2010	査読 無	104-112
テーマ3 情報アーカイブとキャリアパスポートによる情報の蓄積と移行システムの構築							
113	Emiko Tanaka, Etsuko Tomisaki, Ryoji Shinohara, Yuka Sugisawa, Lian Tong, Taeko Watanabe, Yoko Onda, Yuri Yauchi, Maki Hirano, Yukiko Mochizuki, Kentaro Morita, Amarsanaa Gan-Yadam, Yuko Yato, Noriko Yamakawa, Tokie Anme & Japan Children's Study Group	Factors related to social competence development of thirty-month-old toddlers:longitudinal perspective	Japanese Journal of Human Sciences of Health-Social Services	19 巻 1 号	2013	査読 有	21-30

プロジェクト番号

S1002008

114	天田城介	ポスト経済成長時代の 少子高齢社会にお けるマーケティング戦 略	アド・スタディーズ	43	2013	査読 無	26-30
115	天田城介	あとがき	生存学研究センタ ー報告	19	2013	査読 無	143-150
116	立岩真也	制度と人間のこと・8 ——連載 86	現代思想	2013-2	2013	査読 無	22-33
117	立岩真也	素朴唯物論を支持す る——連載 85	現代思想	2013-1	2013	査読 無	14-26
118	立岩真也	制度と人間のこと・7 ——連載 84	現代思想	2012-12	2012	査読 無	22-33
119	立岩真也	制度と人間のこと・6 ——連載 83	現代思想	2012-11	2012	査読 無	22-33
120	立岩真也	制度と人間のこと・5 ——連載 82	現代思想	2012-10	2012	査読 無	40-52
121	Lian Tong, Ryoji Shinohara, Yuka Sugisawa, Emiko Tanaka, <u>Yuko Yato</u> , Noriko Yamakawa, Tokie Anme	Early Development of Empathy in Toddlers: Effects of Daily Parent–Child Interaction and Home-Rearing Environment'	Journal of Applied Social Psychology	42	2012	査読 無	1-22
122	天田城介	「歴史と体制を理解し て研究する——社会 学会の体制の歴史と 現在」	保健医療社会学 論集	第 23 巻 1 号	2012	査読 有	56-69
123	天田城介	「日本保健医療社会 学会機関誌編集委 員会の制度と運用の 変更について」	保健医療社会学 論集	第 23 巻 1 号	2012	査読 有	106-112
124	天田城介	「書評: 上野千鶴子 『ケアの社会学—— 当事者主権の福祉 社会へ』(太田出版、 2011 年)」	家族研究年報	No.36	2012	査読 無	85-89
125	天田城介	「胃ろうの 10 年——ガ イドライン体制のもとグ レーゾーンで処理する 尊厳死システム」	現代思想	第 40 巻 7 号	2012	査読 無	165-181

プロジェクト番号

S1002008

126	天田城介	「ポスト経済成長時代の超高齢社会における夢から覚めて」	現代思想	第 40 巻 10 号	2012	査読 無	170-186
127	天田城介	「書評：岡野八代『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、2012年）」	家族社会学研究	第 24 巻 2 号	2012	査読 無	202-203
128	天田城介	「“紛争家族化”する戦後日本型家族の行方」	JIM	22 巻 11 号	2012	査読 無	826
129	天田城介	体制の歴史を描くこと——近代日本における乞食の経済——	生存学研究センター報告	17	2012	査読 無	408-427
130	天田城介	「依存的な親子関係」に混迷する介護問題	訪問看護と介護	17(2)	2012	査読 無	113-118
131	Tatsuya Sato, Takuya Nakatsuma, Norika Matsubara	Influences of G. Stanley Hall on Yuzero Motora as the First Psychology Professor in Japan. How kymograph as a motor made enough energy to power Motora's career in psychology	American Journal of Psychology	125(4)	2012	査読 有	395-407
132	Funder,D.C., Guillaume,E., Kumagai,S., Kawamoto, S. and Sato, T.	The Person-situation Debate and the Assessment of Situations	Japanese Journal of Personality	21	2012	査読 有	1-11
133	若林宏輔・ 佐藤達哉	寺田精一の実験研究から見る大正期日本の記憶研究と供述心理学の接点	心理学研究	83(3)	2012	査読 有	174-181
134	若林宏輔・ 指宿信・ 小松加奈子・ サトウタツヤ	録画された自白：日本独自の取調べ録画形式が裁判員の有罪判断に与える影響	法と心理	12(1)	2012	査読 有	89-97

135	荒川歩・ 安田裕子・ <u>サトウタツヤ</u>	複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例	立命館人間科学研究	25	2012	査読有	95-107
136	山口翔・ 青木千帆子・ 植村要・ <u>松原洋子</u>	「電子書籍アクセシビリティに関する出版社アンケート」	『国際公共経済学研究』	未定	2012	査読無	印刷中
137	大谷いづみ	犠牲を期待される者——「死を掛け金に求められる承認」という隘路	現代思想	40(7)	2012	査読無	198-209
138	村本邦子	「対人援助学」のすすめ	人権のひろば	86	2012	査読無	17-19
139	Ryoji Shinohara, Yuka Sugisawa, Lian Tong, Emiko Tanaka, Taeko Watanabe, Yoko Onda, Yuri Kawashima, Maki Hirano, Etsuko Tomisaki, Yukiko Mochizuki, Kentaro Morita, Gan-Yadam Amarsanaa, <u>Yuko Yato</u> , Noriko Yamakawa, Tokie Anme	Influence of Maternal Praise on Developmental Trajectories of Early Childhood Social Competence	Creative Education	3	2012	査読有	533-539
140	天田城介	「ケア」と「承認」を結びつけている仕掛け	現代社会学理論研究	5	2011	査読無	16-29
141	天田城介	生きることを可能にする／困難にする家族——悲鳴が折り重なる場所	at プラス	6	2011	査読無	71-86
142	Naoko Okamoto	The possibilities of the “Projective Drama Therapy” from the Perspective of Image Projection	Creating New Human Support Service	-	2011	査読無	127-134

プロジェクト番号

S1002008

143	Yoshiharu Nakagawa	A Multidimensional View of Holistic Education: From Eastern Perspectives	Creating New Human Support Services (Graduate School of Science for Human Services)	-	2011	査読 無	87-98
144	村本邦子	治療的司法の観点から見た法と心理の協働	法と心理	11(1)	2011	査読 有	7-13
145	村本邦子	戦時性暴力/日常の性暴力～南京ワークショップからの報告	立命館言語文化研究	23(2)	2011	査読 無	183-185
146	Kuniko Muramoto	History and Current Approaches to Violence Towards Women in Japan	Feminism & Psychology	21(4)	2011	査読 有	509-514
147	村本邦子	コミュニティ・エンパワメント	女性ライフサイクル研究	21	2011	査読 無	5-11
148	村本邦子	「外のグループ」と「内のグループ」を繋ぐ精神療法	集団精神療法	27(2)	2011	査読 有	126-131
149	村本邦子	子ども虐待と母性、家族、ジェンダー	女たちの 21 世紀	68	2011	査読 無	4-7
150	破田野智己・ 斎藤進也・ 山田早紀・ 滑田明暢・ 木戸彩恵・ 若林宏輔・ 山崎優子・ 上村晃弘・ 稲葉光行・ <u>サトウタツヤ</u>	政策決定過程の可視化と分析にむけて: 議論過程のシミュレーションとその KTH キューブによる表現	立命館人間科学研究	24	2011	査読 有	21-33
151	赤阪麻由・ 日高友郎・ <u>サトウタツヤ</u>	「見えない障害」とともに生きる当事者の講演による高校生の障害観の変容	立命館人間科学研究	24	2011	査読 有	49-62
152	若林宏輔・ <u>サトウタツヤ</u>	同一の出来事を異なる方向から見た目撃者間の一方向的同調効果	立命館人間科学研究	24	2011	査読 有	21-33

プロジェクト番号

S1002008

153	白井美穂・ サトウタツヤ・ 北村英哉	複線径路・等至性モデルからみる加害者の非人間化プロセス—「Demonize」と「Patientize」—	法と心理	11	2011	査読有	40-46
154	サトウタツヤ	司法臨床の可能性：もう一つの法と心理学の接点をもとめて	法と心理	11	2011	査読有	26-37
155	安達俊祐・ サトウタツヤ・ 日高友郎	ビジュアル・エスノグラフィを用いた ALS 患者のコミュニケーション	立命館人間科学研究	22	2011	査読有	73-86
156	Tatsuya Sato	Minding Money: How Understanding of Value is Culturally Promoted	Integrative Psychological and Behavioral Science	45	2011	査読有	116-131
157	サトウタツヤ・ 若林宏輔	取調べ可視化論の心理学的検討	法律時報	83(2)	2011	査読無	54-62
158	大谷いづみ	いのちの教育：臓器提供を「訓育」する装置？——カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を「豚のPちゃん」の教育実践とともに読み解く	立命館産業社会論集	47(1)	2011	査読有	237-258
159	大谷いづみ	「いのちの教育」を立ち止まって考える——パッケージ化して語られる「生と死の物語」の陥穽	小学校時報	721	2011	査読無	4-8
160	竹之内裕文・ 大谷いづみ	生活のなかの死：地域社会での看取りを考える	医学哲学医学倫理	29	2011	査読無	77-78
161	立岩真也	社会派の行き先・13	現代思想	39(16)	2011	査読無	14-25
162	立岩真也	社会派の行き先・12	現代思想	39(14)	2011	査読無	16-27
163	立岩真也	社会派の行き先・11	現代思想	39(13)	2011	査読無	34-46
164	立岩真也	社会派の行き先・10	現代思想	39(11)	2011	査読無	14-25

プロジェクト番号

S1002008

165	立岩真也	社会派の行き先・9	現代思想	39(10)	2011	査読 無	18-30
166	立岩真也	社会派の行き先・8	現代思想	39(8)	2011	査読 無	8-19
167	立岩真也	社会派の行き先・7	現代思想	39(7)	2011	査読 無	8-20
168	立岩真也	社会派の行き先・6	現代思想	39(5)	2011	査読 無	24-36
169	立岩真也	On "the Social Model"	Ars Vivendi	1	2011	査読 有	32-51
170	Izumi Otani	Good Manner of Dying' as a Normative Concept: 'Autocide,' 'Granny Damping,' and Discussions on Euthanasia / Death with Dignity in Japan	International Journal of Japanese Sociology	19	2010	査読 無	49-63
171	天田城介	思想と政治体制について——ソ連における精神医学と収容所についての覚書	生存学研究センター報告	14	2010	査読 無	13-65
172	天田城介	日付と場所を刻印する社会を思考する——学問が取り組むべき課題の幾つか	老年社会科学会	32(3)	2010	査読 無	253-360
173	天田城介	社会学の問い方への問い	ソシオロジ	167	2010	査読 無	93-102
174	立岩真也	障害者運動・対・介護保険——2000～2003	社会政策研究	10	2010	査読 無	166-186
175	上村晃弘・サトウタツヤ	東金女児遺棄事件に関するブログ記事の分析	立命館人間科学研究	21	2010	査読 有	173-183
176	織田涼・八木保樹	他者の行動予測における主観的経験の利用.	心理学研究	81	2010	査読 有	510-516
177	織田涼・八木保樹	社会的予測における人物情報と状況情報の機能的異同	立命館人間科学研究	21	2010	査読 有	9-23
178	村本邦子	女たちの二十年	女性ライフサイクル研究	20	2010	査読 無	9-12
179	村本邦子	自己効力感を失っている大人たち～子育てに行き詰っている母親	児童心理	922	2010	査読 無	98-102

プロジェクト番号

S1002008

180	村本邦子	書評『子どもと家族の法と臨床』	精神療法	36(6)	2010	査読 無	113-114
181	村本邦子	レジリエンスモデルによる支援者支援	現代のエスプリ	524	2010	査読 無	107-116
その他							
182	京屋郁子	カテゴリを明示的に 区別しない特異で冗 長な情報がカテゴリ 化に与える影響, 認 知心理学的研究	認知心理学的研究	9(2)	2012	査読 有	81-95
183	高垣忠一郎	自分を好きになれない	児童心理	953	2012	査読 無	5
184	渡邊卓也	自己愛人格と主観的 幸福感との関連に及 ぼす心的表象の影響	立命館人間科学 研究	22	2011	査読 有	19-27
185	高垣忠一郎	子どもの育ちで、い ま、とても大事なこ と	日本の学童ほいく	2011(1)	2011	査読 無	24-29
186	Shodo Mizuki, Hirofumi Minami	How Children Perceived Their Hometown From the Viewpoint of Local Environmental Interaction	RITSUMEIKAN Journal of Human Sciences	20	2010	査読 有	65-77
187	Tomoo Hidaka	How Japanese Language Has Been Used and Transformed – Focused on Social-cultural Context and the Use in Communication	Integrative Psychology and Behavioral Science	44(2)	2010	査読 有	156-161
188	山崎優子・ 入山茂・ 荒川歩	法と心理学の協働の 実際－裁判員制度 研究と心理学的解剖 研究に接する心理学 者の立場から	法と心理	9	2010	査読 有	51-56
189	片山伸子・ 高田薫・ 渋谷郁子・ 吉本朋子・ 川那部隆司・ 高木和子	幼児のふり遊びの共 有における協約性と 言語発達の検討	立命館人間科学 研究	21	2010	査読 有	163-172

プロジェクト番号

S1002008

190	高垣忠一郎	発達と自己肯定感を考える	みんなのねがい	521	2010	査読無	22-25
-----	-------	--------------	---------	-----	------	-----	-------

<図書>

図書名、著者名、出版社名、総ページ数、発行年(西暦)について記入してください(左記の項目が網羅されていれば、項目の順序を入れ替えても可)。また、現在から発表年次順に遡り、通し番号を付してください。

	著者名	書名	出版社	発行年	総ページ数
テーマ1 大学をアクティブなシミュレーションの場とした高齢者・障害者への対人援助の実証的研究					
1	宇都宮博	エピソードでつかむ生涯発達心理学(分担箇所:「配偶者選択と家庭をもつこと」,「中年期における夫婦関係の変化」,「老年期の家族関係」,「家族のライフサイクル」)	ミネルヴァ書房	2013	印刷中
2	宇都宮博	心理学スタンダードー学問する楽しさを知るー(分担箇所:「人間関係ー家族・友人・恋人を中心としてー」)	ミネルヴァ書房	2013	印刷中
3	山本耕平	ともに生き ともに育つ ひきこもり支援ー協同的關係性とソーシャルワーカー	かもがわ出版	2013	176
4	宇都宮博	新・青年心理学ハンドブック(分担箇所:家族関係)	福村出版	2013	
5	東山篤規	体と手がつくる知覚世界	勁草書房	2012	241
6	荒木穂積	平成20年度～22年度 アジア・アフリカ学術基盤形成事業(日本学術振興会)『東アジアの発達障害児のための治療教育プログラム開発に関する国際共同研究』(平成20年度～22年度 最終研究報告書)	立命館大学人間科学研究所	2012	182
7	服部雅史	田山忠行・須藤 昇(編)基礎心理学入門	培風館	2012	295
8	服部雅史	箱田裕司(編)心理学研究法 第2巻 認知	誠信書房	2012	250
9	北岡明佳 (監修)・ワード (構成・文)	錯覚の大研究	PHP研究所	2012	64
10	藤健一・ 望月昭・ 武藤崇・ 青山謙二郎 (編著)	行動分析学研究アンソロジー2010	星和書店	2011	320
11	藤健一	「行動分析学における統計的検定の役割」『行動分析学研究アンソロジー2010』	星和書店	2011	300
12	藤健一	「累積反応記録と累積反応記録器」『行動分析学研究アンソロジー2010』	星和書店	2011	300

13	春日井敏之・ 伊藤美奈子 (編著)	よくわかる教育相談	ミネルヴァ 書房	2011	207
14	春日井敏之	分担執筆「大学での学び、生活と自己形成のために —学生支援とつながり方」『学生のチカラ・ピア・エ デュケーションの視点でみる障害学生支援』	立命館大学 障害学生支 援室	2011	147
15	春日井敏之	分担執筆「若者にとって生きること、学ぶことの意味 とつながり—大学が問われていること」大久保史郎・ 高橋伸彰(編著)『日本は変わるか?—転換の可能 性を探る』	法律文化社	2011	230
16	春日井敏之・ 西山久子 ほか(編著)	やってみよう!ピア・サポート	ほんの森出 版	2011	135
17	春日井敏之・ 伊藤美奈子 (編著)	よくわかる教育相談	ミネルヴァ 書房	2011	210
18	大川一郎・ 土田宣明・ 宇都宮博・ 日下菜穂子・ 奥村由美子 (編)	エピソードでつかむ老年心理学	ミネルヴァ 書房	2011	291
19	服部雅史	子安増生・二宮克美(編)キーワードコレクション認 知心理学	新曜社	2011	227
20	東山篤規	子安増生・二宮克美(編)キーワードコレクション認 知心理学	新曜社	2011	227
21	東山篤規・ 竹澤智美・ 村上嵩至 (共訳)	J. J. Gibson(著) 視覚ワールドの知覚	新曜社	2011	299
22	北岡明佳(監修)・ グループ・ コロンプス (構成・文)	トリックアート図鑑 だまし絵(他、同シリーズ3冊)	あかね書房	2011	48
23	北岡明佳 (編著)	いちばんはじめに読む心理学の本⑤ 知覚心理学 —心の入り口を科学する—	ミネルヴァ 書房	2011	297
24	佐藤真一・ 大川一郎 他(編)	高齢者の心と体 ケアに生かす Q&A	日本看護協 会出版会	2010	128
25	大川一郎 他(編)	「老いと心のケア」 老年行動科学入門	ミネルヴァ 書房	2010	224

プロジェクト番号

S1002008

26	服部雅史	楠見孝(編)「現代の認知心理学第3巻 思考と言語」(分担執筆)	北大路書房	2010	320
27	ハヴァースカ、 K.他(編著). 竹内謙彰・ 荒木穂積 (監訳)	乳幼児期の自閉症スペクトラム障害: 診断・アセスメント・療育	クリエイツ かもがわ	2010	438
28	宇都宮博	無藤隆他(編)『新プリマーズ発達心理学』(分担執筆箇所「成人期から老年期へ」)	ミネルヴァ 書房	2010	188
29	宇都宮博	岡本祐子(編)『成人発達臨床心理学ハンドブック—個と関係性からライフサイクルを見る—』(分担執筆箇所「Marcer ら: 転換期から見た女性のライフプロセス、夫婦関係の発達・変容」)	ナカニシヤ 出版	2010	394
30	山本耕平	どうつくる? 障害者総合福祉法—権利保障制度確立への提言	障害者生活 支援システ ム研究会	2010	169
31	山本耕平	精神保健福祉白書 2011 年版	精神保健福 祉白書編集 委員会	2010	217
テーマ2 ニーズの多様化と支援の再構成—ケアする人のケアのためのコミュニティをととして					
32	秋葉武 他(編著)	危機の時代の市民活動: 日韓社会的企業最前線	東方出版	2012	296
33	筒井淳也	コラム「グラノベッター『転職』」(金井雅之・小林盾・渡邊大輔(編)『社会調査の応用: 量的調査編: 社会調査士 E・G 科目対応』)	弘文堂	2012	262
34	秋葉武	「日本の共済協同組合の歴史」「アジア・オセアニアの協同組合」中川雄一郎他編『協同組合を学ぶ』所収	日本経済評 論社	2012	229
35	廣井亮一 (編著)	加害者臨床	日本評論社	2012	252
36	廣井亮一	司法臨床入門—家裁調査官のアプローチ(増補第2版)	日本評論社	2012	257
37	廣井亮一	カウンセラーのための法と臨床—離婚・虐待・非行の問題解決に向けて	金子書房	2012	218
38	筒井淳也	「メディアと社会の理論」(浪田陽子・福間良明編)『はじめてのメディア研究』	世界思想社	2012	288
39	津止正敏(編)	家族介護者支援を考える—日本と英・豪・米の比較研究—	立命館大学 人間科学研 究所	2011	104
40	廣井亮一・ 生島浩・ 岡本吉生 (編著)	非行臨床の新潮流	金剛出版	2011	191

プロジェクト番号

S1002008

41	障害児入所施設研究会 (代表 峰島厚)	知的障害児入所施設における最低基準の機能実態に関する調査研究	みずほ福祉 助成財団	2011	163
42	中村正・ 竹内常一・ 生活指導学 会著	生活指導事典－生活指導・対人援助に関わる人のために	エイデル研 究所	2010	318
43	廣井亮一・ 中川利彦 (共編著)	子どもと家族の法と臨床	金剛出版	2010	263
44	筒井淳也	第6章「結婚についての意識のズレと誤解」筒井淳也、佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編著『結婚の壁』	勁草書房	2010	198
45	Junya Tsutsui	Asymmetric Mixture: Determinants of Attitudes toward Intermarriage in Japan, in Makiko Iwatake (ed.) Gender, Mobility and Citizenship in Asia.	Renvall Institute Publications	2010	296
46	筒井淳也	「情報管理のコミュニケーション:ゴッフマン」伊藤公雄編『コミュニケーション社会学入門』	世界思想社	2010	238
テーマ3 情報アーカイブとキャリアパスポートによる情報の蓄積と移行システムの構築					
47	サトウタツヤ・ 北岡明佳・ 土田宣明 (編著)	「4章 子ども・青年期」『心理学スタンダード 時間の中の人間発達』	ミネルヴァ 書房	2013	印刷中
48	新・社会福祉士 養成講座編集 委員会編(編集 委員: 天田城介・ 後藤隆・ 潮谷有二)	社会調査の基礎[第3版]『新・社会福祉士養成講座』第5巻	中央法規出 版	2013	193
49	酒井隆史・ 宇城輝人・ 前川真行・ 天田城介	「特集2「都市」 鼎談「関西都市論－生有の都市へ」立命館大学生存学研究センター編『生存学 Vol.6』	生活書院	2013	印刷中
50	天田城介・ 角崎洋平・ 櫻井悟史(編)	体制の歴史	洛北出版	2013	印刷中
51	天田城介	「日本型生存保障システムの変容——“失われた20年”において失ってしまったもの」伊藤智樹・川崎聡大編『社会的弱者との真の共生を目指して——医療・福祉・教育の連携と提言』	梧桐書院	2013	印刷中

52	二宮克美・ 浮谷秀一・ 堀毛一也・ 安藤寿康・ 藤田主一・ 小塩真司・ 渡邊芳之 (編著)	「2 節 自己意識の形成」『パーソナリティ心理学ハンドブック』	福村出版	2013	782
53	清水益治・ 森敏昭(編著)	「2 章 乳児期の発達」『発達と学び～乳幼児から児童期の発達心理学～』	北大路書房	2013	印刷中
54	村本邦子	「アメリカにおける DV 防止への取り組みの変遷」「コミュニティ・セラピストによる支援」 『DV はいま～協働による個人と環境への支援』高畠克子(編著)所収	ミネルヴァ書房	2013	18-34
55	天田城介	「学会における査読システムの合理性——時代の尻尾が学会誌という犬を振り回すことを踏まえて社会学する」黒田浩一郎・武川正吾・平岡公一・山田昌弘監修『学的探求の道案内——研究者であること』	東信堂	2013	印刷中
56	天田城介	「自律」「PTSD」大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編集委員・見田宗介編集顧問『現代社会学事典』	弘文堂	2012	1640
57	サトウタツヤ・ 若林宏輔・ 木戸彩恵	社会と向き合う心理学	新曜社	2012	336
58	サトウタツヤ・ 鈴木朋子・ 荒川歩	ポイントシリーズ 心理学史	学文社	2012	164
59	安田裕子・ サトウタツヤ (編)	TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開	誠信書房	2012	264
60	青野篤子・ 村本邦子(監訳)	発達心理学の脱構築	ミネルヴァ書房	2012	449
61	大谷いづみ	「患者および一般市民のための生命倫理教育」伴信太郎・藤野昭宏編『医療倫理教育』(シリーズ生命倫理学第 19 巻)	丸善	2012	255
62	大谷いづみ	「生命倫理・環境倫理」日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』	ぎょうせい	2012	435
63	大谷いづみ	「尊厳死」高橋恵子他編『発達科学入門3 青年期～後期高齢期』	東京大学出版会	2012	291
64	サトウタツヤ	学融とモード論の心理学——人文社会科学における学問融合をめざして	新曜社	2012	306

65	立岩真也・ 有馬 齊	生死の語り行い・1——尊厳死法案・抵抗・生命倫理学	生活書院	2012	241
66	立岩真也・ 安積純子・ 尾中文哉・ 岡原正幸	生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学 第3版	生活書院	2012	366
67	天田城介・ 村上潔・ 山本崇記(編)	差異の繫争点——差別を読み解く	ハーベスト社	2012	298
68	中川吉晴 (櫻尾 直樹編)	霊性と文化 (分担執筆 第5章)	慶應義塾大学出版会	2012	273
69	中川吉晴 (日本人間性 心理学会編)	人間性心理学ハンドブック (分担執筆、3項目)	創元社	2012	420
70	玉井真理子・ 大谷いづみ (編)	はじめて出会う生命倫理	有斐閣	2011	340
71	天田城介・ 北村健太郎・ 堀田義太郎 (編)	老いを治める—老いをめぐる政策と歴史	生活書院	2011	530
72	立岩真也・ 天田城介	生存学 Vol.3	生活書院	2011	270
73	天田城介	人権の再問	法律文化社	2011	224
74	天田城介	老い衰えゆくことの発見	角川学芸出版	2011	254
75	サトウタツヤ	方法としての心理学史——心理学を語り直す	新曜社	2011	224
76	サトウタツヤ	「心の発達と歴史」 日本発達心理学会 編／子安増生・白井利明 責任編集 『時間と人間—発達科学ハンドブック3』第2章	新曜社	2011	336
77	Tatsuya Sato	Rises and Falls of Clinical Psychology in Japan. A Prespective on the Status of Japanese Clinical Psychology. Shimoyama, H.(Ed.) An International Comparison of Clinical Psychology in Practice West Meets East, Chapter 10	Kazama Shobo	2011	224
78	村本邦子・ 日本弁護士 連合会編	現代法律実務の諸問題(村本邦子[臨床心理学的アプローチを生かしたロイヤリングを考える]の章)	第一法規	2011	992
79	日高友郎・ 滑田明暢・ サトウタツヤ	共同対人援助モデル研究 2	人間科学研究所	2011	122
80	サトウタツヤ・ 渡邊芳之	心理学・入門	有斐閣	2011	268

81	サトウタツヤ・ 渡邊芳之	あなたはなぜ変わらないのか: 性格は「モード」で変わる 心理学のかしこい使い方	筑摩書房	2011	315
82	松原洋子	「妊娠と出産をめぐる医療の危機と社会」, 吉岡斉他 編『新通史 日本の科学技術—世紀転換期の社会 史1995年-2011年(第3巻)』	原書房	2011	662
83	立岩真也・ 村上潔	家族性分業論前哨	生活書院	2011	356
84	Tatsuya Sato, Kosuke Wakabayashi, Akinobu Nameda, Yuko Yasuda, Yoshiyuki Watanabe	「Understanding a Person as a Whole: Transcending the Anglo-American methods focus and Continental-European holism through a look at dynamic emergence processes.」 Chapter 5 in A. Toomela (Ed.), 『Methodological thinking in psychology: 60 years gone astray?』	Information Age Publishing	2010	21
85	天田城介	〈当事者〉をめぐる社会学—調査での出会いを通して	北大路書房	2010	232
86	天田城介	高齢者と福祉——ケアのあり方	日本図書セ ンター	2010	468
87	天田城介	社会学事典	丸善	2010	784
88	立岩真也・ 齊藤拓	ベーシックインカム——分配する最小国家の可能性	青土社	2010	348
89	立岩真也	人間の条件——そんなものない	理論社	2010	392
90	Yoshiharu Nakagawa (20章執筆) Engelbreton et al. eds.	International Handbook of Inter-religious Education (Chap 20 Oriental Philosophy and Interreligious Education: Inspired by Toshihiko Izutsu's Reconstruction of "Oriental Philosophy")	Springer	2010	618
91	大谷いづみ・ 『未来を拓く —ようこそ立 命館へ』編集 委員会	「生命倫理」『未来を拓く—ようこそ立命館へ』	立命館大学	2010	142
その他					
92	山崎優子	死刑と向きあう裁判員のために, 第4章 裁判員の 心理と死刑	現代人文社	2011	240
93	中鹿直樹・ 佐伯大輔・ 桑原正修	はじめての行動分析学実験: Visual Basic で学ぶ実 験プロミング	ナカニシヤ 出版	2011	140
94	水月昭道	ホームレス博士 ~派遣村・ブラック企業化する大 学院~	光文社新書	2010	214

プロジェクト番号

S1002008

95	山崎優子	犯罪心理学 第2章 犯罪者プロファイリングとケース・リンケージ(翻訳)	有斐閣	2010	253
96	高垣忠一郎	カウンセリングを語るー自己肯定感を育てる方法ー	かもがわ出版	2010	235
97	日本生活指導学会・ 竹内常一(編)	「生活指導と『心の教育』』『生活指導事典』	エイデル研究所	2010	319

<学会発表>

学会名、発表者名、発表標題名、開催地、発表年月(西暦)について記入してください(左記の項目が網羅されていれば、項目の順序を入れ替えても可)。また、現在から発表年次順に遡り、通し番号を付してください。

	発表者名	発表標題	学会名	開催地	発表年月
テーマ1 大学をアクティブなシミュレーションの場とした高齢者・障害者への対人援助の実証的研究					
1	中鹿直樹・ 川村徹也・ 尾西洋平・ 望月昭	知的障がい者の就労場面における役割設定の効果	対人援助学会第4回大会	神奈川県立保健福祉大学(横須賀)	2012年12月
2	小島遼・ 中鹿直樹・ 乾明紀・ 望月昭	障がい者の就労場面において他者を教える行動がもたらす効果	対人援助学会第4回大会	神奈川県立保健福祉大学(横須賀)	2012年12月
3	乾明紀・ 望月昭・ 植島淳・ 岸本光平	訪問介護事業におけるサービス提供責任者を中心とした組織改革(中間報告)ーヘルパーの能力開発と利用者のQOL拡大を目指してー	対人援助学会第4回大会	神奈川県立保健福祉大学(横須賀)	2012年12月
4	尾西洋平・ 中鹿直樹・ 林炫廷・ 太田隆士・ 乾明紀・ 望月昭	累積記録を用いたスケジュールの自己管理行動の表現	対人援助学会第4回大会	神奈川県立保健福祉大学(横須賀)	2012年12月
5	望月昭・ 中鹿直樹・ 尾西洋平・ 林炫廷・ 乾明紀	「学生ジョブコーチ」による障がい者就労支援の役割	対人援助学会第4回大会	神奈川県立保健福祉大学(横須賀)	2012年12月
6	服部雅史・ 鈴木宏昭	ワークショップ:「高次認知処理の自動性とコントロール」	日本認知科学会第29回大会	仙台	2012年12月

プロジェクト番号

S1002008

7	服部雅史	定言三段論法の内容効果 と等確率性仮定: 確率サン プリング・モデルによる検 討	日本認知科学会第 29 回大会	仙台	2012 年 12 月
8	東山篤規・ 村上嵩至	ミュー効果に及ぼす視覚 刺激の明るさの効果	関西心理学会 123 回大会	亀岡市	2012 年 11 月
9	尾田政臣	Perception of consonance about harmonious sounds	IEEE SMC2012	Seoul, Korea	2012 年 10 月
10	東山篤規・ 山崎校	奥行き知覚に及ぼす頭の 位置の効果: きめの勾配と 線遠近	関西心理学会第 124 回大会	彦根市	2012 年 10 月
11	東山篤規・ 山崎校	奥行き知覚に及ぼす頭の 位置の効果: 陰影	関西心理学会第 124 回大会	彦根市	2012 年 10 月
12	石川真理子・ 坂口佳江・ 孫琴・ 高橋伸子・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	学習活動を支える新規サ ポートに関する研究	日本老年行動科学 会第 15 回大会	東京	2012 年 10 月
13	宮田正子・ 吉村昌子・ 孫琴・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 坂口佳江・ 小田博子・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	学習活動を支える継続サ ポートに関する研究	日本老年行動科学 会第 15 回大会	東京	2012 年 10 月
14	孫琴・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 宮田正子・ 坂口佳江・ 吉村昌子・ 小田博子・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	学習活動を支えるサポー トの日常生活の変化につ いて	日本老年行動科学 会第 15 回大会	東京	2012 年 10 月

プロジェクト番号

S1002008

15	孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 坂口佳江	健康高齢者の認知機能への介入ー遅延効果ー	日本心理学会第 76 回大会	東京	2012 年 9 月
16	孫琴(小講演) 司会: 吉田甫	健康高齢者の抑制機能の低下および可塑性に関する研究	日本心理学会第 76 回大会	東京	2012 年 9 月
17	櫻谷真理子	児童養護施設におけるアフターケアの現状と課題	日本生活指導学会第 30 回大会	京都	2012 年 9 月
18	Hiroshi Utsunomiya	Consciousness of birth of a child in married young adults : Associations with marital commitment and exposure to interparental conflict	6th Congress of the European Society on Family Relations	Lillehammer, Norway	2012 年 9 月
19	藤健一	定温度に設定した長期連続実験場面におけるハトの摂食・摂水行動の分析(2)ー一日長時間の効果: 春分から夏至, 秋分, 冬至, 再び春分までー	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
20	梶原渉・ 服部雅史	行為性と人物特性が道徳性判断に与える影響	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
21	服部雅史・ 服部郁子・ 山祐嗣	ワークショップ:「真と偽を超えて(2): 因果推論とアブダクションにおける『空』値」	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
22	服部雅史・ 服部郁子・ 山祐嗣	ワークショップ:「真と偽を超えて(1): 推論研究の新パラダイム」	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
23	服部雅史	洞察問題解決への閾下プライミング効果	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
24	星野祐司	画像の記憶における時間的遡及	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
25	尾田政臣	楽曲の選好度が音質評価に与える影響	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月

プロジェクト番号

S1002008

26	春日秀朗・ 渡邊卓也・ 富岡沙希・ 宇都宮 博・ サトウタツヤ	帯同赴任から単身赴任を 選択するまでのプロセスー 母親の語りを通してー	日本質的心理学会 第9回大会	東京都市大 学	2012 年 9 月
27	東山篤規	The effects of size, duration, and luminance of visual line on apparent vertical while the head was tilted.	The 35th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception.	Alghero, Italy	2012 年 9 月
28	東山篤規・ 村上嵩至・ 佐藤敬子	知的作業を妨害する騒音 の特徴ー雑踏, 音楽, 会 話の比較ー	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
29	Ryo Orita, Masasi Hattori	Effects of supraliminal and subliminal hint priming on insight problem solving	The 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society	札幌	2012 年 8 月
30	Hattori, Ikuko, Masasi Hattori	Is past information useful for evaluating present covariation information? Effect of irrelevant information on causal judgment	The 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society	札幌	2012 年 8 月
31	京屋郁子・ 尾田政臣	The influence of redundant and idiosyncratic attributes on coherence within a category and contrast between categories	The 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society	札幌	2012 年 8 月
32	宇都宮博	中高年者のメンタルヘルス と配偶者の存在意味ー人 生半ばを生きる夫婦を結 びつけているものとはー ※大会準備委員会企画シ ンポジウム「夫婦の感情と システムー夫婦はどのよう にして危機を乗り越えるの かー」(話題提供)	第29回日本家族心 理学会	東京	2012 年 7 月
33	Hattori, Ikuko, Masasi Hattori	The effects of attention and working memory on causal judgment	The 30th International Congress of Psychology	Cape town, Republic of South Africa	2012 年 7 月
34	Masasi Hattori, Sloman, S. A.,	Effects of unrecognized hints and metacognitive	The 30th International	Cape town, Republic of	2012 年 7 月

プロジェクト番号

S1002008

	Ryo Orita	control in insight problem solving	Congress of Psychology	South Africa	
35	藤健一	ハトの体重統制法による穀類強化子の機能の分析:繰返し測定による分析	日本動物心理学会第 72 回大会	西宮	2012 年 5 月
36	北岡明佳	赤いフレーザー・ウィルコックス錯視を用いたデザイン	日本色彩学会第 43 回全国大会	京都	2012 年 5 月
37	藤健一	“Skinner の問題箱 (problem box: 1935)”動作模型の製作	関西心理学会第 123 回大会	亀岡市	2011 年 11 月
38	中鹿直樹・ 望月昭・ 朝野浩・ サトウタツヤ・ 吉岡昌子・ 寺崎幸子・ 木戸彩恵・ 堀田正基・ 井上学	<u>障がいのある個人の継続的支援について—障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査—</u> *9	対人援助学会第 3 回年次大会	立命館大学	2011 年 11 月
39	辻岡誠也・ 土田菜穂・ 森大典・ 尾西洋平・ 林炫廷・ 中鹿直樹・ 望月昭	<u>大学内模擬喫茶店舗における特別支援学校生徒の就労実習—ビデオモデリングによる「できること」の自己評価指導—</u> *10	対人援助学会第 3 回年次大会	立命館大学	2011 年 11 月
40	林炫廷・ 太田隆士・ 中鹿直樹・ 望月昭	<u>障害のある人への継続的な就労支援を行うための「できること」についての情報構築—特別支援学校の教員と保護者の連携の下での「できますシート」の書式の検討—</u> *11	対人援助学会第 3 回年次大会	立命館大学	2011 年 11 月
41	望月昭・ 中鹿直樹・ イムヒョンジョン・ 乾明紀	<u>キャリアアップのための「アクティブ・シミュレーション」の場としての大学の活用</u> *12	対人援助学会第 3 回年次大会	立命館大学	2011 年 11 月
42	吉村昌子・ 孫琴・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 宮田正子	学習活動の遂行による高齢者の日常生活への変化について—3 年間の学習活動を終えた高齢者を中心とした検討—	対人援助学会第 3 回年次大会	立命館大学	2011 年 11 月

プロジェクト番号

S1002008

	坂口佳江・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎				
43	宮田正子・ 孫琴・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 吉村昌子・ 坂口佳江・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	学習活動による高齢者及びサポータの変化について—サポータの視点を中心とした検討—	対人援助学会第3回年次大会	立命館大学	2011年 11月
44	坂口佳江・ 孫琴・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎	3年間学習活動の遂行による認知障害を持つ高齢者の変化について	対人援助学会第3回年次大会	立命館大学	2011年 11月
45	Hiroshi Utsunomiya	Attitudes toward marriage and parents' marital quality: the role of intimacy with the romantic partner	International Association for Relationship Research Mini-Conference,	Tucson, United States of America	2011年 10月
46	戸名久美子・ 濱口洋行・ 吉田甫・ 土田宣明・ 孫琴・ 高橋伸子・ 石川真理子・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 坂口佳江・ 津島健一郎・ 河岸かおり・ 中村嘉宏	レビー小体型認知症様の幻視に起因する問題行動が減少した症例～京都支部事例検討会にて日本老年行動科学会方式で検討した症例の報告～	日本老年行動科学会第14回大会	青森	2011年 10月

プロジェクト番号

S1002008

47	孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 坂口佳江・ 石川真理子・ 高橋伸子	日常生活における失敗傾向に関する研究—学習活動を支えるサポータを中心とした検討—	日本老年行動科学会第14回大会	青森	2011年 10月
48	石川真理子・ 孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 高橋伸子・ 大川一郎・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 坂口佳江	サポータにおけるコミュニケーションの変化に関する研究—学習活動を支えることによる検討—	日本老年行動科学会第14回大会	青森	2011年 10月
49	高橋伸子・ 孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 石川真理子・ 大川一郎・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 坂口佳江	学習活動を支えるサポータに関する研究—抑うつ性およびアパシー傾向を中心とした検討—	日本老年行動科学会第14回大会	青森	2011年 10月
50	竹内謙彰他	<u>日本・中国・ベトナム3カ国における発達障害児とその家族の特別なニーズについての調査研究：自閉症スペクトラム障害と知的障害の比較を中心に</u> *4	日本特殊教育学会第49回大会	弘前	2011年 9月
51	竹内謙彰他	<u>Research on needs of children with autism spectrum disorders and their family: Comparison among Japan, China and Vietnam</u> *3	Asia Pacific Autism Conference 2011	Perth, Australia	2011年 9月
52	宇都宮博	成人初期における配偶者との関係性と親となることへの意識	日本心理学会第75回大会	日本大学	2011年 9月

プロジェクト番号

S1002008

53	藤健一	スキナーの累積記録器の変遷(1930-1960) Gerbrands Model C-1(1955)動作模型の製作	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
54	藤健一	定温度に設定した長期連続実験場面におけるハトの摂食・摂水行動の分析	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
55	服部雅史	定言的三段論法推論の確率サンプリング・モデル	日本認知科学会第 28 回大会	東京大学	2011 年 9 月
56	東山篤規・ 山崎校	自己誘導運動(ベクション)と身体姿勢の関係ーヘッド・マウンティッド・ディスプレイを用いて	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
57	京屋郁子・ 尾田政臣	プロトタイプ学習と周辺事例学習によるカテゴリ化の違いについて	日本認知科学会第 28 回大会	東京	2011 年 9 月
58	京屋郁子・ 尾田政臣	プロトタイプ学習と周辺事例学習によるカテゴリ化の違いについて	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
59	尾田政臣・ 京屋郁子	一対比較法による矩形比率選好の検討	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
60	Stevanov, J., Akiyoshi Kitaoka, Jankovic, D.	"Rotating snakes" illusion: Changes in pattern layout affect perceived strength of illusory motion	The 34th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	Toulouse, France	2011 年 9 月
61	Boyarskaya, E., Hecht, H., Akiyoshi Kitaoka	When does the Monalisa effect break down?	The 34th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	Toulouse, France	2011 年 9 月
62	星野祐司	リズムの聴取によって引き起こされた旋律の再認記憶	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
63	都賀美有紀・ 星野祐司	意味類似性と遅延が順序の記憶に及ぼす影響:再構成課題を用いた検討	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
64	Lin Shuzhen・ 大川一郎・ 吉田甫・ 土田宣明・ 孫琴・ 高橋伸子	在宅高齢者を対象とした音読・計算活動の影響についてー主観的評価における変化の検討	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月

プロジェクト番号

S1002008

	石川真理子・ 宮田正子・ 坂口佳江・ 吉村昌子・ 箱岩千代治・ 中村嘉宏				
65	孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎・ 宮田正子・ 吉村昌子・ 石川真理子・ 箱岩千代治・ 坂口佳江・ 高橋伸子	健康高齢者の記憶と抑制 に関する介入研究－3年 間の音読・計算活動を中心とした検討－	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
66	高橋伸子・ 孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎・ 箱岩千代治・ 石川真理子・ 坂口佳江・ 宮田正子・ 吉村昌子	健康高齢者の記憶変化に 関する 3 年間の追跡研究 －短期記憶と作業記憶を 中心とした検討－	日本心理学会第 75 回大会	日本大学	2011 年 9 月
67	Atsuki Higashiyama	Relaxation of bodily muscles facilitates roll vection.	The 34th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	Toulouse, France	2011 年 8 月
68	山本耕平	ひきこもりの社会的要因－ 韓日比較検討の視座－	韓日ひきこもり研究 会	ソウル, 韓国	2011 年 8 月
69	服部雅史・ 織田涼	潜在ヒントによる洞察とメタ 認知による妨害効果	認本認知心理学会 第 9 回大会	学習院大学	2011 年 5 月
70	京屋郁子・ 尾田政臣	カテゴリ化における事例 数, 特徴数, カテゴリ構造 の強さの効果	日本認知心理学会 第 9 回大会	東京	2011 年 5 月
71	尾田政臣・ 京屋郁子	一対比較法による対称性 の選好に関する検討	日本認知心理学会 第 9 回大会	東京	2011 年 5 月
72	荒木美知子・ 荒木穂積	東アジアにおける自閉症ス ペクトラム児の親のニーズ	日本発達心理学会 第 22 回大会	東京学芸大 学	2011 年 3 月

プロジェクト番号

S1002008

	竹内謙彰・ 荒井庸子・ 井上洋平	に関する比較研究(2)			
73	荒木穂積・ 竹内謙彰・ 荒井庸子・ 井上洋平・ 荒木美知子	東アジアにおける自閉症ス ペクトラム児の親のニーズ に関する比較研究(1)	日本発達心理学会 第 22 回大会	東京学芸大 学	2011 年 3 月
74	深谷弘和・ 山本耕平	自由記述にみる障害者福 祉従事者のストレス・コー ピング—年代差・職階差に 注目して—	2010 年度関西社回 福祉学会年次大会	京都	2011 年 3 月
75	Wataru Ozawa	Support Network for the Elderly Foreigner: A New Movement of Korean Old Comers in Kyoto	Conference on “Immigration in Multi-ethnic Contexts from International Perspectives”	Taipei, Taiwan	2010 年 12 月
76	中鹿直樹・ 青山祥子・ 伊藤亜里沙・ 九野和也・ 山口真理子・ 吉岡昌子・ 望月昭・ 木ノ戸昌之・ 田谷隆行	<u>障害者就労場面におけ る、福祉施設・企業・大学 間の連携作業の機能的分 析—立命館大学学生ジョ ブコーチの実践から—</u> *13	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 11 月
77	青山祥子・ 伊藤亜里沙・ 九野和也・ 吉岡昌子・ 中鹿直樹・ 望月 昭・ 木ノ戸昌幸・ 田谷隆行	<u>学生ジョブコーチによる障 害者の主体的な業務改善 を支える就労支援の方法 の検討—「やりがい」をもっ て働き続けるために—</u> *14	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 11 月
78	藤健一・ 村松明穂	古装置としてのバーニアク ロノスコープについて	関西心理学会第 122 回大会	兵庫医療大 学	2010 年 11 月
79	都賀美有紀・ 星野祐司	音韻類似性と遅延が順序 の記憶に及ぼす影響:系 列的再構成課題を用いた 検討	日本基礎心理学会 第 29 回大会	関西学院大 学	2010 年 11 月

プロジェクト番号

S1002008

80	都賀美有紀・ 星野祐司	音韻類似性と遅延が順序 の記憶に及ぼす影響:再 構成課題を用いた検討	関西心理学会第 122 回大会	兵庫医療大 学	2010 年 11 月
81	山口真理子・ 中鹿直樹・ 望月昭	知的障害のある成人にお ける施設外支援に対する 学生ジョブコーチ支援ーセ ルフ・マネージメント行動の 形成・維持に向けた支援 内容の検討ー	日本行動分析学会 第 28 回年次大会	神戸市	2010 年 10 月
82	川崎希望・ 林炫廷・ 望月昭	模擬店舗での実習におけ る接客スキルの向上に向 けたビデオモデリングの効 果	日本行動分析学会 第 28 回年次大会	神戸市	2010 年 10 月
83	望月昭	IRB としての「人を対象とし た研究倫理委員会」を立ち 上げるときー行動分析学 あるいは対人援助学の立 場からー (大会主催シン ポジウム 話題提供)	日本行動分析学会 第 28 回年次大会	神戸市	2010 年 10 月
84	藤健一	WS「動物学習研究の方法 論を考えるー条件づけ研 究事始ー」の指定討論	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
85	藤健一	ハトの摂食・摂水行動に及 ぼす給餌・給水環境統制 の効果	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
86	京屋郁子・ 尾田政臣	カテゴリ判断および確信度 評定と典型性評定の違い について	日本認知科学会第 27 回大会	神戸大学	2010 年 9 月
87	京屋郁子・ 尾田政臣	カテゴリ化における不要な 特徴の出現頻度がルール 抽出に与える影響	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
88	東山篤規・ 村上嵩至	視覚的垂直と頭部の方向 知覚の関係	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
89	星野祐司	リズム聴取後に提示され た旋律の再認記憶	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
90	服部雅史	モンティホール問題におけ る等確率性と因果性	日本認知科学会第 27 回大会(ワークシ ョップ)	神戸大学	2010 年 9 月
91	櫻谷真理子	児童養護の現状と生活指 導の課題	日本生活指導学会 第 28 回大会	名古屋市	2010 年 9 月
92	春日井敏之	学校教育の現状と生活指 導の課題	日本生活指導学会 第 28 回研究大会	名古屋市	2010 年 9 月

プロジェクト番号

S1002008

93	土田宣明	高次精神機能の維持と社会性(自主シンポジウム・話題提供)	日本教育心理学会 第 52 回大会	早稲田大学	2010 年 8 月
94	高橋伸子・ 孫琴・ 箱岩千代治・ 吉村昌子・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎他	健康高齢者における大活字本の借り出し状況(読書志向・量)と音読・計算活動との関連から	日本老年行動科学会 第 13 回大会	鹿児島県	2010 年 9 月
95	坂口佳江・ 孫琴・ 石川真理子・ 吉田甫・ 大川一郎・ 土田宣明他	健康高齢者の音読・計算活動の効果と出席回数との関連について	日本老年行動科学会 第 13 回大会	鹿児島県	2010 年 9 月
96	Lin shuzen・ 大川一郎・ 吉田甫・ 土田宣明他	在宅高齢者を対象とした音読・計算活動の影響についてー日常生活面における変化の検討ー	日本老年行動科学会 第 13 回大会	鹿児島県	2010 年 9 月
97	孫琴・ 吉田甫・ 土田宣明・ 大川一郎他	健康高齢者の認知機能に関する介入研究ー音読・計算活動の参加年数を中心とした検討ー	日本老年行動科学会 第 13 回大会	鹿児島県	2010 年 9 月
98	Lin shuzen・ 大川一郎・ 吉田甫・ 土田宣明他	在宅高齢者の健康行動の動機に関する研究	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
99	Lin Shuzen, Ichiro Okawa, Hajime Yoshida, Noriaki Tsuchida, et al.	Effects of Cognitive Training Activity on Community-dwelling Older Adults Participants' Psychological Well-being	International Psycho geriatric Association (IPA) 2010 International Meeting	Spain	2010 年 9 月
100	土田宣明	高齢者ケアに対する心理学からのアプローチ(WS 話題提供)	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
101	村松明穂・ 藤健一	デンショバトにおける反応トポグラフィ・強化子が異なる他個体のオペラント行動の弁別学習	日本動物心理学会 第 70 回大会	帝京大学	2010 年 8 月
102	藤健一	ハトの給餌・給水環境の体重変動に及ぼす効果	日本動物心理学会 第 70 回大会	帝京大学	2010 年 8 月

プロジェクト番号

S1002008

103	<u>Atsuki Higashiyama</u> , Shimono Koichi	Apparent depth of picture in mirror.	The 33th Annual Meeting of European Conference on Visual Perception	Lausanne, France	2010 年 8 月
104	Wataru Ozawa	Comparative study on Volunteerism of the Youth in Japan, Korea and Canada : Focusing on the Function of Mandatory Volunteer Program	ISTR(International Society for Third-Sector Research) 9th International Conference	Istanbul, Turkey	2010 年 7 月
105	Shimono Koichi, <u>Atsuki Higashiyama</u>	The dual egocenter hypothesis can explain directional discrimination between a visual target and a kinesthetic target.	The Sixth Asia-Pasic Conference on Vision.	Taipei, Taiwan	2010 年 7 月
106	前田明日香・ 井上洋平・ 荒井庸子・ 荒木穂積・ <u>竹内謙彰</u> ・ 荒木美知子	自閉症スペクトラム児の親支援のための調査研究(2) —知的障害児との比較検討—	日本保育学会第 63 回大会	松山市	2010 年 5 月
107	Hiroshi Utsunomiya	Interparental conflict and marital commitment of parents :Effects on adult children's desire to marry	4th International Self Determination Theory Conference	Ghent, Belgium	2010 年 5 月
108	Akiho Muramatsu, <u>Kenichi Fuji</u>	Discrimination learning of the conspecific's behavioral stimuli in pigeons (Columba livia) with introducing different topographies and reinforcers.	HOPE-GM International Symposium "HOPE-GM Lectures on Primate Mind and Society"	京都	2010 年 3 月
109	服部雅史	推論の対称性と因果性: 等確率性仮説の射程と展望	第 4 回内部観測研究会	東京理科大学	2010 年 3 月
テーマ 2 ニーズの多様化と支援の再構成—ケアする人のケアのためのコミュニティをととして					
110	春日井敏之	「いじめ問題」から見える子どもの世界と実践的課題	教育人間学会第 6 回大会	京都	2013 年 1 月
111	松島京・ 松浦崇・ 吉田晃高	保育所における外国につながるのある子どもと保護者の支援	日本対人援助学会 第 4 回大会	神奈川保健福祉大学	2012 年 11 月

プロジェクト番号

S1002008

112	Ryozo Matsuda	Changing roles of social health insurers in delivering public health services	Health Systems and Policy Monitor Networking meeting	Rome	2012 年 11 月
113	松田亮三	格差社会における健康の公平性の追求: 国際的経験から日本への示唆を考える	第 71 回日本公衆衛生学会総会・フォーラム「健康課題に対する社会医学からみた今後の新しい健康支援方法」	山口市会館	2012 年 10 月
114	廣井亮一	情状鑑定と裁判員裁判	法と心理学会第 13 回大会	武蔵野美術大学	2012 年 10 月
115	松田亮三	大学の個人情報保護と情報金庫について	対人援助における情報金庫・アーカイブの活用に向けて	立命館大学	2012 年 8 月
116	松田亮三	健康政策の新たな展開—状況、目標、実施—	国際シンポジウム「介護予防・健康政策マネジメントの新潮流—社会環境や格差への着目」	名古屋市	2012 年 8 月
117	廣井亮一 他 2 名	法に関わる家族と子どもの援助をめぐる—離婚・虐待・非行の問題解決のために	第29回日本家族心理学学会	東京学芸大学	2012 年 7 月
118	松田亮三	公衆衛生サービスの日英比較分析—方法論的考察—	第 53 回日本社会医学学会総会	高槻市	2012 年 7 月
119	Ryozo Matsuda	Divided and Universal: Gradual Changes in Japanese Health Insurance	The 22nd World Congress of International Political Science Association	Madrid, Spain	2012 年 7 月
120	松田亮三	医療政策形成におけるシンクタンクの役割—日英米の比較の試み	医療経済研究会	公益財団法人医療科学研究所	2012 年 6 月
121	廣井亮一 他 4 名	障害のある非行少年の家族支援	第29回日本家族研究・家族療法学会	山口	2012 年 6 月
122	Junya Tsutsui, Maki Takeuchi	Disaggregating Housework: An International Comparison of Gendered Segregation of Household Labor	2012 Annual Meeting of Population Association of America	San Francisco, United States of America	2012 年 5 月

プロジェクト番号

S1002008

123	松島京・ 松浦崇	就学前の外国につながり のある子どもと保護者の支 援に関する研究	日本保育学会第 65 回大会	東京家政大 学	2012 年 5 月
124	松田亮三	貧困、健康、困難をかかえ る患者・コミュニティへの施 策と臨床的対応の探索的 研究に向けて	日本医療経済学会 第 16 回研究例会	東京	2012 年 5 月
125	松田亮三	普遍主義の下での分断: 皆保険の変化について	社会政策学会第 124 回(2012 年度春 季)大会	東京	2012 年 5 月
126	Ryozo Matsuda, Toshitaka Nakahara	Changing Roles of Social Health Insurers in Delivering Public Health Services	The 13th World Congress on Public Health	Addis Ababa, Ethiopia	2012 年 4 月
127	廣井亮一	家裁調査官と司法臨床	法と精神・心理研究 会	大分市	2011 年 12 月
128	廣井亮一	司法臨床の展開(第一報) —弁護士と臨床心理の協 働	法と心理学会第 12 回大会	名古屋大学	2011 年 10 月
129	秋葉武	韓国における社会的企業 のマネジメント	日本経営診断学会 第 44 回全国大会	別府市	2011 年 10 月
130	Junya Tsutsui	Work-Life Conflicts in the Public Sector Employment	International Sociological Association Research Committee on Family (RC06) Research Seminar	Kyoto	2011 年 9 月
131	廣井亮一	官民協働刑務所における 父親教育プログラムの実 施に関する報告	日本心理臨床学会 第 30 回大会	福岡市	2011 年 9 月
132	筒井淳也	日本の家事分担における 性別分離:NFRJ08 による 分析	日本家族社会学会 第 21 回大会	甲南大学	2011 年 9 月
133	秋葉武	韓国の社会的企業	東アジア社会政策 研究会	豊橋市	2011 年 8 月
134	廣井亮一	Risk Management for juvenile Delinquents with Pervasive Developmental Disorders and Mental Disorders in Practice	16th World Congress of the International Society for Criminology	神戸市	2011 年 8 月

プロジェクト番号

S1002008

135	廣井亮一	Support toward Offenders with Intellectual Disability	16th World Congress of the International Society for Criminology	神戸市	2011 年 8 月
136	廣井亮一	家族支援における法と臨床－弁護士と臨床心理士の協働	日本研究・家族療法学会第 28 回大会	静岡市	2011 年 6 月
137	津止正敏	「買物難民」について考える	ボランティア・市民活動研究交流会 2010	滋賀県草津市	2010 年 12 月
138	中村正	対人援助における身体と生活	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 11 月
139	Junya Tsutsui	Changes in Agenda in Work-Life Issues in Japan: toward an effective solution to the problems of East Asian welfare system	The 1st Annual Conference of The International Association for Asia Pacific Studies	別府市	2010 年 11 月
140	中村正	司法臨床の可能性－加害者治療の観点から	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月
141	廣井亮一	司法臨床の概念－我が国の家庭裁判所を踏まえて－	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月
142	秋葉武	韓国の社会的企業の現状と課題	日本協同組合学会 第 30 回大会	佐賀大学	2010 年 10 月
143	廣井亮一	司法臨床領域での訓練システム－家裁調査官養成課程から見えること－	第 29 回日本心理臨床学会	仙台市	2010 年 9 月
144	Yukiko Asai, Masaaki Mizuochi, Junya Tsutsui	What Makes Wives Do More Housework in Some Countries and Less in Others? Complementary Relationships in Couples' Housework	European Population Conference	Vienna, Austria	2010 年 9 月
145	津止正敏	つながりの構築とセーフティネットのあり方	第 49 回社会福祉夏期大学	兵庫県神戸市	2010 年 8 月
146	Junya Tsutsui	The Transitional Phase of Mate Selection in East Asian Countries	XVII ISA World Congress of Sociology	Göteborg, Sweden	2010 年 7 月
147	廣井亮一	家族支援における法と臨床	第 27 回日本家族研究・家族療法学会	福島市	2010 年 6 月

プロジェクト番号

S1002008

148	Yukiko Asai, Masaaki Mizuochi, <u>Junya Tsutsui</u>	Relationship of Couples' Housework in 17 Countries	2010 Annual Meeting of Population Association of America	Dallas, United States of America	2010 年 4 月
テーマ3 情報アーカイブとキャリアパスポートによる情報の蓄積と移行システムの構築					
149	大谷いずみ	生・老・病・死の言説構造と 生命倫理教育／死生観教 育	第24回日本生命倫 理学会年次大会大 会企画シンポジウ ム「生命倫理教育 の再考」	立命館大学	2012 年 10 月
150	富崎悦子・ 田中笑子・ 篠原亮二・ 杉澤悠圭・ 平野真紀・ 渡辺多恵子・ 望月由妃子・ <u>矢藤優子</u> ・ 山川紀子・ 安梅勅江	18 か月時の睡眠リズムと 社会能力の発達軌跡に関 する研究	第71回日本公衆衛 生学会総会	山口	2012 年 10 月
151	村本邦子	日本の児童・女性政策と心 理学 ～バックラッシュ、ナ ショナリズムと心理学 (Special Workshop 社会問 題・社会政策と心理学の親 しき関係を問い直す～日 本と英国の比較を通して)	日本社会心理学会 第53回大会	つくば国際会 議場	2012 年 10 月
152	上村晃弘・ 白石理佐・ <u>サトウタツヤ</u>	ソーシャルメディアにおけ る震災後の地震予知流言	日本質的心理学会 第9回大会	東京都市大 学	2012 年 9 月
153	天田城介	アンダーミドル論——行き 場のないアンダーミドルは どうやって生きてきたのか	第28回日本社会病 理学会大会シンポ ジウム	大阪市立大 学	2012 年 9 月
154	<u>村本邦子</u>	大学(院)教育におけるジェ ンダー・フェミニズム～臨 床心理学の課題	日本心理学会第76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
155	<u>矢藤優子</u> ・ 廣瀬翔平	幼児におけるベンダーゲシ ュタルトテスト得点とその 筆運プロセスの関連;筆速 と筆順に注目して	日本心理学会第76 回大会	専修大学	2012 年 9 月

プロジェクト番号

S1002008

156	Shohei Hirose, <u>Yuko Yato</u>	Developmental changes in young children's self assertion: Observation in free play situations	The 30th International Congress of Psychology	Cape town, Republic of South Africa	2012 年 7 月
157	<u>Yuko Yato</u> , Shohei Hirose	Quantitative dynamic analysis of developmental changes in children's drawings and writings through the Digital Pen.	The 30th International Congress of Psychology	Cape town, Republic of South Africa	2012 年 7 月
158	村川治彦・ 小田博志・ <u>村本邦子</u>	体験的心理学を基盤とした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発の試み	日本平和学会 2012 年度春季大会	沖縄大学	2012 年 6 月
159	中川吉晴	ホリスティック教育による学校暴力対策	韓国ホリスティック教育学会	城南市, 韓国	2012 年 5 月
160	Mari Fukuda, <u>Sato Tatsuya</u>	Individual Quality of Life in person with Duchenne Muscular Dystrophy: the transformations of QOL over time	The 7th International Conference on Rare diseases & Orphan Drugs 2012	Tokyo	2012 年 2 月
161	Tomoo Hidaka, Shodo Mizuki, Mari Fukuda, Mayu Akasaka, <u>Tatsuya Sato</u>	HOW ALS PATIENTS EXPERIENCE AND MAKE SENSE THE LIFE WITH ILLNESS	The 7th International Conference on Rare diseases & Orphan Drugs 2012	Tokyo	2012 年 2 月
162	Tatsuya Sato	THE NARRATIVE PATHWAY TO AUTHENTIC CULTURE OF LIVING WELL	The 7th International Conference on Rare diseases & Orphan Drugs 2012	Tokyo	2012 年 2 月
163	大谷いづみ	自分らしく、人間らしく「死にたい? ——「安楽死・尊厳死」思想が内包するもの	「難病患者・障害者の自宅療養を考える」学習会	ホテルグラン ドヒル市ヶ谷	2012 年 2 月
164	Akinobu Nameda, Kosuke Wakabayashi, Tomomi Hatano, Shinya Saito, Mitsuyuki Inaba, <u>Tatsuya Sato</u>	2011 Towards Social Application and Sustainability of Digital Archives: The Case Study of 3D Visualization of Large-scale Documents of the Great Hanshin-Awaji Earthquake	The 3rd International Conference of Digital Archives and Digital Humanities Conference Taipei	Taiwan	2011 年 12 月

プロジェクト番号

S1002008

165	Ayae Kido, Kosuke Wakabayashi, Tomomi Hatano, Akinobu Nameda, Shinya Saito, Mitsuyuki Inaba, <u>Tatsuya Sato</u>	Visualizing and Analyzing Cultural Voices in Computer-Mediated Communication through Social Gaming Simulation	The Second International Conference on Culture and Computing	Kyoto	2011 年 10 月
166	村本邦子	心理カウンセリングにおける被害者供述に対するアプローチ	法と心理学会第 12 回大会	名古屋大学	2011 年 10 月
167	Saki Yamada, <u>Tatsuya Sato</u>	The Visualization of the Statement Analysis in a single defendant case and a multiple defendants case	The 5th Japan – Korea Student Symposium	Ewha Womans University	2011 年 9 月
168	Yuko Yasuda, <u>Kuniko Muramoto</u>	Couple relationships in infertility treatments: A narrative approach that organises the couple's experiences	International Society for Cultural and Activity Research Congress Roma, International Society for Cultural and Activity Research	Roma University	2011 年 9 月
169	<u>村本邦子・笠井綾</u>	历史创伤的修复与和解	第 3 回国際表現性心理療法学会	蘇州大学	2011 年 8 月
170	村本邦子	铭记南京: 世代相传的历史心理创伤的治疗修复及表达性艺术	第 3 回国際表現性心理療法学会	蘇州大学	2011 年 8 月
171	Tatsuya Sato	Three modes of viewing the culture in the Psyche: How can we conceive the culture in psychology for an integrative theory?	12th European Congress of Psychology	Turkey	2011 年 7 月
172	Tatsuya Sato	The Real Futures of sign and promoter sign; What Trajectory Equifinality Model (TEM) implies for cultural psychology In Symposium New ways with(in) cultural psychology (Gulerce, Aydan organizer)	12th European Congress of Psychology	Turkey	2011 年 7 月

プロジェクト番号

S1002008

173	Jun Matsushima, <u>Tatsuya Sato</u>	A history of clinical psychology in Japan: continuity and discontinuity in clinical psychology between pre and post World War II	12th European Congress of Psychology	Turkey	2011 年 7 月
174	<u>サトウタツヤ</u> ・ 安田裕子・ 山田嘉徳・ 金田桃子・ 森直久	複線径路等至性モデル (TEM) 研究の多様性—文 化と時間を重視する方法 論の展開	日本発達心理学会 第 22 回大会	東京学芸大 学	2011 年 3 月
175	村本邦子	戦時性暴力/日常の性暴 力～南京ワークショップの 報告	シンポジウム「バッ クラッシュ時代の平 和構築とジェンダー ～女性国際戦犯法 廷 10 年を迎えて」	立命館大学	2010 年 12 月
176	福田茉莉・ 日高友郎・ 滑田明暢・ 若林宏輔・ 水月昭道・ <u>サトウタツヤ</u> ・ 中島孝	筋ジストロフィー患者の Individual QOL と家族の 関係性: 患者のライフス トーリーをめぐる患者・家族 間のズレに着目して.	日本質的心理学会 第 7 回大会	茨城大学	2010 年 11 月
177	日高友郎・ 赤阪麻由・ 福田茉莉・ 若林宏輔・ 滑田明暢・ 安達俊祐・ <u>サトウタツヤ</u>	協同的営みとしての「沈 黙」の生成: マイクロ分析 に基づく一考察	日本質的心理学会 第 7 回大会	茨城大学	2010 年 11 月
178	<u>大谷いづみ</u> (オーガナイザー)・ 小松義彦・ 竹田扇・ 爪田一壽(報告)	日本における「生命倫理の 成立」再考——オーラル・ ヒストリー調査の結果から	第 22 回日本生命倫 理学会年次大会	藤田保健衛 生大学	2010 年 11 月
179	渡辺佳代・ <u>村本邦子</u> ・ 安田裕子	DV 家庭に育った子ども支 援の展開～派遣プログラ ムの実施	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 11 月
180	竹之内裕文・ <u>大谷いづみ(司会)</u>	生活のなかの死: 地域社 会での看取りを考える	第 29 回日本医学哲 学・倫理学会大会 シンポジウム「生活 のなかの死」	岩手医科大 学	2010 年 10 月

プロジェクト番号

S1002008

181	Mari Fukuda, <u>Tatsuya Sato</u>	Quality of Life In Persons with Muscular Dystrophy: the Example of Constructs of Individual QoL.	6th International Conference on the Dialogical Self	Athens, Greece	2010 年 10 月
182	渡邊卓也・ 川本静香・ 竹田剛・ <u>サトウタツヤ</u>	過去 20 年間の海外における状態自尊感情研究の展望 (3) —キーコンセプトに基づいた分類操作—	日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会	慶應義塾大学	2010 年 10 月
183	川本静香・ 竹田剛・ 渡邊卓也・ <u>サトウタツヤ</u>	過去 20 年間の海外における状態自尊感情研究の展望 (2) —対応分析を用いた詳細検討—	日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会	慶應義塾大学	2010 年 10 月
184	竹田剛・ 川本静香・ 渡邊卓也・ <u>サトウタツヤ</u>	過去 20 年間の海外における状態自尊感情研究の展望 (1) —研究動向の概括的検討—	日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会	慶應義塾大学	2010 年 10 月
185	滑田明暢・ 濱田恵理・ <u>サトウタツヤ</u> ・ 若林宏輔・ 山田早紀	大学生の著作権意識の実態	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月
186	Tomoo Hidaka, Shodo Mizuki, <u>Tatsuya Sato</u> , Akinobu Nameda, Kosuke Wakabayashi, Mari Fukuda	The dialogical process in the communication between persons with severe disease and care-giver – focused on the devices supporting the communication of ALS patient	6th International Conference on Dialogical Self	Athens, Greek	2010 年 10 月
187	滑田明暢・ 浜田恵理・ <u>サトウタツヤ</u> ・ 若林宏輔・ 山田早紀	大学生の著作意識の実態	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月
188	Kuniko Muramoto	Remembering Nanjing to Heal the Wounds of History	International Conference for Educators on the History of WWII in Asia	Toronto University	2010 年 10 月
189	村本邦子	「司法臨床」の可能性— 司法と心理臨床の協働を	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月

		めぐって治療的司法の観点から—カナダの問題解決型裁判所			
190	村本邦子	法曹養成教育における法と心理の協同 —立命館大学法科大学院・リーガル・クリニックⅡ(女性と人権)と同大学院応用人間科学研究科「司法臨床」科目の連携	法と心理学会第11回大会	立命館大学	2010年10月
191	<u>サトウタツヤ・</u> 日高友郎・ 福田茉莉・ 安田裕子・ 利島保・ 野口京子	医療・健康と心理学の新しい関係をめざして	日本心理学会第74回大会	大阪大学	2010年9月
192	Yoko Matsubara	Patient's Experience and Cyborg Ethics	Mechanisation of Empathy in Health Care, International Workshop	Bergamo, Italy	2010年9月
193	<u>Tatsuya Sato,</u> Jaan Valsiner	Zone of finality and promoter sign create chronotope	6th international conference on dialogical self	Athens, Greece	2010年9月
194	日高友郎・ 福田茉莉・ 若林宏輔・ 滑田明暢・ <u>佐藤達哉</u>	多様な「時間」の混交が生み出す不規則な秩序	日本心理学会第74回大会	大阪大学	2010年9月
195	Yoshiharu Nakagawa	Two aspects of Japanese spirituality: On the other-power and the self-power	The 10th International Conference of Children's Spirituality	Hong Kong, China	2010年7月
196	天田城介	方法論としてのゴフマン——「酸っぱい葡萄」あるいは「幸福な奴隷」問題	関西社会学会第61回大会一般研究報告B(テーマセッション)「<ゴフマンの方法論を再点検する——ゴフマンは「使える」のか>」	名古屋市立大学	2010年5月
197	村本邦子	臨床教育による『社会の医師』としての法曹の養成～臨床心理の立場から	臨床法学教育学会第三回年次大会	一橋大学	2010年4月

プロジェクト番号

S1002008

その他					
198	京屋郁子	概念における事例の働き —冗長な特徴の影響をと おした検討	日本心理学会第 76 回大会	専修大学	2012 年 9 月
199	荒木美知子他	東アジアにおける自閉症ス ペクトラム児の親のニーズ に関する比較研究(4)—事 例の分析から:日本の場 合—	日本発達心理学会 第 23 回大会	名古屋	2012 年 3 月
200	前田明日香他	東アジアにおける自閉症ス ペクトラム児の親のニーズ に関する比較研究(3)—自 由記述の分析から:日本 の場合—	日本発達心理学会 第 23 回大会	名古屋	2012 年 3 月
201	安達俊祐	マルチボーカル・ビジュア ル・エスノグラフィーを用い た ALS 患者のコミュニケー ション	日本質的心理学会 第 7 回大会	茨城大学	2011 年 11 月
202	Miyuki Toga	The effects of word length and phonological similarity in an order reconstruction task at immediate and delayed retention intervals.	The Psychonomic Society: The 52nd Annual Scientific Meeting.	Seattle, United States of America	2011 年 11 月
203	渡邊卓也	高校生の学習習慣と生活 習慣, からだの調子のあり 方との関連について	日本発達心理学会 第 22 回大会	東京学芸大 学	2011 年 3 月
204	赤阪麻由	慢性の病いととも生きるプ ロセスにおいて抑うつ症状を 表出したケースの検討と考察 —IBD病者の語りから	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 11 月
205	水月昭道	ロスジェネに『日はまた昇 る』か?—格差社会で希望 を探す—	第 83 回日本社会学 会大会	名古屋大学	2010 年 11 月
206	安達俊祐	映像を用いた難病患者の 生の記述と発信:多声的研 究としてのビジュアル・エス ノグラフィの試み	日本質的心理学会 第 7 回大会	茨城大学	2010 年 11 月
207	安達俊祐	ALS 患者のコミュニケーシ ョンと第三者の影響	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 11 月
208	滑田明暢	インタビューにおける研究関 心からずれたやりとり:役割分 担を尋ねる調査から	日本質的心理学会 第 7 回大会	茨城大学	2010 年 11 月

プロジェクト番号

S1002008

209	日高友郎	厚生心理学とライフ・エスノグラフィ: ALS 患者の生を支えるコミュニケーション支援の分析から	日本質的心理学会第 7 回大会	茨城大学	2010 年 11 月
210	滑田明暢	公正感の形成: 家族内役割分担の文脈からの検討	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月
211	Akinobu Nameda	How gender exist in self?: Analysing how positions relate each other in performing family work	The 6th international conference on dialogical self	Athens, Greece	2010 年 10 月
212	Tomoo Hidaka	Transformation process of the meanings of disease - Life ethnography of multilayered support for ALS patients in home care	6th International Conference on Dialogical Self	Athens, Greek	2010 年 10 月
213	福井厚・ 山崎優子・ 高山加奈子・ 藤田政博・ 森久智江	死刑と向き合う裁判員(ワークショップ)	法と心理学会第 11 回大会	立命館大学	2010 年 10 月
214	松島京	戦略的研究基盤形成支援事業	対人援助学会第 2 回年次大会	立命館大学	2010 年 10 月
215	山田尚子・ 渡邊卓也・ 清水智子・ 藤島寛	自己愛人格と自尊感情との関連 (3) —ビッグファイブとの関係—	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
216	清水智子・ 渡邊卓也・ 山田尚子・ 藤島寛	自己愛人格と自尊感情との関連 (2) —潜在的・顕在的自尊感情の組み合わせの効果の検討—	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
217	渡邊卓也・ 清水智子・ 山田尚子・ 藤島寛	自己愛人格と自尊感情との関連 (1) —攻撃性についての構造モデルの検討—	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
218	滑田明暢	ネット掲示板における相談からみる家族内役割分担の公正: 家事分担を行うなかで何が不満を導いているのか? どのように問題を解決するのか?	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
219	滑田明暢	ネット掲示板における相談からみる家族内役割分担の公正 Part2	日本社会心理学会第 51 回大会	広島大学	2010 年 9 月

プロジェクト番号

S1002008

220	Akinobu Nameda	Dialogical tension between wife and husband; Different household roles and tension between roles over time	The 6th international congress of Dialogical Self	Athens, Greece	2010 年 9 月
221	日高友郎	ALS 患者のコミュニケーション支援のエスノグラフィー「技術ピアサポーター」の活動に注目して	日本心理学会第 74 回大会	大阪大学	2010 年 9 月
222	Tomoo Hidaka	Living with an intractable disease: Technology and “technical peer-support	Workshop: The mechanization of Empathy in Health Care	Bergamo, Italy	2010 年 9 月
223	Akinobu Nameda	Women’s conflicted views towards gender roles in contemporary Japanese society	27th International Congress of Applied Psychology	Melbourne, Australia	2010 年 7 月
224	山崎優子	裁判員裁判の実証的研究からみえてくる今後の課題 (シンポジウム「裁判員制度と認知心理学」)	認知心理学会	福岡県	2010 年 5 月

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

幅広い分野における講演会およびシンポジウムを精力的に開催した。開催情報はホームページ上やメールマガジンなどで周知し、学内外の研究者、院生、現場の実践者や当事者など、遠方からの聴講者も含み幅広い方々の参加を得た。2013 年 1 月には、この間の取り組みの報告並びに今後の研究組織の活動をディスカッションする公開企画を開催している。

また、各チームの研究成果報告書として、研究シリーズ 共同対人援助モデル研究(小冊子)を毎年積極的に刊行しており、通巻 10 号となっている。

■戦略的研究基盤形成支援事業「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」 ホームページ

<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model.html>

■関連 HP 立命館大学人間科学研究所 ホームページ

<http://www.ritsumeihuman.com/>

【2010 年度】

- 2010 年 5 月 15 日～8 月 28 日 朱雀キャンパス大講義室
公開講座 シネマで学ぶ「人間と社会の現在」 シリーズ 5 計 4 回
- 2010 年 5 月 15 日～2011 年 3 月 19 日 衣笠キャンパス創思館トレーニングルーム他
あひるくらぶ 観察研究 計 9 回
- 2010 年 5 月 20 日 衣笠キャンパス存心館 901 号教室
日本トランスパーソナル心理学・精神医学会関西地区研究会
- 2010 年 5 月 29 日～2011 年 1 月 23 日 衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室
男性介護研究会 計 3 回
- 2010 年 5 月 31 日～2010 年 11 月 9 日 中国上海復旦大学他
日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業 第 5 回「東アジア発達障害児の治療教育プログラム開発に関するセミナー 計 2 回
- 2010 年 6 月 5 日 衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室
放課後研究会
- 2010 年 7 月 11 日 衣笠キャンパス清心館 2 階 525 室
質的研究ワークショップ ナラティブ研究におけるマイクロジェネティックアプローチの実際
- 2010 年 8 月 22 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
Katarzyna Chawarska 公開講演会 乳幼児期における自閉症スペクトラム障害
- 2010 年 9 月 15 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
法と心理学 法廷における映像技術と心理的影響
- 2010 年 11 月 13 日～2011 年 1 月 15 日 朱雀キャンパス大講義室
公開講座 シネマで学ぶ「人間と社会の現在」 シリーズ 6 計 3 回
- 2010 年 11 月 22 日～2011 年 3 月 11 日 衣笠キャンパス存心館 811 号他
高齢者支援チーム 計 4 回
- 2010 年 12 月 8 日 衣笠キャンパス創思館 401・402 号
William O'donohue 講演会
- 2010 年 12 月 12 日 立命館アカデメイア@大阪
公開シンポジウム 家庭内暴力をのりこえる「家族臨床理論」の構築にむけて
- 2010 年 12 月 21 日 衣笠キャンパス創思館 310 号
発達支援チーム例会 発達障害児を持つ親の特別なニーズに関するインタビュー研究

- 2011 年 1 月 27 日 衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室
人間科学研究所・コリア研究センター(RiCK)共催研究会 「韓国社会の高齢化と介護労働の課題」
- 2011 年 1 月 29 日～2011 年 3 月 5 日 朱雀キャンパス大講義室
公開講座 シネマで学ぶ「人間と社会の現在」シリーズ 7 計 3 回
- 2011 年 2 月 27 日 キャンパスプラザ京都
FSJG 今一度、ひきこもりの理解と支援を考える
- 2011 年 3 月 12 日 衣笠キャンパス以学館 5 号教室
男性介護研究会シンポジウム 家族であること 介護することー在宅と施設のあいだでー
- 2011 年 3 月 13 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
男性介護研究会総会・2 周年記念式典 広げよう 男性介護者の居場所づくり
- 2011 年 3 月 19 日～2011 年 3 月 20 日 京都シネマ
公開講座 シネマで学ぶ「人間と社会の現在」シリーズ 8 計 2 回

【2011 年度】

- 2011 年 4 月 16 日～2012 年 3 月 17 日 衣笠キャンパス創思館トレーニングルーム他
あひるくらぶ 観察研究 計 10 回
- 2011 年 4 月 23 日～2012 年 2 月 13 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
高齢者支援チーム 脳をきたえる「音読・計算」 計 4 回
- 2011 年 4 月 28 日～2012 年 3 月 5 日 衣笠キャンパス学而館第 3 会議室
男性介護研究会 計 3 回
- 2011 年 5 月 14 日～2011 年 7 月 23 日 朱雀キャンパス大講義室
公開講座 シネマで学ぶ「人間と社会の現在」シリーズ 9 計 3 回
- 2011 年 6 月 11 日～2011 年 6 月 25 日 衣笠キャンパス敬学館 252 号
ファースト・ステップ・ジョブグループ ひきこもり当事者本人に対しての家族の対応を学ぶ
連続講座 計 2 回
- 2011 年 8 月 28 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
国際シンポジウム 病の経験と語り:分析手法としてのナラティブアプローチの可能性
- 2011 年 9 月 3 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
家族のく創成と再統合>シンポジウム 生殖医療と里親・養親
- 2011 年 9 月 24 日 大阪市男女共同参画センター西部館
虐待とアタッチメント(愛着) 子どもの育ちを促進していくためのアタッチメント理論と実践
方法について
- 2011 年 11 月 5 日～2011 年 11 月 8 日 朱雀キャンパス大講義室
公開講座 シネマで学ぶ「人間と社会の現在」特別編 計 6 回
- 2011 年 11 月 9 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
グローバル COE「生存学」創成拠点 国際プログラム 第2回障害学国際研究セミナー
- 2011 年 11 月 23 日 朱雀キャンパス 2 階 202 号
ユースサービス ユースワーカー養成公開研究会「ユース・スタディーズ事始め！」
- 2012 年 1 月 14・15 日 大阪キャンパス多目的室
JST ジェノグラム研修会 児童相談の過去・現在・未来
- 2012 年 2 月 18 日 衣笠キャンパス創思館 401・402 号
ワークショップ「学校を「より楽しく」するための応用行動分析 「見本合わせ課題」から考える
特別支援教育
- 2012 年 2 月 18・19 日 大阪府立男女共同参画・青少年センター

スター・ペアレンティング研修会 たたかず甘やかさず子育てする方法

- 2012 年 2 月 20 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
公開シンポジウム「韓日若者支援の現状と課題」*7
- 2012 年 2 月 26 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
公開シンポジウムみんなの脳を鍛える 和やかな雰囲気楽しく学べ、たっぷり話せる 30 分での脳トレ*1
- 2012 年 3 月 3 日 子育ていろいろ相談センター
JST 実装プログラム こどもの現場の変え方
- 2012 年 3 月 17 日 衣笠キャンパス以学館 1 号ホール
三次元映像フォーラム
- 2012 年 3 月 28 日 衣笠キャンパス学而館第 2 研究会室
比較ケア制度・政策研究セミナー 保健医療における選択:イギリスと日本における論争と経験
- 2012 年 3 月 29 日 衣笠キャンパス創思館 創 401・402 号
「震災・大学・放射能～福島大学教員をお招きして」原子力と生存学研究会・特別企画 震災・大学・放射能

【2012 年度】

- 2012 年 4 月 28 日 国際平和ミュージアム中野記念ホール
人間科学と平和教育 体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から
- 2012 年 4 月 28 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
高齢者支援チーム 脳をきたえる「音読・計算」サポーター説明会
- 2012 年 4 月 29 日～2012 年 7 月 22 日 衣笠キャンパス創思館トレーニングルーム他
あひるくらぶ 観察研究 計 4 回
- 2012 年 5 月 4・5 日 国際平和ミュージアム 2 階会議室
人間科学と平和教育 こころとからだで考える歴史と平和
- 2012 年 5 月 12 日 衣笠キャンパス恒心館 730 教室
高齢者支援チーム 研究報告会「音読・計算活動の遂行による実践報告」
- 2012 年 5 月 12 日 衣笠キャンパス恒心館 730 教室
高齢者支援チーム 講演会「豊かな高齢期を築くうつ予防の心理的介入ー認知行動療法に基づく生きがいプログラムー」
- 2012 年 5 月 19 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
高齢者支援チーム 学習者説明会
- 2012 年 7 月 22 日 城北市民学習センター
支援者支援研修 ジェノグラムと家族造形法
- 2012 年 8 月 4 日 朱雀キャンパス 204 教室
ひらめき☆ときめきサイエンス 模擬法定に来て裁判を体験してみよう
- 2012 年 8 月 4 日～2012 年 8 月 5 日 大阪市子育ていろいろ相談センター
ベン・ファーマン先生のソリューション・フォーカス・アプローチ入門 計 2 回
- 2012 年 9 月 1 日 大阪市子育ていろいろ相談センター
支援者支援研修 児童相談現場における「介入」と「支援」を巡って
- 2012 年 9 月 1 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
iCSi2012 in Kyoto JAPAN 国際不妊治療患者支援連合日本会議
- 2012 年 9 月 6 日 朱雀キャンパス多目的室

プロジェクト番号

S1002008

David Over & Jean Bratgin 講演「会思考研究の新パラダイム」

- 2012 年 11 月 11 日 衣笠キャンパス創思館 創 303・304 号
男性介護研究会「介護退職ゼロ作戦！フォーラム 2012」
- 2012 年 12 月 2 日 衣笠キャンパス研心館 632
発達支援チーム研究会「子育てを楽しいものにするために」
- 2013 年 1 月 20 日 コーポイン京都
継続する支援・展開する支援「ひきこもりを通してみえる『仕事』の意味」
- 2013 年 1 月 27 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
研究成果報告会「自立支援のための持続的対援助 ―地域資源としての大学の活用―」
*15
- 2013 年 2 月 16 日 衣笠キャンパス創思館 創 401・402 号
ワークショップ「『見本合わせ課題』から応用行動分析を学ぶ」
- 2013 年 3 月 9 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
男性介護研究会シンポジウム「介護と仕事との両立―大介護時代を生きるために」
- 2013 年 3 月 10 日 衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム
男性介護ネット4周年記念式典「介護退職ゼロ作戦！介護しながら働き続けられる社会へ」

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

留意事項が付されていない場合は「該当なし」と記載してください。

やや組織が大きい、アクティブな支援拠点の形成を大学内に形成する目的がうまく達成できるよう留意されたい。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

付された留意事項に対し、どのような対応策を講じ、また、それにより、どのような成果があがったか等について、詳細に記載してください。

本プロジェクトは以下のような組織体制のもとに取り組みました。

まず、テーマユニットと研究チームの組織化である。対人援助の科学の基礎を構築するためのテーマユニットとともに、対人援助の科学の各論を深めるための研究チームを組織し、基礎から応用までの広範な領域での課題をもって研究をすすめてきた。さらに研究チーム内部で複数の作業チームを組織して研究をすすめたところもある。参加研究者の数が多く大規模プロジェクトであるので、こうした組織的体制をとり、「持続的対人援助モデルの構築」という目的を実現すべく研究をすすめてきた。

また、各研究チームは対人援助の基礎から実践にわたる幅広い領域の個別の研究課題をもって組織されており、かつ当該分野の研究者や対人援助関連の組織と連携して組織されている。確実に研究をすすめるために、役割分担を明確にして取り組み、評価体制（自己評価・外部評価）の欄に記載のとおり、リーダーズ会議や公開発表会などをおして責任を明確にして研究に取り組んできた。各研究チームには、本学の大学院応用人間科学研究科、同先端総合学術研究科、同文学研究科、同社会学研究科の院生なども研究協力者として参加してきた。また、本プロジェクトにかかわるPD並びに研究員を7名採用した。あわせて、プロジェクトには、文学部の関連分野の助手も参加している。各研究チーム間の連携については、プロジェクトリーダー、研究チームリーダー、人間科学研究所運営委員が集まり、月例リーダーズ会議をプロジェクト開始以降、総計16回開催した（2013年3月現在）。研究内容の交流、相互理解、共同の設備、機器、備品の利用計画などをおして、連携を強めることができた。研究支援体制については、人間科学研究所に配属された専任職員2名ならびに契約職員1名、派遣職員1名の計4名が、予算執行、研究支援などを担当している。

<「中間評価時」に付された留意事項>

留意事項が付されていない場合は「該当なし」と記載してください。

該当なし

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

付された留意事項に対し、どのような対応策を講じ、また、それにより、どのような成果があがったか等について、詳細に記載してください。

高齢者支援チームの研究成果報告

チームリーダー：土田 宣明

1. 高齢者支援チームの概要

高齢者支援では、参加者が相互に社会的評価が得られる「場」はどのような構造と機能を必要とするか、そして「今できる」役割の創造に向けた支援のありかたについて検討した。具体的には高齢者を対象とした認知リハビリテーション活動を行い、この実践を通して、音読・計算を主たる媒介としたコミュニケーション活動の認知機能への維持・改善への効果、実施者であるサポーター側の変化を検討した。これらの成果は、複数の学会において発表してきた。さらに、京都市北区役所、京都市左京区地域介護予防推進センター等と共同して、この取り組みの地域への普及を試みた。

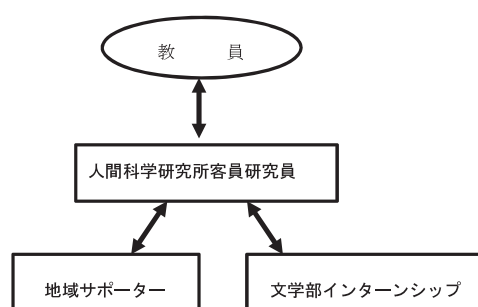


図1 高齢者支援チームの構成

高齢者支援チームの構成は、図1の通りである。2名の教員が全体的な統括にあたり、人間科学研究所の客員研究員が地域サポーター(大学周辺地域から募集した支援者)と文学部インターンシップ学生を指導して、地域高齢者の認知リハビリテーションを実践した。

2. 研究成果

これまでの研究成果の概要を4点にまとめる。

(1) 3年間にわたる健康高齢者の認知機能の変化

実験対象者は44名(平均年齢71.1歳(SD = 2.4)、平均の教育年数13.0年(SD = 2.5))。全員

が京都市内で自立して生活している健康な高齢者であり、色覚は正常で、知的障害、認知症またはその他の精神疾患を持っていなかった。日常生活動作能力(Activities of Daily Living: ADL)は、全員が一般的な日常生活を送る上で支障のない状態だった。

実験対象者は、ストループ課題とSRC課題、およびFAB(Frontal Assessment Battery at bedside, Dubois, Slachevsky, Litvan, & Pillon, 2000)とMMSE(Mini-Mental State Examination, Folstein, Folstein, & McHugh, 1975)の査定を1つのセッションとして、3年間にわたって、半年ごとに6回の査定セッションを受けた。健康高齢者の抑制機能や認知機能および前頭前野機能の変化を検討した。結果の概要は下記の通りである。

同一性ベース抑制機能の低下はみられたが、場所ベース抑制機能の低下はみられなかった。このことから、抑制機能の種類によって、加齢に伴う低下の大きさが異なるということが指摘できた。本研究では、遂行時間を指標にすると、同一性ベース抑制機能の低下は確認されたが、場所ベース抑制機能の低下はみられなかった。よって、同一性ベース抑制機能は、場所ベース抑制機能より低下しやすい可能性であると考えられる。つまり、2種類の抑制機能の低下の差は、刺激を処理する速さという側面に出ていると考えられる。

認知機能を評価するMMSEにおいては、加齢に伴って健康高齢者の認知機能の低下が確認された。これらの結果は、横断的に行われた先行研究(孫・吉田、2007)で見出された結果と異なっている。孫・吉田(2007)では、健康高齢者の中で、前期高齢者(M = 27.25)と後期高齢者(M = 26.58)の間、MMSEにおいて有意差はなかった。つまり、本研究の結果から、高齢者の加齢効果を検討する

際、発達の一般的傾向や基準を明らかにするような横断的な研究だけではなく、同一対象の発達過程を縦断的に明らかにするような研究も重要だと示唆された。

前頭前野機能を評価する FAB においては、健康高齢者の 3 年間で低下が確認されなかった。これらの結果は、孫・吉田(2007)の研究結果と一致している。孫・吉田(2007)の研究によれば、健康高齢者の中で、前期高齢者(M = 16.01)と後期高齢者(M = 15.08)の間で有意差はなかったと示唆された。これらのことから、健康高齢者の前頭前野機能、特に FAB で測定されるような機能に関しては、加齢による影響は顕著にはみられないといえるだろう。

(2) 認知リハビリテーションの効果

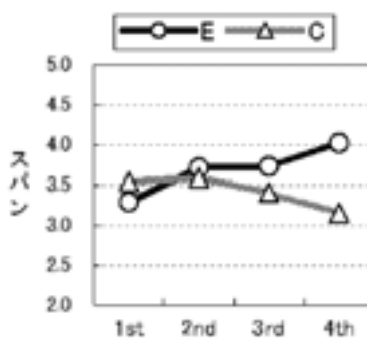


図2 リハビリテーションの効果

健康な高齢者を介入群(N = 48)と対照群(N = 51)とにランダムに分類し、介入群には 2 年間にわたる訓練をおこなった。介入は、原則として大学のトレーニングルームでおこなわれた。介入で用いる課題は、小学校 1 ～ 2 年生程度のたし算とひき算、および文章の音読などである。訓練の 1 セッションは、15 ～ 20 分程度であり、基本的に、大学での介入が週に 1 ～ 2 セッション、自宅での宿題が 3 日分与えられるという形で、2 年間にわたって学習を継続した。具体的に説明すれば、課題は、A4 用紙に印刷され、計算と音読課題のいずれも 1 回あたり 4 ～ 5 枚ほどの問題が学習者に与えられた。計算課題では、学習者が課題を終了したところで、サポーターは採点をし、間違いがなければ「〇〇さん、満点ですよ」と心からの笑

顔でフィードバックを与えた。間違った答えがあれば、「〇〇さん、この問題、もう一度やり直して」と再解答を求め、このヒントで、学習者は答えを容易に修正できた。また音読課題では、読み間違いや言いよどみなどがある時には、サポーターと一緒に読んで適切な読みへと導いた。なお、統制群は、非接触タイプであり、査定のみ介入群と同じ時期に実施された。査定は、記憶課題(短期記憶と作業記憶)、抑制課題(ストループ課題、SRC 課題)、および MMSE と前頭葉機能検査(FAB)であった。学習開始直後からおよそ半年おきに 4 回の査定が、個別的におこなわれた。

FAB では、予想されたように、介入群は介入後には有意な上昇を示したが、統制群では変化は見られなかった。さらに、査定で用いられたさまざまな課題、記憶課題と抑制課題のほとんどで、介入群では有意な上昇が見いだされ、統制群では有意な低下が得られた。図 2 は、作業記憶スパンを指標にして、両群の 2 年間にわたる変化を示した結果であり、介入群での平均年齢は 71.02 歳にも関わらず、2 年後には作業記憶スパンの有意な上昇が見いだされている。

(3) サポーター側の変化

立命館大学人間科学研究所「高齢者支援チーム」に所属し、2 年目～ 6 年目の継続サポーター 11 名(男性 1 名、女性 10 名、平均年齢 63.7 歳)を対象として、半構造化インタビューを実施した。継続サポーターに研究主旨及びインタビュー内容を説明した上で半構造化インタビューを実施した。インタビューは 2011 年 7 月上旬～下旬に行われ、実施者(聞き手)とサポーター(話し手)が 1 : 1 で行った。要した時間は各 25 ～ 40 分程度であった半構造化インタビューで語られた内容について、木下(2003)による M-GTA を用いて分析した。

M-GTA を用いて分析した結果を、サポーターの視点から、主観的な見方および高齢者に関する客観的な見方などの変化が形成される過程をまとめた。サポーターにおいては、5 個のコアカテゴリー、19 個のカテゴリーが生成された。また、高齢者においては、2 個のコアカテゴリー、

10 個のカテゴリーが生成された。

これらの結果から、①サポーター自身の変化として、高齢者との交流が増え、高齢者理解が深まり、良好な対人関係が築けている。②日常生活では、規則正しい生活ができ、受容性が高まり、和やかな家族関係が築けている。③活動時の気持ちは、共に学び合い、充実感を得ている。④サポーター自身の役割として、高齢者支援スキルを磨き、コミュニケーション力を高めている。⑤期待するサポーター像は、高齢者支援活動を続けること、男性の社会参加を促すこと、地域へと広げること。⑥高齢者に対するイメージが、学習活動を通して、ネガティブからポジティブに変わってきたこと。⑦学習者の特徴として、性格が明るく熱心で学習意欲が高く、尊敬できる高齢者であることなどの認識がみられた。つまり、高齢者支援チームで行われた学習活動は、支える側のサポーターにも認識の変化を生む可能性があるものと思われた。

(4) 地域への波及効果

大学を地域資源とした取組は、現在、大学周辺の地域への波及効果を示しつつある。大学が存在する北区ばかりでなく、左京区においてサテライト的に認知リハビリテーションが実施されている。左京区において、参加した学習者の実人数は、2010 年度 18 人、2011 年度 100 人、2012 年度(10 月現在) 62 人であった。サポーター登録者は第 1 期生(2010 年度 32 人、第 2 期生(2011 年度) 23 人であった。左京区との関わりは、左京区役所や左京区地域介護予防推進センターの委託を受けて「予防のメニュー」として、「音読・計算」の取り組みを実施したことに始まる。3 年間に渡る経過の概要を記録として下記に掲載しておく。

◇ 2010 年度

- ①左京区サポーター募集 左京市民新聞(左京ボイス)9/15 号 記事掲載
サポーター研修 10 月 4 回実施

主催：左京区役所、左京地域介護予防推進センター (以下年度同様)

参加者：左京区在住者で関心を持たれた方 33 名(登録：32 名)

研修担当：高齢者支援プロジェクト(高齢者支援チーム)

②「音読・計算」教室

・実施会場：左京老人福祉センター

期間：1 月～3 月

◇ 2011 年度

①左京区サポーター募集 左京市民新聞(左京ボイス)9/15 号 記事掲載

サポーター研修 10 月 4 回実施

参加者：左京区在住者で関心を持たれた方 23 名(登録：23 名)

②「音読・計算」教室

・実施会場：コミュニティ・サロン岩倉

期 間：5 月～7 月、7 月～12 月

・実施会場：左京老人福祉センター

期 間：4 月～7 月、8 月～2 月

・実施会場：ひいらぎ会館(修学院)

期 間：10 月～3 月

◇ 2012 年

①左京区サポーター募集 左京市民新聞(左京ボイス)9/15 号 記事掲載

サポーター研修 11 月 4 回実施

②「音読・計算」教室

・実施会場：上一乗寺

期 間：4 月～7 月

・実施会場：老人福祉センター

期 間：4 月～10 月、11 月～4 月

・実施会場：養正

期 間：2 月～10 月

・実施会場：コミュニティ・サロン岩倉

期 間：3 月～7 月、9 月～12 月

就労支援チームの研究成果報告

チームリーダー：望月 昭

【概要】

当チームは、「知的障害」のある個人、長期にひきこもりの成人、そしてコミュニケーションのバリアを被っている少数派外国人個人など、社会的な意味での「障害性」を持つ個人を対象に、大学に設定された新しいハード・ソフトな資源を活用し広義の「キャリア支援」の方法を探ると同時に「援助」という関係的行為における社会心理学的な要因を探ることを目的としている。チームは3つのグループに分かれる。

1. 障害のある個人(生徒・成人)における就労支援グループ(代表：望月 昭)
2. 実験社会心理学的アプローチグループ(代表：八木保樹)
3. DAISY を用いた外国人への支援グループ(代表：小澤 亘)

1. 障害のある個人(生徒・成人)における就労支援グループ

「学生ジョブコーチ(RSJC)」*(中鹿、2010；望月ら、2012)を中心に、特別支援学校の生徒、および移行支援施設の就労実習の支援における実践的・理論的研究が行われた。学外の実習はK市内の企業で行われ、当事者による作業チームの相互協力の可能性とその支援方法の検討(小島ら、2012)、学内の実習においては、利用者の就労行動の改善に役立つ支援方法、記述、分析方法の検討が行われた(尾西ら、2012)。

後者(学内)については、当「戦略事業」によってR大学内に新たに設定された「社会臨床実習室」(Café Rits: 喫茶仕様模擬店舗)において、個別当事者に合わせて徹底的に構造化された作業環境と支援プログラムを通じて、当該就労に関わるスキル獲得のみでなく、当該対象者の次なるステップ

においても継続的に機能しうる「援助設定」と「教授方法」のプロセスを累積的に記録していく「ポートフォリオ」(「できますシート」)の構造や機能についての検討が、特別支援学校と共同で行われた。この「できますシート」は、当該学校の全学部・学年における「情報共有システム」としても制度実装の検証が行われた(林ら、2011)。

大学内における「擬似空間(店舗)」を用いた就労支援の持つ意義としては、

- 1)店舗における接客・電話予約・配達・回収など、当事者には予測しがたい作業に対して、「自らがスケジュールを組み直す」といった自己管理に対して、完全に構造化した(計画的変数統制)シミュレーション状況の中で必要な支援内容を分析、表現していく方法が開発できる(尾西ら、2012)。
- 2)一般的には地域の実店舗においては実習が困難と思われる比較的「障害」が重い対象者についても、状況を当事者に合わせて統制・構造化できたがゆえに常に達成感を持った自習を行うことが可能である。
- 3)つまり、対象者が日常でも経験していると思われる飲食店舗での店員の役割という実践的文脈を担保しつつ、個別の個人における潜在的な可能性を実証的(実験的に)分析的に検証することができる。という点である。

2010年から2012年にかけて、上記のような目的を以て4クール(1クールが1週間から2週間)の擬似店舗によるシミュレーションが高等部生徒3名、移行支援施設利用者1名が対象者において行われた。いずれも大学院生および学生から組織された「学生ジョブコーチ」のチームが中心となり実施された。

以下には、上記した

- 1)スケジュールの自己管理、
- 2)やや障害の重い個人の実習可能性についての結果を詳述する。

1)スケジュールの自己管理

目的：スケジュールの自己管理という行為は、時間割等で画一的になりがちな学校環境と比して、接客業はもとより多くの就労場面で就業者に求められるメタスキルのひとつである。また、今次参加した対象者のひとりとは、「スケジュールの急な変更でややパニックとなる」といった評価を受けていた。そこで、他者による一方的なスケジュール変更ではなく、常に当事者もその変更とその後の行為の決定に参加しスケジュールを見通せるという関与(コミット)することにより、そうした問題は回避できるのではないかというのが、この実践研究のねらいであった。

方法：特別支援学校の生徒および移行支援施設利用者を対象に、模擬店舗において電話で注文を受け必要な業務の遂行が支援つきで行われた。

図1に模擬喫茶店舗でのデリバリー業務の模式図を示した。模擬喫茶店舗では喫茶店舗での接客やオーダー業務から品出し、片付け、レジ業務も実施された。その中でデリバリー業務として対象者の配達・回収の時間管理を実施した。パターンAは最も単純な構成であり、配達の時間指定がなく電話でのオーダーの後に即時に配達に行き、回収はジョブコーチからの指示で行った。パターンBはより複雑にした構成である。配達は電話受注での時間指定後に遅延して実施された。また、回収は配達時にお客から指定後に、遅延されて実施される。ただし、電話受注の順番で配達、配達

した順番での回収とはなっておらず、それぞれの順番は「入れ子構造」となっている(図の矢印の交差点)。「入れ子構造」が発生したときに、それまでに予定されていたスケジュールの変更が発生する(例：配達②の前に配達③の予定が入る)。ここでは、配達時間や回収時間の指定を操作することにより、単純に電話注文を受けたその順番通りには配達・回収することとならないように意図的にスケジュールは設定された。

結果：パターンAから業務をスタートし、次第にパターンBの「入れ子状態」の注文を受け指定されたスケジュールで業務を遂行する、ということが2名の対象者で可能であった。また、対象者はスケジュール表を所持しており、それへの記述とともにジョブコーチが支援を行ったが、時間軸に沿った転記なども可能であることが明らかになった。

このように、スケジュール管理の単純な構成から複雑な構成までを構造化することにより、当事者の時間管理という自己管理の中でも多くの業務に応用可能な「できる」を確認し、そのための環境(課題)の構造化を行うことができた。

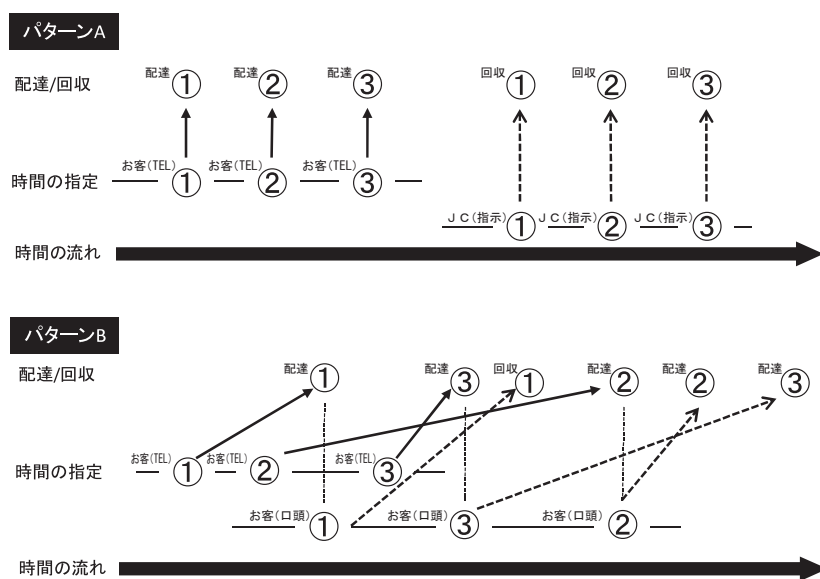


図1 スケジュール管理の模式図。実線の矢印は配達依頼と配達作業の対応を、破線の矢印は回収依頼と回収作業の対応を示している。また、一点破線は配達作業時のお客からの回収時間の指定があったことを示している。なお、丸数字は電話があった順番である。

2)一般の就労実習(産業実習)等には不向きと考 えられていた「やや障害の重い生徒」を対象 とした実習

目的：模擬喫茶店舗での接客業務という、具体的作業場面で“仕事をする”ことを通じて、新たな「できる」を発見・記述することが目的であった。今回の参加者は、喫茶店や類似の店舗で働いておらず、また、現時点では将来、喫茶場面で働くことを想定していない。そのような参加者が喫茶店舗で実習を行うのは、次の利点があると考えられる。喫茶店舗の接客業務の特長として、客の来店・声掛けなどの他者の行動を手掛かりに動くことが要求される場面ということがある。また定型的な接客に加えて、仕事を自ら拡大することの可能性が期待できる場面である。

方法：実習参加者は特別支援学校に通う高等部一年生の男子生徒A君であった。店長や店員が接客関連の業務の見本を提示した後に、A君に実際に同じ業務を繰り返し行ってもらった。その際、手順書を用意し、ジョブコーチが必要なプロンプトやフィードバックを行いながら指導をした。

対象となる行動：カフェにおける接客関連の行動が中心となる対象行動であった。また携帯電話を使っの学校への電話連絡行動も指導対象であった。一般店舗では実習しにくいという理由としても挙げられる「余計な行動」(業務中や待ち時間における、接客とは直接には無関連な行動)も対象だった。

結果と考察：カフェでの業務については、課題分析をもとに自立遂行率を算出した(図2)。自立遂行率をみると、2日目にはすでに高い遂行率となり業務のほぼすべての行動を自立して行うことができるようになった。買い物や飲食の経験があることを考慮しても、かなりの速さで作業遂行についての学習ができたことがわかる。

A君は本実習に参加する前には、カフェのような業務に不向きだと考えられていた。このような参加者でも十分に学習することのできる場面であることがわかった。またA君のような生徒でも、普段の授業以外の実習場面を設定することが有用

であることがわかった。

実習に参加する中で、大学に着いたことや帰宅の報告を支援学校に電話報告をする練習を行った。最初は援助付きで電話をかける、話をする、切ることをしていたが、次第に援助なしでこれらの行動を適切に自発できるようになった。実習の中程では、必要のないときにも電話をしてしまう行動も見られたが、そのつど支援学校の先生方が丁寧に応答してくれることで、A君の電話をかけて話をするという一連の行動が、適切に強化・維持されていった。これは学校との連携がうまく働いたといえる。

実習の中で、A君は接客・レジ業務に想定されている以外のさまざまな行動を自発した。その中には、“問題行動”もあるものの、一方でA君が自分の“できる”ことを拡大するという意味での自己管理行動(セルフマネジメント)の芽もあったといえる。それらの行動を「余計な行動」(=IKC)と仮に名づけた。図3は実習最終日のA君の「余計な行動」とスタッフの側の対応を図示したものである。余計な行動については、周囲から見て“良い”もの(IKC-Good)と“悪い”もの(IKC-Bad)に、対応については“ポジティブな”もの(図中R)と“ネガティブな”もの(図中P)に分けている。はじめA君は余計な行動として良い・悪いを同じ程度に自発している。しかし、スタッフの側が、A君のできることを改めて評価しようとして、ポジティブな評価を行っていくことで、A君の行動は良い行動が途中から伸びていくことがわかる。一見余計なことと見える行動の中には、本人のその場面への積極的関与の性質が含まれている。それを周囲が適切に認めることで、本人の意欲を増していくことができるといえるだろう。

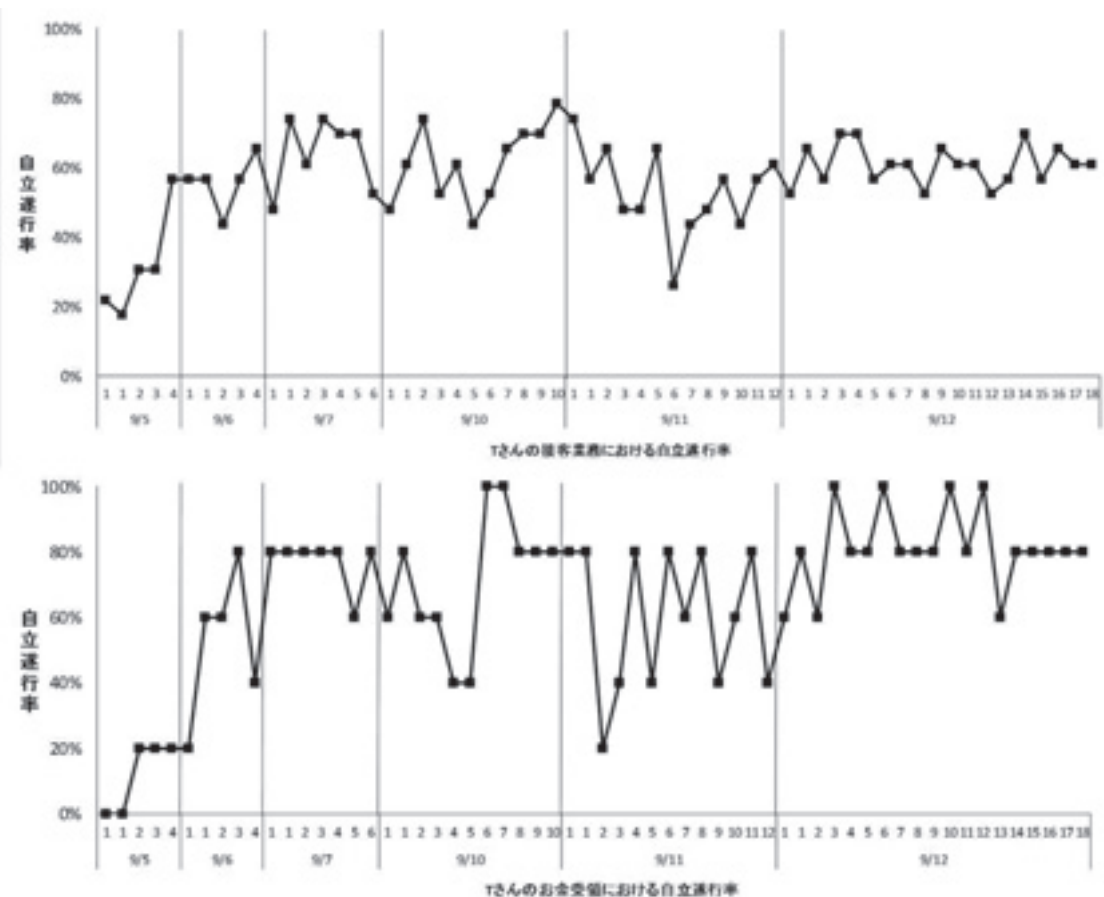


図2 Aくんの自立遂行率の推移
上段は接客業務、下段はレジ業務の自立遂行率を示す。

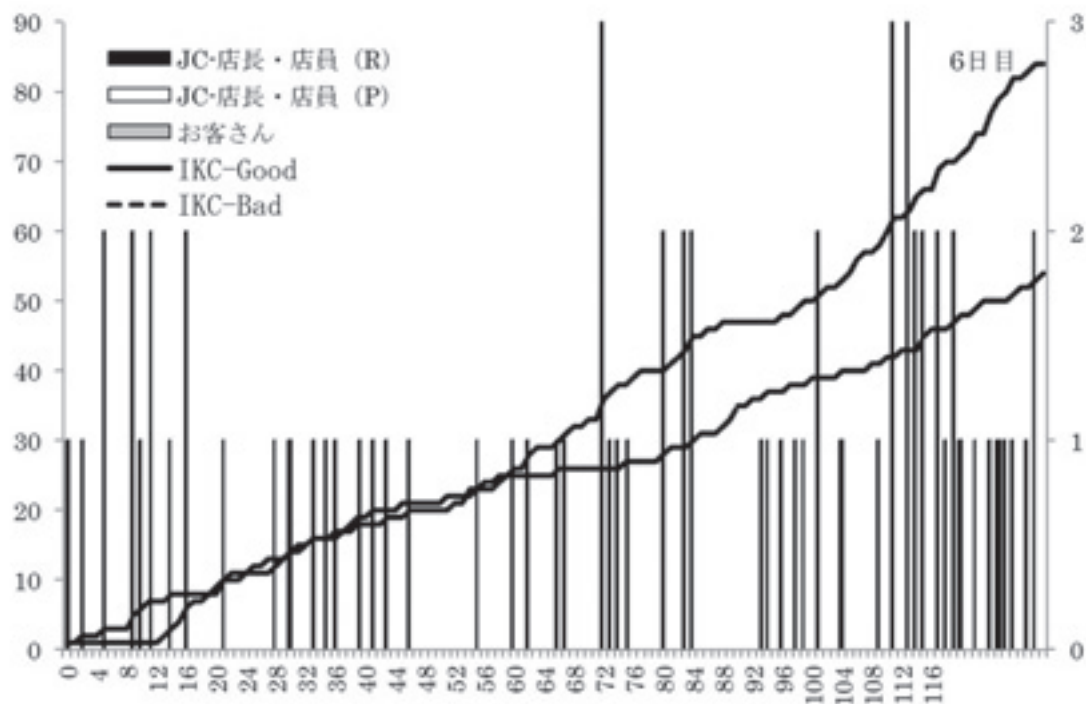


図3 実習最終日のAくんの、課題には想定されていない行動の推移(折れ線：左縦軸、良い行動と悪い行動)とSJCの対応(棒グラフ：右縦軸、ポジティブな対応とネガティブな評価)。

2. 実験社会心理学的アプローチグループ

障がい者の就労支援の問題を受け入れる側の観点から、対人認知、資源としてのポジティブ感情、共感などの変数がどのような効果を及ぼすかという問題として捉え、実験的手法によって検証した。

1960年代初頭以来、援助行動に影響する様々な変数が特定されてきた。被援助者を源とする感情もそのひとつである。今回は、苦境にある他者の存在によって喚起される2種類の感情、共感と個人的苦痛、に注目し、操作方法として視点取得の教示を援用した。最も重要な結果は次の通り。

自尊心の個人差と視点取得が感情反応と援助行動にもたらす効果について実験を行った。自尊心の高低によって分類された60人の参加者は、深刻な苦境にある女子学生のプロフィールに接する前に、「客観的に観察してください」という他者客観教示、「相手の人がどのように感じているかを想像してください」という他者想像教示、あるいは「あなたが相手の立場にあれば、どのように感じるかを想像してください」という自己想像教示を付与された。この後、参加者は女子学生を援助する機会に出会った。予測通り、共感、他者客観、自己想像、他者想像の順に漸増する事前対比による比較が有意、個人的苦痛は、他者客観、他者想像、自己想像の順に漸増する事前対比による比較が有意となった。さらにパス解析によって、高自尊心群では、共感から類似性の否認への正のパス、類似性の否認から援助量への正のパス、個人的苦痛から援助量への負のパスが得られ、低自尊心群では、個人的苦痛から援助量への正のパスが得られたが、共感、他者客観、自己想像、他者想像は援助量を増加させなかった。

共感には「自分にも苦境が起こるかもしれない」という脅威への懸念が含まれており、共感が高くなればなるほど共感への対処が不可欠となる。自尊心の高い者は、相手との類似性を否認し、否認するほど(脅威への懸念は低減されるので)援助要

請に対して大きな援助量で応じることができた。しかし、個人的苦痛が喚起されると、脅威の源である相手から逃避しようとするため、援助量は小さくなった。一方、共感を直接にも(自尊心の高い者のように)間接にも大きな援助量に結びつけられない自尊心の低い者は(否認の根拠となる優越性を持っていないため)、他者の苦痛が自己の苦痛に変換されると、他者を援助できた(逃避によっては個人的苦痛は自然減衰しにくいとため、脅威の相手を助けることで個人的苦痛を低減しようとする)。これらの結果に関して、共感-愛他性仮説、正当世界への信念、自尊心の対処機能について考察した。

3. DAISYを用いた外国人への支援グループ

このグループでは、滋賀県湖南市教育委員会と連携し、初期日本語教室「さくら教室」で学ぶ外国人児童に対して、①フラッシュカード(約800語)、②基本構文、③国語教科書(1、2年版)より8編、④オリジナルテキスト1編の多言語DAISYテキスト(日本語と英語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、タガログ語)を開発した。さくら教室の公開授業、湖南市日本語教員研修会などを通じて、実践的に支援のあり方を検証した。

*) 1. の実践の遂行をした「学生ジョブコーチ」のチーム

中鹿直樹(客員研究員)

乾 明紀(R-GIRO 研究員)

尾西洋平(応用人間科学研究科)

イム - ヒョンジョン(政策科学研究科)

小島 遼(文学部心理学専攻)

森本有絵(文学部心理学専攻)

玉井貴子(文学部心理学専攻)

井上 栞(文学部心理学専攻)

心理バリアチームの研究成果報告

チームリーダー：東山 篤規

ヒトの心的機能を考えたとき、高齢者・障害者と健常者との間には、明確な境界が認められるものもあれば、境界がはっきりせずに段階的に移行するものもある。後者の事例は、かなり広い範囲にわたって認められ、それゆえに日常的に重要な現象と考える。たとえば、若いときに比べて、徐々に視力や視覚記憶が落ちてきたとか(知覚)、転びやすくなったとか(行動)、若い人の早いテンポの会話についていけなくなったとか、早とちりが多くなったとか(記憶と理解)、年を経るにしたがって感動することが減ったけれども涙もろくなった(感情)というようなことをよく聞く。また、健常だと信じられている青年・壮年期の人々も、日常的にさまざまな錯誤を体験している。その最たるものは、たとえば、錯視、判断ミス、思いこみ、勘違いと呼ばれている現象である。こういう現象が、どういう機制によって生じているのかを明らかにし、正しい理解を深めることは、人間の本性を知る作業であるとうろくに、自覚的に豊かな老後を過ごすために有益なことである。

このチームでは、重篤な事例に限らず、この種の軽微な障害(バリアー)を含めて、認知の諸過程、すなわち知覚、記憶、推理、行動の過程において、われわれが直面している心的機能の変調について研究してきた。知覚の分野では、視覚(錯視と奥行き)と聴覚(協和音と騒音の認知閾)の研究を行い、記憶の分野では、順序の記憶と聴覚的情報の記憶の研究を行い、推理の分野では、定言三段論法課題における論理的推論過程の研究、洞察問題解決における潜在的過程の研究、カテゴリ化の過程に関する研究を行い、行動の分野では、健康維持を促進させるソーシャル・ネットワーク・サービスの利用に関する研究と、動物(ハト)の摂水・摂食行動の特徴を明らかにする研究を行った。以下、各研究の成果を総括する。

知覚

1)「高齢者は『蛇の回転』錯視が起きにくい」というしばしば指摘される逸話的な仮説を検討した。実験方法として、講演会などで高品質の錯視図版を配布し、その錯視の見えと年齢を問う質問紙法を1863名の参加者に実施した。錯視図の見えとしては、「よく動いて見える」「動いて見える」「わずかに動いて見える」「動いて見えない」のどれかを選ばせた。その結果、年齢と錯視の間に弱いが有意な負の相関(-0.33)が得られた。また、この錯視が起きないのは50歳未満では1%程度であったのに対して、70歳以上では10%を超えた。しかしながら、高齢者でも錯視が見える人の方が多く、また若年者でも錯視が起きない人はいることから、老化によって『蛇の回転』の錯視が弱くなるとは結論できない。また、錯視が見えないと報告した実験参加者へのインタビューによっても特に変わった生理的・心理的性質は認められず、この個人差を説明する手がかりは得られなかった(北岡)。

2)奥行き知覚に及ぼす頭の位置の効果について実験的研究を行った。頭の位置を変えると、物の大きさや距離、物と物の間の奥行きが変化して見えることはよく知られているが、奥行きの手がかりの中で、頭の位置の効果を受けやすいものが何であるかは、じゅうぶんに解明されていない。ここでは、奥行きの手がかりを含む画像を、ヘッド・マウンティド・ディスプレイに提示することによって、頭の位置が変わっても、同じ刺激が目にとえられるようにし、画像の奥行き感を測定した。奥行きの手がかりとして、両眼網膜像差、運動視差、きめの勾配と線遠近、陰影について検討した。その結果、両眼網膜像差と運動視差は、頭の位置の変化の影響をまったく受けなかったのに対して、陰影の与えられた画像の中には、頭の位

置の影響を強く受けるものが見出された。すなわち、上部に陰の与えられた画像では、見上げて観察されたときには、うつむいて観察されたときよりも凸に見えやすかった。きめの勾配と線遠近については、若干、うつむいて観察したときに奥行きが伸長する傾向が認められたが、それは有意傾向にとどまっていた(東山)。

3)和音の認知閾の研究を行った。3和音の1音をわずかに変化させていった場合、その差がどれだけ大きくなったときに、不協和音として認知されるかを実験的に明らかにした。その結果、この認知閾は、個人性が大きく、2Hzの変化から10Hzまで広く分布していた。この結果から、和音を警報音として使用する場合には10Hz程度以上の周波数のずれが必要であることが明らかになった(尾田)。

4)騒音閾に関する研究を行った。われわれが騒音と感じる音は、音を聴取する環境と音自体の特徴に依存するといわれる。この研究では、文章の読み取りとその要約を行うという知的な作業に携わりながら、さまざまな日常音(雑踏、音楽、会話、およびそれらの組み合わせ音)に曝されているとき、その作業に、各音がどのように影響するのかを明らかにした。実験では、被聴者に、この文章要約作業の合間に、各日常音を聞かせ、その妨害閾を測定し、その閾値を比較することによって、各音の妨害の程度を検討した。その結果、会話の閾がもっとも低く、つぎに音楽が低く、雑踏音と人混み音の閾がもっとも高かった。これは、有意味音(あるいは人の声に似た音)が、文章要約作業の遂行を妨害したことを示唆する(東山)。

記憶

1)順序の記憶の研究を行った。出来事に関する記憶では、順序は重要な構成要素である。つまり、ある項目が何番目に現れたのかに関する記憶は出来事を理解するうえで重要である。順序の記憶に関する実験として単語を提示した直後の記憶を検討した。その結果、順序の記憶は、項目の記憶に比べて、加齢にともなう影響が小さく、高齢者で

あっても維持されていることが見いだされた。また、長い単語に比べて短い単語の記憶成績が良くなる語長効果について検討した。語長効果は、提示直後であれば、自由再生課題であっても順序の再構成課題であっても見られるのだが、数秒の遅延によって順序の再構成課題において見られなくなることが明らかになった。遅延後であっても自由再生課題では語長効果が見られた。このような結果から、最近の出来事に関する記憶では、音韻の処理と関連する複数の記憶システムが関与する可能性が示唆された(星野)。

2)聴覚的情報の記憶の研究を行った。実験ではメロディーやリズムを含む聴覚的刺激の記憶を検討した。リズムのみを提示した後にメロディーとリズムからなる曲を提示すると、以前に聴いたと判断する傾向が示された。このことから、曲を構成する要素の一部を提示することがある曲を以前に聴いたとする印象をもたらすことが明らかになった。漠然とした既知感や順序の記憶はしばしば日常の生活を送る上での手がかりになると考えられるので、これらに関する研究を通して日常生活の質向上に寄与する知識を得ることができよう(星野)。

推理

1)推論過程、特に定言三段論法課題における論理的推論過程のモデル化を行った。人間は常に論理的に推論できるわけではないが、障害者や健常者も含めて、完全に非論理的というわけでもない。たとえば、統合失調症には「飛躍した」推論が特徴的にみられることがあるが、その緩い形の非論理的推論は健常者にも一般的に見られ、比喩理解にも関係する創造性の創発に不可欠と考えられる。つまり、非論理性の程度は連続的に定式化できると考えられる。本研究では、定言三段論法の確率サンプリングモデルを提唱した。ランダム・サンプリングのアイデアを導入することにより、論理的推論を比較的少数の自由パラメータを用いて確率的にモデル化することに成功した。その結果、確率判断や意思決定などの近接領域で研究さ

れてきた複数の現象との共通性を明らかにした。すわなち、人は、ターゲットとなる2事象の生起確率のデフォルト値はほぼ等しいことを仮定する(等確率性仮定)とする仮説が、多くの現象(バイアスや錯誤)を射程とすることが判明した。推論や判断に関して、これまで膨大な数のバイアスや錯誤が同定されてきたが、それらを統合化する動きは多くない。本研究は、高次認知の統合理論に向けた一步を踏み出すものと位置づけられる(服部)。

2) 洞察問題解決における潜在的過程の解明を行った。非合理的行動は、実生活において障害的に働くことがある。たとえば、「頭では分かっているが、やめられない」という現象は、意識と無意識の乖離を端的に示しているが、この乖離が非合理性の感覚を発生させる一つの大きな要因である。本研究では、特に洞察問題解決に焦点を当て、プライミングの手法を用いて、意識的過程と無意識的過程の関係を実験的に明らかにした。実験の結果、まず、ヒントの閾下提示が9点問題、放射線問題、10枚コイン問題などのよく知られた洞察問題の解決率上昇に有効であること、閾上のヒント提示であっても主課題とは無関連と思わせることによって閾下と同様の促進効果が得られることが明らかにされた。次に、意識的コントロールはパフォーマンスを変化させることが示された。たとえば、新奇なことを考えることを促すことによって解決率を大きく上昇させることが可能となった。最後に、意識的コントロールの効果は、無意識的過程との関係で複雑に変化することが明らかにされた。課題に集中するように促すと、むしろパフォーマンスが低下することもあること、集中が潜在ヒントの効果を消失させることがあること、逆に、二重課題法によって負荷を与えて意識的コントロールを弱めると潜在ヒントの効果が増大することが観察された。以上の結果から、二つの可能性が示唆された。一つは、過度な注意が望ましい手がかりの受容を阻害する可能性であり、もう一つは、モニタリングを伴わないコントロールが不適切に機能する可能性である。いずれ

も、従来の問題解決研究では知られていない新しい知見であるが、注意や社会心理学などの他領域における研究成果と接点があり、今後の展開が期待される(服部)。

3) 人間が行うカテゴリ化の研究を行った。ここでは、本来カテゴリ化に寄与しないはずの要因のカテゴリ化に及ぼす影響、ならびにカテゴリ化判断に及ぼす確信度と典型性の違いについて心理実験を実施し、課題によるカテゴリ化判断への影響を検討した。その結果、人間はカテゴリ化に必須な情報のみならず、他の情報も利用することが明らかになった(尾田)。

行動

1) ソーシャル・ネットワーク・サービスの一種であるツイッターを利用して、e-healthcare(ネットワークを利用した健康維持方略)を促進させる研究を行なった。送受信データ量の観察などから、ネットワーク利用開始直後の送・受信量がネットワーク利用を維持させるための動機づけに大きくかかわっていることを明らかにした。特にネットになじみがないものに対しては、デフォルトとしてフォロワーをつける方法などの対策が必要であることを明らかにした(尾田)。

2) ハトの摂水・摂食行動の特徴をつぎの3点に関して明らかにした。

① 準自然場面における摂食・摂水行動の連続実験による分析。24時間連続実験場面を用いて、摂食反応と摂水反応の長期間にわたる季節変動に伴う時間特性を調べた。その結果、環境温度を約27℃一定に保った環境下において、ハトの1日の摂食反応と摂水反応ともに、日出・日入時刻の季節変化に対応していること、1日の反応従事時間は摂食反応が摂水反応よりも多かったこと、それぞれの時間配分(中央値で見た場合)は、摂水反応が1日のほぼ中央にあるのに対して、摂食反応は午後に移動した。

② ハトの摂食および摂水行動におよぼす給餌・給水環境統制の効果。穀食鳥においては給餌量の統制が摂水量に及ぼす効果と、給水量の統制(増

減)が摂食量(増減)に及ぼす効果とが知られている。また、給水量操作の摂食量に与える影響の方が、給餌量操作の摂水量に与える影響よりも大きいことが示された。

③オペラント行動における穀類の強化力の分析。穀食鳥であるハトにとって、オペラント実験場面で強化刺激として用いる各種の穀類の強化力

の違いについては、経験的に知られている。このことを実験的に明らかにするために、体重統制法を用いて各種穀類の強化力を分析した。その結果、時間あたり摂取エネルギー量に体重レベルの影響のあった穀類(例えばトウモロコシ、ダイズ)と影響のなかった穀類(例えばサフラワー)とを検出することができた(藤)。

発達支援チームの研究成果報告

チームリーダー：竹内 謙彰

発達支援チームは、人間の発達上の様々な困難に関わって、その実態と支援のあり方を、広い意味での「発達支援」という視点からとらえることを共通のテーマとして発足したプロジェクト・チームである。フィールドは、学校、家庭、地域、専門機関などにおよび、子どもだけでなく、大人の発達も視野に入れた調査・研究を進めている。チームは、五つのサブ・テーマを掲げて実践・研究活動を行っている。各サブ・テーマは以下のとおりである。

- (1)不登校・ひきこもりへの包括的支援
 - (2)様々な困難を抱えた人への発達支援
 - (3)成人初期の多重役割への適応
 - (4)発達の基盤形成を担う場としての幼児期のなかま遊びの成立の解析
 - (5)関わりに難しさを抱える子どもへの発達支援
- それぞれのサブ・テーマに基づくサブ・グループが研究・実践活動を行いつつ、チーム全体としては発達支援という共通のテーマで連携・協力しあいながら、研究活動を進めてきた。

< 2010 年度のまとめ >

成人期の発達研究領域では、発達心理学に関する図書の分担執筆(成人期から老年期にかけての領域)および臨床心理学に関する図書の分担執筆(夫婦関係の変容と発達について)、学会発表(未婚者の結婚願望と両親の不和およびコミットメント(国外))、学会ラウンドテーブル企画の開催(親役割をめぐる相互調整と夫婦関係 ※東北大学神谷哲司氏との共同企画)、調査の実施・分析(乳幼児をもつ有配偶者を対象とする親役割への適応と夫婦関係)などに取り組んだ。

関わりに難しさを抱える子どもへの発達支援領域では、例年行っている自閉症スペクトラム児の療育活動「あひるくらぶ」を今年度も継続して行っ

てきた。また、日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業とも連動しながら、発達障害児とその家族のニーズに関わる質問紙調査の分析を継続し、その一端を、日本保育学会で報告し、また3月にも発達心理学会で報告した。さらに、親のニーズを捉えるため、インタビュー調査を行い、その分析を行った。

不登校支援の領域では、立命館宇治中学校高等学校、立命館守山中学校高等学校、近江兄弟社高等学校単位制課程にて、毎月1回不登校など学校不適応生徒への支援を検討する「HAT 会議」「コンサルテーション会議」「事例検討会議」にスーパーバイザーとして参加してきた。また、東大阪市教育センターにて、不登校児童生徒への支援を検討する事業等にスーパーバイザーとして参加してきた。

ひきこもり支援領域では、以下のような活動を展開した。京都市から調査依頼(テーマ：ひきこもり状態にある若者に対する訪問支援の試行的実施を通じた効果検証および具体的支援方法を確立するための調査研究)を受け実施し、報告書を作成した。また、大阪障害者センターとの共同研究により、障害者福祉現場労働者のメンタルヘルス調査を行った。この報告書の作成も行った。その他、韓日のひきこもり比較研究を行い、韓国調査及び韓国サンミョン大学の李インスー教授との我が国でのインタビュー調査を実施した。その報告は、2011年3月発刊予定産業社会学学会「産社論集」に「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって―若者問題に関する韓日間比較調査から―第1報」として投稿掲載された。

幼児におけるわかりあいのコミュニケーション領域では、2010年7月18日、9月8日、11月20日および2011年1月23日の4回にわたり時間をとった研究会を行い、これまでのデータをま

とめた報告書を作成した。

様々な困難を抱えた人への発達支援の領域では、被虐待児への施設ケアについての研究を行った。児童養護施設や情緒障害児短期治療施設の子どもや職員を対象に、「問題行動」の実態やそれへの対応について聞き取り調査を行った。さらに、サインズ・オブ・セイフティ・アプローチによる、子どもたちとの創造的な話し合いのツールや「安全の家」づくりのプロセスを学び、実践研究を行うための準備をすすめた。

「発達の基盤形成を担う場としての幼児期のなかま遊びの成立の解析」を掲げたサブ・グループ（通称「育ちあいグループ」）では、6年に渡って実施してきた、創思館2階のトレーニングルームを使用した幼児の砂場遊びの観察研究の成果を、一冊の報告書にまとめた。「幼児同士の『わかりあいのコミュニケーション』成立におけることばの機能ー子どものことばは仲間との遊びを成立させるためにどのように使われるのか？ー」と題した本報告書には、これまで行ってきた学会発表5件、論文4件、ワークショップ1件の内容が収録されている。できあがった報告書は、関係する各方面の研究者・臨床家へ配布した。

なお、発達支援チーム全体では、2010年12月21日に研究会を行い、自閉症スペクトラム児の親のニーズに関する聞き取り調査研究の報告が行われたほか、チームの研究の進め方についての意見交換がなされた。

< 2011年度のまとめ >

成人期の発達研究領域では、成人期以降の発達に関する図書の共同執筆編集（「パラサイトシングル」、「不妊治療と人生展望」など）、学術雑誌の掲載（成人期への移行期である青年後期のアイデンティティ発達について）、学会発表（未婚者の結婚に対する態度と恋愛関係および両親の結婚生活の質（国外）、無子有配偶者の夫婦関係と親となることをめぐる意識（国内））、学会ワークショップ企画の開催（中年期夫婦の心理社会的問題 ※東北大学 神谷哲司氏との共同企画）、調査の実施・

分析（老親の成人子に対する夫妻間葛藤への介入期待）などを行った。

思春期・家族プロジェクトでは、困難を有する子ども・若者の総合的支援について実践及び研究を行っている。家族の貧困をはじめとする諸問題が、困難を有する子ども・若者の発達上の課題となり結実していることがある為、児童養護施設入所児のさまざまな虐待や不適切な養育と発達の危機及びサインズ・セイフティ・アプローチに関する研究を進めてきた。その結果は、「児童養護施設における生活指導・援助の課題」として報告を行った。また、内閣府の困難を有する子ども・若者の支援者調査企画分析会議委員として、全国の困難を有する子ども・若者支援の支援者を対象とした調査を行った。この結果は、内閣府HPで公表すると共に各自治体や支援機関、行政に報告書を配布した。また、ひきこもりの若者を対象としたインタビューを実施し報告書を作成した。さらに、韓日若者支援に関するシンポジウムならびに青年の親世代の夫婦関係をテーマとするワークショップなどに取り組んだ。

なかでも、2012年2月20日には、韓日若者支援シンポジウムを開始した。このシンポジウムには、韓国にあるニート・ひきこもり支援を目的とする社会的企業の共同代表李忠韓と、我が国において若者分野で協同実践を先駆的に展開するNPO法人文化学習協同ネットワークの佐藤洋作氏、青年教育学研究者の南出吉祥氏、若者を対象とするアウトリーチに取り組む佐賀の実践者谷口仁史氏を招いた。

このシンポジウムでは、現在の社会が若者に求める“ふつう”への適応による生きづらさの出現とそのいきづらさを克服する実践について検討を加えた。

発達障害児・家族プロジェクトの研究チームは、関わりに難しさを抱える子どもならびに家族の抱える困難に関わって、その具体的なニーズと支援のあり方を、発達支援の視点から捉えて実践的な研究を行うことを企図して発足したプロジェクトである。フィールドは、学校、家庭、地域、専門

機関などに及び、また、中国やベトナムなど諸外国の研究グループとの交流も位置づけた。本プロジェクトでは、今年度、主として、①関わりに困難のある子ども(幼児、児童、青年を含む)の療育活動の継続、②特別なニーズを抱える子どもとその家族に対するニーズ調査(これについては、産社論集に質問紙調査研究の成果を論文として掲載したほか、アジア太平洋自閉症会議(APAC)ならびに日本特殊教育学会大会にて報告した)、③発達障害児・者の生涯発達を見越した支援に関する研究(これについては、日本発達心理学会にて報告)などに取り組んできた。

育ちあいグループ(通称；正式名称は前出)では、3月の日本発達心理学会第23回大会にて「3歳児どうしの発話を生み出すものは何かー室内砂場遊びでのコミュニケーションの分析からー」と題したラウンドテーブルを開催した。本ラウンドテーブルでは、砂場遊びの観察データを再分析した内容のほか、自然場面での3歳児のおしゃべりの観察結果を加え、子どもどうしの発話が、「おしゃべり」から「わかりあい」に発展していく契機を探った。30名程度の参加があり、活発な議論が交わされた。

< 2012年度のまとめ>

成人期の発達研究領域では、生涯発達心理学に関する図書の分担執筆(「配偶者選択」、「家族のライフサイクル」など)、学会発表(無子有配偶者の親となることをめぐる意識と老親間葛藤(国外))、学会シンポジウムでの話題提供(中高年者のメンタルヘルスと夫婦関係)、助成期間中に行われた調査研究の総合的考察などに取り組んだ。また、研究対象にとって重要な存在とされる老親の問題に関連して、学会ラウンドテーブル企画を開催した(老年期の夫婦関係と人生の統合について)。

思春期・家族プロジェクトでは、2010年4月に子ども・若者育成支援推進法が施行されて以降、全国で子ども・若者育成支援地域協議会が結成され、困難を有する子ども・若者の育成に関する連携実践が進みつつあるなかで、滋賀県高島市を対

象とした連携実践の現状と課題につき調査を行うとともに、近畿圏を対象とした子ども・若者支援組織の支援者が支援力量を高める為の研修事業を行った。

高島市の実践は、近畿圏の中核市に満たない小規模の市町村における子ども・若者支援連絡協議会の役割を明確にすることを目的としている。まだ研究の途中にあるが、連絡協議会の課題は山積されている。なかでも、事務局を担う機関の負担が重くなり、増えつつある相談への対応が連携して行われていない状況は早急に解決されなければ、子ども・若者育成支援推進法の目的が十分に果たせない。

さらに、子ども・若者支援組織の支援者が支援力量を高める研修事業は、内閣府の委託を受け実施したが、計5回、9名の講師による研修となり、受講者登録者は56名となった。支援者研修受講者は、滋賀・京都・大阪・兵庫・和歌山から参加し、職種は、行政職・行政PSW・保健師・教員・ユースワーカー・NPO法人指導員等々であった。

関わりに難しさを抱える子どもへの発達支援のサブ・チームとしては、主として幼児期・児童期における高機能自閉症・アスペルガー症候群の子どもたちに対する発達支援のための療育プログラムの開発研究を行うことをめざして、今年度も療育活動を継続してきた。その成果を、2013年3月に開催される発達心理学会で、「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発」と題し年齢群ごとに分かれた3つのグループからそれぞれ報告を行った。また、発達障害児とその家族のニーズに関する日本・中国・ベトナムとの3カ国調査研究を継続してきた。今年度は、発達障害児を抱える個々の親の思いにアプローチする手法(ライフ・ライン・メソッド)を用いた中国での研究成果を同じく3月の発達心理学会で報告した。さらに、3カ国調査で得られた知見に関する補足的なまとめについても行うことを検討している。

育ちあいグループ(通称：正式名称は前出)では、「家庭保育のプロに聞く子育てを楽しいものにす

るために」と題した講演会および、『『大人としての発達』における『育ちあい』『支えあい』』をテーマにした研究会を12月に企画・実施した。講演会では、家庭保育の第一人者である、東京の育児サークル「わはは」代表、浜名紹代氏を招いて、子育てを楽しいものにする方法についてお話しいただいた。また、本グループ代表の高木和子氏との、「子どもを育てる」とことと「子どもと育ちあう」ことの違いに関する対談が行われた。研究会では、

至学館大学の浅野敬子氏、ゆりかご保育園の川島由里子氏をコメンテーターに招いて、「①組織作りをとおしての育ちー子育てサークルにおける連携・相互扶助」、「②保育士の仕事をとおしての育ちーキャリア発達を中心として」、「③親になることをとおしての育ち」の3つの発表があり、成人期の発達について、「育ちあい」「支えあい」という観点から議論が交わされた。

ケア・コミュニティチームの研究成果報告

チームリーダー：秋葉 武

ケアとコミュニティをキーワードとする本チームは領域別に各メンバーが実証的・理論的研究を行ってきた。領域別の実証的研究としては、主として以下のような成果を得ることができた。

1. 「男性介護」領域の研究

本チームが誕生する母体となった「男性介護」領域では、「男性介護者のケア・コミュニティ構築と包括的家族介護者支援に関する実践的研究」を主題とする研究が進展した。具体的には、男性を介護者とする家族介護の実態調査を通じて、家族介護が直面している問題を具体的に析出するとともに、介護当事者と支援者が構築しつつあるケア・コミュニティについての実践的研究として構想した。また本研究は、制度レベルでの支援のみならず、家族介護者支援のあり方として、男性介護者自身の組織化とエンパワメント・アプローチに着目してきた。この支援は、家族介護者支援の有効な支援モデルとなると同時に、地域社会で家族介護者支援に関わる多様な援助職の援助アプローチのあり方としても活用しうる具体的な提言となると考えた。そして長期的には、ケアを排除して成り立つケアレスマンモデルから脱却し、ケアをインクルーシヴした社会＝ワーク・ライフ・ケア・バランスのあり方を射程に収める研究として、その展開可能性を展望した。

本研究の内容は、①男性介護者の介護実態を明らかにし、特に家族介護者の社会参加の実態とそれを阻害する諸要因の解明を行いつつ、本研究テーマ「ケア・コミュニティ」の開発課題を介護者運動とその相互作用によって構想した②介護保険など介護支援制度の現状と課題を、男性介護者という利用者視点から把握した。その際、就労支援型介護サービスの開発課題など介護と仕事の両立(ワークライフバランス)という視点にも着目し

た③ケア・コミュニティ開発のプログラム及び家族介護者支援を提起すること、である。

参与観察も含め、この3年間にメンバー(津止正敏ら)が全国の団体参加・講演・交流・助言・情報交換に関与した活動や団体は30以上にのぼっており、男性介護者同士の交流を広げる取り組みが全国に広がっている。これら団体には、介護体験を語る、そして聴くということ以外に特別なメニューが揃っているわけでもない。ただ、介護する男性という同じ立場の人と唯一交流できる場であり、だからこそ気兼ねなく自分自身のプラス、マイナスも含めた介護感情を飾りなく吐露出来る場になっている。ただひたすらに話す人、聞き上手、頷くだけの人たちが織り成す短い交歓には「ひとりじゃない」という確かな実感がある。介護によって社会との関係を絶たれた男性介護者の社会性を回復する場でもある。自分も含め同じような立場の人への思いやりや気遣いは、失いつつあった社会との接点や連帯感を実感し新たに修復するような貴重な関係性に溢れている。

また介護体験記での反響に表れているような介護体験を「書く／読む」というプログラムとしたが、本研究ではこの自らの介護体験を「語る／聴く」プログラムとして整理してみた。ケア・コミュニティの開発ツールとしてすこぶる有効なものとなっている。

男性介護で当事者が戸惑うのは排泄や入浴、清拭、食事援助、移動介助などといった介護だけではない。これまでの暮らしや働き方などあらゆる矛盾が、介護と共に一斉に吹き出してくる。一言で言えば、男性介護者には、介護はもちろんだが、慣れない家事にも戸惑い、収入は減り出費はかさむという貧困化に苦しみ、離職に伴って社会との接点が断たれて、24時間介護付けという社会との接点を欠いた孤立した生活にもがく。介護から

派生する諸課題が立ちはだかっているということだ。ケア・コミュニティの開発と包括的家族介護者支援の課題である。

ただ、以下のようにも言える。多くの参加者が実感する同じ立場の人との共感や気遣いは、彼らが介護によって失った社会との関係を、今度は逆に介護という体験を通して修復する。社会関係の再帰性だ。このコミュニティは社会との接点を修復しさらに太くしていくような場、空間、関係である。「ほっておけない」という「ケアの衝動」ともいうべき介護によって繋がる人と人の関係性は、経済合理性という「市場」がつくる関係性の制約を乗り越える。現状では萌芽的ではあるが、ここにケア・コミュニティの可能性があると私たちは考える。男性介護ネットが主宰する体験記募集のコピー「あなたの介護体験を社会の共有財産に」は、人称(あなた)と非人称(社会)のコミュニティ(連帯)を繋ぐスローガンといえる。

2. 各領域の研究

その他、関連領域で様々な研究が進展した。

(1)「ケアと女性」領域では①ワークライフバランスおよび女性の Quality of Life に関する研究。②福祉レジーム論を基盤とした女性労働の国際比較研究。③社会科学・人文科学の方法論に関する研究。を行った。まず①ワークライフバランスおよび女性の Quality of Life に関する研究について、かつてはマクロ(国)レベルではマイナスの関係であった先進国の女性労働力率と出生力の関係が、近年プラスに転じたことが明らかになるにつれて、極低出生率に悩まされている日本でも女性が働きやすい環境を可能にする制度づくりにますます注目が集まるようになってきている。女性が働きやすい環境の整備には、非賃金労働(主に女性が担っている家事・育児・介護)における支援と、賃金労働における支援の両面を考える必要がある。筒井(2010)においては、日本において家事労働が極端に女性に偏っている要因について、不公平感を分析することでそのメカニズムの一端を明らかにしている。

次に②について。女性労働及び制度の国際比較研究の成果から、女性の賃金労働および非賃金労働のパターンとして、以下の3つが存在することが明らかになりつつある。ひとつは北欧において見られる女性の公的雇用を媒介にした再生産労働の社会化の方向性。次に北米や一部の東アジアにおいて見られる移民によるケア労働の調達方向性。最後に家族主義的福祉レジームにおける、性別分業体制である。Tsutsui (2012)においては、日本がこの最後のパターンに入ることを示し、そういった社会においては、エスピン＝アンデルセンが指摘した女性労働力が活用されないことによる非効率性の問題の他に、結婚のマッチングが成立しにくくなることに起因する労働供給不足の問題が存在しうることを指摘した。

最後に③である。社会学は人文学と社会科学が交差する学問領域であり、内部でも研究方法が多様である。他方で、異なった研究方法をとる研究者(典型的には質的研究を行う人と量的研究を行う人)のあいだの実質的な共同研究が難しいという問題が生じており、研究会(「人文学・社会科学における質的研究と量的研究の連携の可能性」)の主催を通じて、主に質的研究と量的研究がいかにして有意義な連携を実行できるかを模索している。

(2)「心理主義」領域では心理主義化をめぐる理論的考察と、それを踏まえた実証研究並びに調査方法論を検討した。まず理論的考察から述べる。本研究期間の最初の取り組みとしては、感情社会学の成果を広く一般にわかりやすく説きつつ、かつ、従来に視点到欠していたものとして「他者の感情操作」を取り上げたものがある。「感情を社会学的に考える」がそれである。

そこでは、広く医療・介護におけるケア行為が他者感情を管理することで成り立つことを指摘すると同時に、広くセラピーやカウンセリングの技法を取り入れつつあることによって、容易に他者の感情を社会的に「望ましい」ものへと誘導していく傾向があることを指摘した。そして同時に、

それが現代社会における心を通した統治の一端となりうることを示した。

それを受けてより広く、現代社会における心理主義化と統治の関連を分析したのが「心」を求める社会」である。そこでは、日本社会における心理主義化の源泉を戦後の臨床心理学の輸入に端を発した心理学の拡張に見いだし、それがネオ・リベラリズムの社会潮流の中で、労働・人間関係にコミュニケーション能力の高さが望まれる中で90年代以降、各所へのカウンセラーの配置、人間関係のマニュアルの心理学化等によって進展したことを指摘した。

また同時に、それらを心理主義による人間関係・自己の疎外として批判するのは一面的であり、むしろ現代社会においては「人間力」というコトバに見られるように個々人によって「望まれた」ものである側面も強く、批判の力点を疎外論ではなく能力要求の過剰に伴い、そこからこぼれる層の社会的排除に求めるべきことを示した。

次に、実証的研究の成果に移ろう。まずは、上記した心理主義化の流れとも関連しつつ、近年の社会調査論において「当事者性」が過度に強調される傾向に疑義を示したものとして「社会と感情が交錯する地点に向けて」がある。そこでは、まず現代社会学における当事者性の強調が、実際には調査における分析の深化ではなく調査対象者との関係の＜深化＞ないしは過度の同一化でしかないこと、またその際の調査技法としてカウンセリングの技法が称揚されがちであることを確認した。そして、これらの流れには2つの問題があることを指摘した。第一には「オーバーラポール」という問題である。過度な当事者との同一化は、調査を単なる代弁以下のものにする危険があるにも関わらず、それが称揚される傾向を批判した。第二には、社会的な場(ポジショナリティ)への配慮の不足である。安易に当事者性を主張することは、場合によっては当事者像を一面化すると同時に、主意主義による解決を提唱することで制度政策での支援を後退させる危険性がある。これら二点はいずれも古典的な社会調査論のアポリアでも

ある。

そうした点を踏まえつつ、この三年間の仏教ホスピスへの質的調査の成果をまとめたのが「仏教ホスピスにおける相互行為の技法」である。そこでは、仏教がその宗教色を薄めることで、日本におけるホスピスの初期展開の中で受け入れられたことを示した。だが一方で、死生をめぐる聖なる天蓋を支えるものとして、さまざまな仏教的な小道具がホスピスの意味世界と相互行為を、日常と死生との狭間の中で展開出来るようにしていることを示した。

(3)「司法臨床」領域では、廣井亮一によって現代社会が抱える深刻な課題である、少年非行、児童・高齢者虐待、ドメスティック・バイオレンス(DV)、離婚に伴う子どもの奪い合い、などの問題解決のための「司法臨床」(司法的機能と臨床的機能の両者の交差領域に浮かび上がる問題解決機能)によるアプローチが展開された。すでにその研究の基盤は、『司法臨床入門―家裁調査官のアプローチ』(2004, 日本評論社)、『司法臨床―現代のエスプリ 472』(2006, 至文堂)、『司法臨床の方法』(2007, 金剛出版)、『加害者臨床―現代のエスプリ 491』(2008, 至文堂)、等で構築した。

それらを踏まえて、この3年間の主な研究成果としては、著書、論文、学会発表を通して、「司法臨床」の概念について我が国の学術学会でさらに展開させたことである。

学会では、日本家族心理学会(2009)や日本家族研究・家族療法学会(2010)の大会企画ワークショップで「司法臨床」がテーマとされ、法と心理学会第11回大会(2010年)の大会シンポジウムテーマ(「司法臨床」の可能性)になった。さらに、日本臨床心理士会では、定例職能研修会で2012年に第1回「司法・法務・警察領域専門研修会」が開催され、司法と心理臨床の協働についての研修会が実施された。このようにみると、「司法臨床」という概念は、我が国の学会においてすでに認知されたといえるであろう。

(4) ケア・コミュニティの発達に關与する「制度的環境」領域では、制度的環境について、日本・スウェーデン・英国について、国際研究セミナーなども開催しつつ、研究をすすめた。日本については、慢性疾患の予防について医療保険者が責任を持つ構造となり、より予見的な対応が求められるようになっている。このような中で、地域において財政・供給の調整をふまえたケア組織の在り方を探るためには、政策課題の設定を行うことが重要であることが明らかになった。また、ケア・コミュニティに参画する医師として、プライマリ・ケアを担う医師の重要性とそれを担う制度の在り方を検討し、規制によるハード・ロー的な資格ではなく、専門団体によるソフト・ローと標榜化の新設によるソフト・ロー的展開の可能性を示した。

医療・福祉におけるエンパワメントについては、貧困や社会排除の問題が顕在化してきている中で、社会排除と医療利用との問題について、文献的研究を行うとともに、医療スタッフがどのような事例に遭遇しているかについて検討を行った。文献的研究によって、米国ではサービスを十分受けられていない人(Underseved)という概念によってさまざまな困難に直面している人々の状況が検討され、また施策として取り組まれていることが明らかになった。同時に、生活が不安定な人々を社会弱者(vulnerable people)としてとらえて、公立病院やコミュニティ・ヘルス・センター(CHC)等で取組が行われていることも明らかになった。国民皆保険制度が維持されているものの、国民健康保険における資格証明書の発行など、日本においても事実上無保険の状態となっている人々もいる。事例検討では、元受刑者などのおかれている療養・生活上の問題が報告され、生物・心理・社会・文化など多様な次元での診療能力が求められることが示された。また、孤立等の社会排除の問題が広がる中で、社会的困難に直面している人々の医療利用上の問題や、それらの人々に合致した診療サービス提供のあり方を検討が課題になっていることが明らかになった。医療

現場での対応を考える場合に、診療能力(clinical competency)の一部として、社会背景の理解・社会的対応に關わる能力(social competence)、文化的な能力(cultural competencies)の重要性が示された。

(5) 「コミュニティ・社会・歴史のトラウマと支援」領域では、個人もコミュニティもトラウマによって影響を受け、修復されないまま放置されると、世代を超えて伝達されていくが、同時に、トラウマを跳ね返し、逞しく生き延びていく力(レジリエンス)が備わっている。人は逆境を超えてどのように豊かな生を営んでいくことができるのか、医学モデルを超えたトラウマ支援を模索してきた。

ひとつには、東日本大震災からの復興支援プロジェクトを立ち上げ、「東日本・家族応援プロジェクト」を2011年、2012年度と実施し、研究報告を行ってきた。ふたつめとして、歴史のトラウマと和解修復に關するセミナーや国際シンポジウムの開催、報告書の発行を行ってきた。その他、心理と司法が協働するなかでコミュニティの修復をはかる研究、文学作品から戦争トラウマの痕跡を読み解く研究などを行った。

(6) 「日韓の高齢者支援」領域では、非営利組織論の立場から日本、韓国の(直接、間接的に高齢者支援に關わる)NPOの研究が展開された。高齢化が急速に進行している日本、韓国の両国は2000年代以降、介護保険制度の施行(日本は2000年、韓国は2008年)をはじめとして高齢化福祉、ケアの「制度化」を進めてきた。同時に、両国とも専門家を主体とするケア支援の「限界」もマクロ、メゾレベルで顕在化し、NPOやボランティア団体といった社会資源の役割はさらに重要になっていると考えられる。それらを実証的に分析する中で、高齢者の生活に生き甲斐をもたらす社会的なネットワーク形成、非制度的な社会資源の開拓に注目して研究を進めた。

アーカイピングチームの研究成果報告

チームリーダー：佐藤 達哉

本チームでは、様々な種類の情報の保全と整理を行うことで、人間科学の研究と実践を充実させることを目的とした。本報告書では特に、データをわかりやすく表示、かつ蓄積するための三次元キューブの開発を軸に、それを用いた事例についての検討を中心に述べる。

(1) 3次元キューブによる可視化システムの開発と情報理論の構築

まず、図的表現の歴史的展開を振り返った。古代エジプトに幾何学的手法が発明され、ルネッサンス期に透視図法が確立された。1960年代以降、コンピュータの画像処理技術によって様々な数学的モデルの表現が可能となった。

第二に、高度情報化社会、あるいはデジタル環境における図的表現の役割について考察した。Web環境におけるe-リサーチに必要な要件の整理をおこない、「データベース化」段階、「ネットワーク化」段階、「視覚化」段階という3ステップからなるフレームワークを提示した。特に「視覚化」段階の重要性について掘り下げて言及し、「認知的負荷の低減」「知見導出の具体的支援」「資料空間の把握」の3つの観点から考察を加えた。

また、ユーザーインターフェースにFlashやJavaアプレット、Ajaxなどを用いて、単純なHTMLで記述されたページよりも操作性や表現力に優れたWebアプリケーションであるRIA (rich internet application)の重要性と「ページの表現」からの脱却の必要性などを指摘した。

われわれが開発するKACHINA CUBE (KC) は、1次元を時間軸、残りの2次元をマップ(空間的もしくは概念的)とするものであり、このフレームワークの中に多様な情報をプロットすることができる。ユーザーは、プロットされたフラグメントをクリックすることで、個別のデータの詳

細を確認できる。

なお、KC ver.2では、Data-Diving機能が追加された。時間軸とマップから構成される3次元空間(親キューブ)内にある任意の子キューブ(フラグメント)をクリックすると、親キューブの中に“ダイブ”するかのようにビューがズームインしていく。また、一歩ひいたビューで親キューブを鳥瞰し、子キューブ(データ)の分布を分析する行為と、親キューブ内にダイブし、子キューブに格納されている詳細情報を閲覧する行為を柔軟に切り替えることができる。一般に、資料やデータの分析を行う際に「木(要素)を見て森(全体)を見ず」「森を見て木を見ず」といった視点の偏りが生じがちであるが、この機能は「森と木を自由かつ柔軟に行き来できる」画期性があると考えられる。

本システムを用いることで、特定のデータベース全体を視覚的に俯瞰することが可能であると同時に、断片的なデータの詳細を分析することが可能となる。大量の資料と対峙する際、この脱「ページ」表現としての立方体型情報ビューアーを用いることによって、認知的負荷が低減されることが示され、3次元RIAの可能性やビジュアルマイニングの有用性が示唆された。

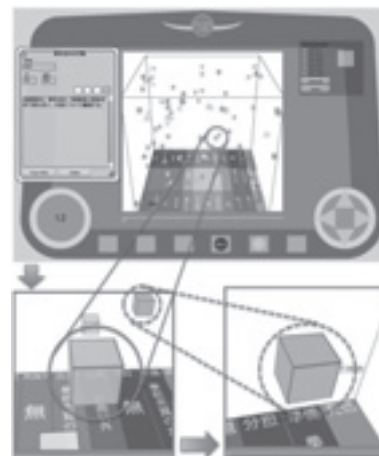


Fig.1 KACHINA CUBE と Data-Diving 機能

(2) 情報的正義概念の構築

一般に情報倫理といわれる概念について、「情報的正義」という観点から資料・情報を保存する有効性について考えてきた。多種多様な情報に向き合い、それらを咀嚼した上で社会的判断を下すこと、またそのような判断が可能であることが担保されている状態を情報的正義と定義した。

当人にとって不利益かもしれない情報(病歴・障害歴など)の扱いが大きな問題のひとつとなっており、この点を情報的正義の見地から議論を行った。

情報的正義を実現するためには、大量の情報を処理する際に生じる認知的負荷を低減すること、固定的な見方に囚われず、柔軟に多様な観点から情報を概観するマルチプルパースペクティブの実現が必要といえる。KACHINA CUBE は、このコンセプトを具現化しうる有用なツールであると思われる。

(3) 刑事裁判における供述調書の理解を促進するツールの検討

裁判員制度によって、市民が刑事裁判に参加することになった。法律の「素人」である市民が「わかりやすい」裁判を実現するためには、供述調書が信用できるか否かを判断するための工夫が必要である。その鍵となるのが視覚的な工夫である。刑事事件での被告人や証人の証言、供述調書の評価に関する供述心理学の技法のひとつとして供述分析がある。日本においては、心理学者の浜田寿美男が供述調書そのものを題材とした研究を行っている。虚偽自白を含む供述調書は、詳細に分析することによって内容に不合理な点を見つけることができるという(浜田式供述分析)。

供述のプロセスを視覚化するために、複数の対立する主張を複線経路・等至性モデル(TEM)を用いて整理した。これは、人間の行動、特に何らかの選択とその後の安定や変化を複線性の文脈で描くための枠組みである。検察側と弁護側が対立している裁判でも、最終的にはひとつの結果に至る(等至点)ことから、TEM を用いることで2つ

の対立する経路について検討することが可能になる。

事件の時間の流れ、事件における対立軸、供述の時間的順序の3つの次元をそのまま生かすには、3次元表現が必要となる。そのために前述のKACHINA CUBEを用いた。KC、TEM、浜田(Hamada)式供述分析という3つの手法を用いたことから、KTH CUBE システムと名づけた。なお、KCでいうフラグメントに該当するのが、被告人の供述調書における出来事一つひとつの項目である。

被告人が供述した事件の事象についての概念マップを作成し(Fig. 2)、供述調書が録取された時間軸を用いて3次元で表現することで、フラグメントに関するマップ、時間の観点からみた分布が視覚化される。このように作成された KTH システムを用いて供述調書を参照することで、被告人の中には検察官が主張する項目を一切通らない経路を供述していること、検察官が主張する項目よりも弁護人の主張する項目を通る経路を供述していることが多いということが視覚的に示されやすくなった(Fig. 3)。

したがって、KTH システムの運用によって裁判員が虚偽自白検出を行ないやすくなる可能性が示唆された。



Fig.2 KTH の元となる地図

開始	揺む	接触	転倒	対峙	暴行	強奪	致傷	強奪	逃走
	両手	抜ける	転倒	無	無	無		有	
走る	右手				両手・両脚		倒れる		逃げる
	左手	抜かず	保持	有	右手・左脚	有		無	

Fig.3 供述調書における経路の分布

また、参照する媒体(紙条件、ビデオ条件、KTH条件)によって、理解度テスト、わかりやすさ評価、事件経緯の判断でいかなる違いが出るのかという検証実験を行った。3条件の比較から、KTH条件と他の2つの条件との間には有意差はみられなかった。事件の判断においてもKTH条件は確信度が低く、誤答しやすい傾向が明らかになった。KTHシステムが誤答を誘引し、わかりやすく提示できない理由としては、実験時間の長さやKTHシステムの機能性、操作性も要因となっている可能性が示唆された。

本研究の意義は、KTHシステムの弱点について把握することができたことである。KTHシステムが本来は供述分析の結果を示すためのものであったことから、作成側が「わかりやすい」とたとえ判断したとしても、提示される側にとっては非常に「わかりにくい」状態になりやすかった。作成者による説明がない限り、作成した側と提示された側との間には「わかりやすさ」について認識に違いが生じてしまう可能性が示唆された。以上のことは、将来的にKTHシステムを実際に裁判で用いる場合には必要不可欠な検証であると言える。今後は、わかりやすさに関する探索的な研究、KTHシステム使用の説得場面の研究などが必要である。

(4)政策決定過程の可視化と分析

政策決定に国民が関与する方向になることをに

らみつつ、ゲーミング・シミュレーション(GS)とKTHを組み込んだ支援システムを構築した。

本研究で対象としたGSは、実際に行なわれた議論を題材とした(本研究は福島第一原発事故の前に行われた)。「高速増殖炉もんじゅ建造」の歴史的経緯を参考に、1. 建造決定～完成、2. 運営～安定、3. 事故発生、4. 運営再開という4つのイベントを発生させ、これに対する態度および意見の表明を求めた。その議論に携わるいずれかのステークホルダーの立場から、参加者に仮想的な議論を行なわせた。これには、実際に起こった事象を他者の立場からダイナミックに経験させることで、多角的な視座と体験を通じた理解を獲得させるという狙いがあった。ただし本研究では、KTHキューブとの連携を視野に入れているため、発言をすべてコンピュータ・ネットワーク上でを行い、全員の発言を随時自由に閲覧できるようにしたうえ、実験者の指示に従って議論に対する態度を表明できるツールを独自に開発した。

このシステムの効果を検証した結果、GSは参加者の視点の多角化と体験を通じた理解の獲得に寄与し、KTHによる可視化はGSの結果を直感的に提示することに成功していると判断できた。

GSの特徴は、文章が伝えられない、議論のダイナミズムを体感できるところにあるが、第三者はおろかGSに参加した当事者でさえ、そのダイナミズムを顧みることが困難である。しかし、KTHキューブはそれを可能にする。今回提案したシステムを使えば、政策決定にまつわる多様な意見の変化や錯綜を表現できる道も開かれると思われる。

(5)災害情報の蓄積と活用

多量の情報から重要なものを取り出す技術を開発し、アーカイブの情報が持続的に活用される方法について検討した。内閣府が公表している阪神淡路大震災の震災教訓資料集の情報を、底面に被災地の地図、縦軸に時間軸が設定されているKACHINA CUBEに入力し、それぞれの情報がいつ、どの地点に関わる情報かを一覧できるよう

にした。その結果、大量の資料情報が地理的、時間的に整理されて全体像の理解が進み、情報の分布をきっかけにして細部を検討することが可能となった。

次に、東日本大震災の情報の活用について検討した。再び来るかもしれない大地震に備えるためには、これまで集積された大量の情報のなかから、教訓となる意味のある情報を抽出することが重要である。人々の経験あるいは語りのなかからそのような情報を抽出するために、どのような情報の視覚化が有用であるかの検討を行った。茨城県鹿嶋市によって実施された質問紙調査の結果を基に、表、テキストマイニング分析、KC システムを用いた視覚化のそれぞれの特徴を検討した。その結果、すべての視覚化において情報の論理的理解が進められることが示唆された。



Fig.4 災害情報の表示

一方で、情報における重要語の抽出にはテキストマイニング、情報の空間的および時間的な関連の把握には KC システムが有用であることが示唆された。表とテキストマイニングによって情報の概要と重要概念の理解を深めた後、KC によって各情報の空間的、時間的な関係をみることで、意味のある情報を抽出する方法が有用であると考えられた。

(6) 対人援助の現場における個人情報の取り扱い

多様な文脈から検討を行った。特に、障害児・者の就労に関する継続的支援のあり方について、

全国規模の調査を行うチームに参加した。そこでは、この問題の現状と、個々の団体・機関が情報蓄積と移行についてどのように考えているのかが検討された。このほか、人類学・科学史・社会学などの文脈における個人情報の取り扱いに関する倫理について検討を行った。これに関連して、戦前日本の傷痍軍人団体に関する資料を収集している。また戦後日本の患者・障害者団体の発行物を収集保存する方法論を構築している。

さらに、学内に保存・貯蓄システムを構築する方途を探っている。具体的には、情報バンクの使い方や、研究倫理にかかわってデータ保存をどのように体系的に行うのかについての理論的実践的検討を行っている。資料保存の前提となる患者・障害者のあり方について、心理学の方法論によって記述するための方法論開拓、特に質的研究法の開拓も行った。

(7) 経営情報管理モデルの提案

経営情報を管理するツールとして KACHINA CUBE ver.2 を用いるため、以下のような運用シミュレーションを行っている。

- (a) 組織情報の共有と人事労務管理 組織の人員構成や部・課単位のタスク管理といった企業における組織マネジメントを行う。
- (b) 顧客の声の共有 特定の製品や商品についての顧客の意見、あるいは特定企業が提供する何らかのサービスに対するクレーム等を KC ver.2 を用いて視覚化・アーカイブ化するという試みである。
- (c) 戦略分析と意志決定支援 マーケティングにおいて、しばしば活用される SWOT 分析(表)やポジショニングマップに時間軸を加えることで、自社のマーケティング戦略を時系列にしたがって視覚化するという試みも行っている。

以上のように多種多様な情報を一覧し、格納し、活用するための技術的、理論的研究を行った。引き続きこれらの研究を進めつつ、他の用途についても検討していく予定である。

研究業績のウェブリンク先

本事業の論文等の研究業績のうち、ウェブ上で公開されている成果の一部を下記に掲載する。

孫琴・吉田甫・土田宣明・大川一郎

「高齢者を対象とした SRC 課題における復帰抑制(2) —不適合条件を中心とした検討—」

立命館人間科学研究, 21, 2010, 1-8

http://www.ritsumei-human.com/uploads/publication/ningen_21/p001-008.pdf

林炫廷・中鹿直樹・望月昭

「知的障害のある生徒に対する写真撮影を利用した報告言語行動の増大」

立命館人間科学研究, 22, 2011, 87-96

http://r-cube.ritsumei.ac.jp/bitstream/10367/2202/1/GL22_087lim.pdf

Funder, D. C., Guillaume, E., Kumagai, S., Kawamoto, S. and Sato, T.

“The Person-situation Debate and the Assessment of Situations”

Japanese Journal of Personality, 21, 2012, 1-11

<http://rap.ucr.edu/JJPFunderetal.pdf>

山本耕平

「ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって—若者問題に関する韓日間比較調査から—第1報」

立命館産業社会論集, 46 (4) , 2011, 21-42

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/sansharonshu/464pdf/02-02.pdf>

東山篤規・下野孝一

“Apparent depth of pictures reflected by a mirror: The plastic effect”

<http://www.atgcchecker.com/pubmed/22791187>

下野孝一・東山篤規

“Editorial: Three dimensional visual space: Phenomena, theories, and applications”

<http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/j.1468-5884.2011.00508.x/full>

Stevanov, J., Marković, S., Kitaoka, A.

“Aesthetic valence of visual illusions”

<http://i-perception.perceptionweb.com/journal/1/volume/3/article/i0455aap>

Ashida, H., Kuriki, I., Murakami, I., Hisakata, R., Kitaoka, A.

“Direction-specific fMRI adaptation reveals the visual cortical network underlying the “Rotating Snakes” illusion”

<http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S105381191200314X>

藤健一

「ハトの集団飼育場面における成員操作による各個体の体重および摂食行動の変容」

立命館文学, 620, 2011, 118-123

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/rb/620/620PDF/fuji.pdf>

松田亮三

「普遍主義的医療制度における公私混合供給の展開—スウェーデンにおける患者選択制の検討」

海外社会保障研究, 178, 2012, 4-20

<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/19653402.pdf>

中村正

「親密な関係性における虐待・暴力と加害者臨床論—虐待的パーソナリティ論の検討をととして—」

立命館産業社会論集, 46(1), 2010, 139-153

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/sansharonshu/461pdf/04-02.pdf>

北岡明佳

「顔の錯視のレビュー」

BRAIN and NERVE, 64(7), 2012, 779-791

<http://ej.islib.jp/ejournal/1416101242.html>

都賀美有紀・毛留幸代・星野祐司

「音韻情報の記憶が高齢者における順序の短期記憶に及ぼす影響」

立命館人間科学研究, 21, 2010, 57-66

http://www.ritsumeihuman.com/uploads/publication/ningen_21/p057-066.pdf

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」
研究成果報告書

	平成 25(2013)年 3 月発行
編集・発行	立命館大学人間科学研究所
	http://www.ritsumeihuman.com/
	〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
	TEL (075)465-8358
	FAX (075)465-8342
印刷	株式会社こだま印刷所
	〒604-8455 京都市中京区西ノ京藤ノ木町16
	TEL (075)841-0052
	FAX (075)811-7873